

岩 金 遺 跡

発掘調査報告書

2007

序 文

本書は、大分県教育委員会が大分県宇佐土木事務所の依頼を受けて実施した、都市計画道路柳ヶ浦上拝田線道路改良工事に伴う岩金遺跡の発掘調査報告書です。

遺跡の所在する宇佐市周辺には弥生時代の別府びう遺跡をはじめ、古墳時代の川部・高森古墳群、古代の法鏡寺廃寺跡が所在しています。また八幡宮の総本社である国宝宇佐神宮など、県下でも最も多くの史跡や文化財が所在しています。

岩金遺跡の発掘調査の結果、弥生時代から古墳時代の竪穴住居跡や遺物、中世の水路跡などの遺構が発見され、当地における人々の生活の跡をみることができました。

本書が埋蔵文化財に対する保護・啓発、さらには、学術研究の一助となれば幸いです。

終わりに、この発掘調査に多大な御支援と御協力をいただきました関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

平成19年3月30日

大分県教育庁埋蔵文化財センター所長

小 玉 学 司

例 言

- 1 本書は、大分県教育委員会が大分県宇佐土木事務所の依頼を受けて実施した、都市計画道路柳ヶ浦上拝田線道路改良工事に伴う岩金遺跡の発掘調査報告書です。
- 2 本書に掲載した遺跡は大分県宇佐市大字上田字岩金に所在する岩金遺跡である。
- 3 本書の図版中の番号は挿図の遺構番号と遺物番号である。
- 4 本書に掲載した遺構写真と遺物写真は調査担当者が撮影した。
- 5 本書に掲載した遺構図は調査担当者の2名で行い、吉田朋史（現・鳴門市教育委員会）の協力得た。
- 6 出土遺物の実測図作成とトレースは麻生廣美、小野富美子、西嶋スミエ（大分県教育庁埋蔵文化財センター所属の整理作業員）が行なった。
- 7 本書の編集・執筆は綿貫俊一が担当した。



岩金遺跡の空中写真

前方、橋のかかっているところが駅館川で、その上左方向の部分に川部・高森古墳群がある。



岩金遺跡の空中写真

目 次

序文	SH 8	28
例言	SH 9	28
巻頭カラー写真	SH10	30
第 1 章 調査の経過	SH11	32
第 1 節 調査の経緯	SH12	33
第 2 節 発掘調査の組織	SH13	33
第 2 章 遺跡の位置と環境	SH14	34
第 1 節 遺跡の位置及び地理的環境	SH15	37
第 2 節 遺跡と周辺の歴史的環境	SH16	39
第 3 章 遺跡と遺物の調査内容	SH17	40
第 1 節 古墳時代の遺構と遺物	SD 1	43
SH 1	SD 2	43
SH 2	SD 3	44
SH 3	SD 4	50
SH 4	SD 5	50
SH 5	表面採集の遺物	50
SH 6	第 4 章 まとめ	51
SH 7		24

挿 図 目 次

第1図	岩金遺跡と周辺の遺跡	3	第41図	SH14実測図	35
第2図	岩金遺跡発掘調査区位置図	4	第42図	SH14出土土器実測図	36
第3図	岩金遺跡の遺構配置図	5	第43図	SH14出土砥石実測図	37
第4図	SH 1 実測図	6	第44図	SH15実測図	38
第5図	SH 1 出土土器実測図 (1)	7	第45図	SH15出土土器実測図	38
第6図	SH 1 出土土器実測図 (2)	8	第46図	SH16実測図	39
第7図	SH 1 出土土器実測図 (3)	9	第47図	SH16出土土器実測図	40
第8図	SH 1 出土石器実測図	10	第48図	SH17実測図	41
第9図	SH 2 実測図	11	第49図	SH17出土土器実測図 (1)	41
第10図	SH 2 出土土器実測図 (1)	12	第50図	SH17出土土器実測図 (2)	42
第11図	SH 2 出土土器実測図 (2)	12	第51図	SD 1 実測図	43
第12図	SH 2 出土土器実測図 (3)	13	第52図	SD 1・SD 2 出土土器実測図	43
第13図	SH 2 出土土器実測図 (4)	14	第53図	SD 2・SD 6・SD 7 実測図	44
第14図	SH 2 出土土器実測図 (5)	15	第54図	SD 3 出土土器実測図	45
第15図	SH 3 実測図	16	第54図	SD 3 出土土師器・白磁・石製品実測	46
第16図	SH 3 出土土器・石器実測図	16	第56図	SD 4 出土土器実測図	47
第17図	SH 4 実測図	17	第57図	SD 5 出土土器実測図	47
第18図	SH 4 出土土器実測図	18	第58図	表面採集の遺物実測図	48
第19図	SH 5 実測図	19	第59図	Ⅱ区出土土器・白磁・土錘実測図	49
第20図	SH 5 出土砥石実測図	20			
第21図	SH 5 出土土器実測図 (1)	20			
第22図	SH 5 出土土器実測図 (2)	21			
第23図	SH 6 実測図	22			
第24図	SH 6 出土土器実測図 (1)	23			
第25図	SH 7 実測図	24			
第26図	SH 7 出土土器実測図 (1)	25			
第27図	SH 7 出土土器実測図 (2)	26			
第28図	SH 8 実測図	27			
第29図	SH 8 出土土器実測図	27			
第30図	SH 9 実測図	28			
第31図	SH 9 出土土器実測図	29			
第32図	SH 9 出土砥石実測図	30			
第33図	SH10実測図	31			
第34図	SH10出土土器実測図	31			
第35図	SH11実測図	32			
第36図	SH11出土土器実測図	33			
第37図	SH12実測図	34			
第38図	SH12出土土器実測図	34			
第39図	SH13実測図	35			
第40図	SH13出土土器実測図	35			

第1章 調査の経過

第1節 調査の経緯

都市計画道路柳ヶ浦上拝田線は、宇佐市の上拝田から柳ヶ浦を南北に結ぶ県道である。沿線には宇佐市や県関係の官庁が並ぶ官庁街が有るほか、宇佐平野を東西方向に延びる宇佐別府道路、国道10号線、県道23号中津高田線等の主要幹線を南北に結ぶ幹線道路である。こうした地理上の重要幹線であることから近年交通量が増加しており、大分県宇佐土木事務所による平成16年からの道路改良が計画された。大分県教育委員会は年度毎の工事予定地に対し、関係部局と調整を図りつつ、立会調査、試掘調査を行ってきた。平成16年度工事予定地の分布調査では、周知の遺跡である麴庵遺跡の北東50m付近にあるが、低地でかつての駅館川の氾濫原とみられたことから立会調査が必要なCランクとしていた。

大分県土木建築部企画検査室から平成16年1月16日付けの立会い調査依頼が提出された。これを受諾する平成16年2月25日付け通知を大分県教育委員会は県土木建築部企画検査室に提出し、平成16年2月26日に立会調査を行った。その結果、住居跡と思われる遺構が検出され、発掘調査が必要であることを県土木建築部企画検査室に通知した（平成16年3月12日付け教委文第5300号）。県教育委員会の通知を受けた大分県土木部企画検査室は、平成16年3月30日付けの文書による発掘調査依頼を提出した。県教育委員会はこれを受諾し、平成16年4月20日から平成16年8月15日までの予定で発掘調査を行うことになった。

第2節 発掘調査の組織

事業主体者 大分県宇佐土木事務所

調査主体者 大分県教育庁埋蔵文化財センター

調査体制	発掘調査責任者	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長	伊藤正行
	総務担当者	〃	次長兼総務課長 益永孝則
	発掘調査調整	〃	調査第一課長 高橋 徹
		〃	調査第一課主幹 栗田勝弘
	発掘調査担当者	〃	調査第一課副主幹 綿貫俊一
		〃	調査第一課嘱託 谷 尊祥

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置及び地理的環境

岩金遺跡は大分県宇佐市大字上田字岩金に所在する。

岩金遺跡の所在する宇佐市は国東半島の西側の豊後高田市と福岡県境の中津市との間に位置する。宇佐平野北側には瀬戸内海の支海である周防灘がひろがり、遙か遠くに山口県の海岸線を望むことができる。宇佐平野の北西には中津平野や丘陵・平野地帯が北九州市まで展開し、東方には国東半島が北へのびている。宇佐市は南部の安心院・院内などの山間部と北部の平野部からなり、伊呂波川、駅館川、寄藻川が北流しながら平野部を貫流し、周防灘へ注いでいる。とくに市の中央部を北流する駅館川は大きな川で、右岸側に中位段丘である宇佐・高森の台地、左岸側に低位段丘の四日市・江須賀の低地が広がっている。

岩金遺跡は駅館川東岸から西へ約300mで、北方の海岸から南へ約4,300m地点に位置する低位段丘面に立地している。ここは標高が10m前後で、北へ向かって標高が暫減するものの、50m離れてもさほど比高差のない平らな地勢である。現況は水田であるが、周囲は道路網の整備に伴って民家が建てこみつつある。

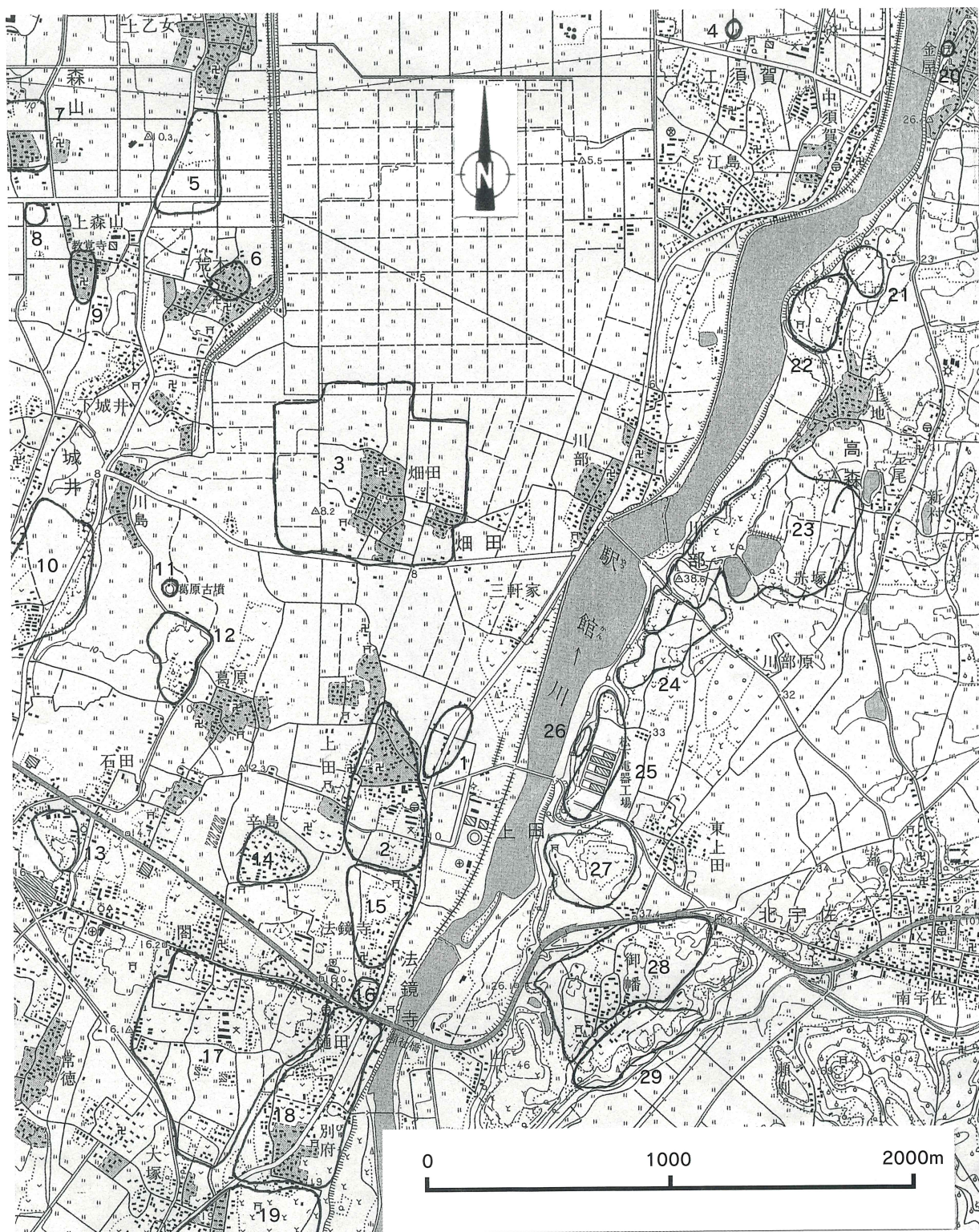
第2節 遺跡と周辺の歴史的環境

大分県内において旧石器時代後期の遺跡は各所で見つかっているが、宇佐平野においては散発的に石器が採集されているにすぎない。数少ない遺跡として小倉の池遺跡や台の原遺跡が概説書等に紹介されているが、実態は不明である。

本地域においては人類の生活が明確となるのは縄文時代早期になってからで、中原遺跡がある。中原遺跡では早期前半の高並垣式土器と呼ばれる特徴的な無文土器や押型紋土器が見つかっている。この辺りに遺跡が増加するのは弥生時代に入ってからで、駅館川沿いに重要遺跡が連なっている。弥生時代前期の台ノ原遺跡では大規模な袋状貯蔵穴群が見つかっている。駅館川の右岸沿いには弥生時代前期末～後期初めの南から上原遺跡・下原遺跡・高居遺跡・東上田遺跡・川部遺跡・本丸遺跡があり、その多くに環溝が巡っているのが特徴である。こうした集落の周辺には同時期の墓地があり、約300基の墓からなる野口遺跡、銅剣の見つかった川部遺跡がある。

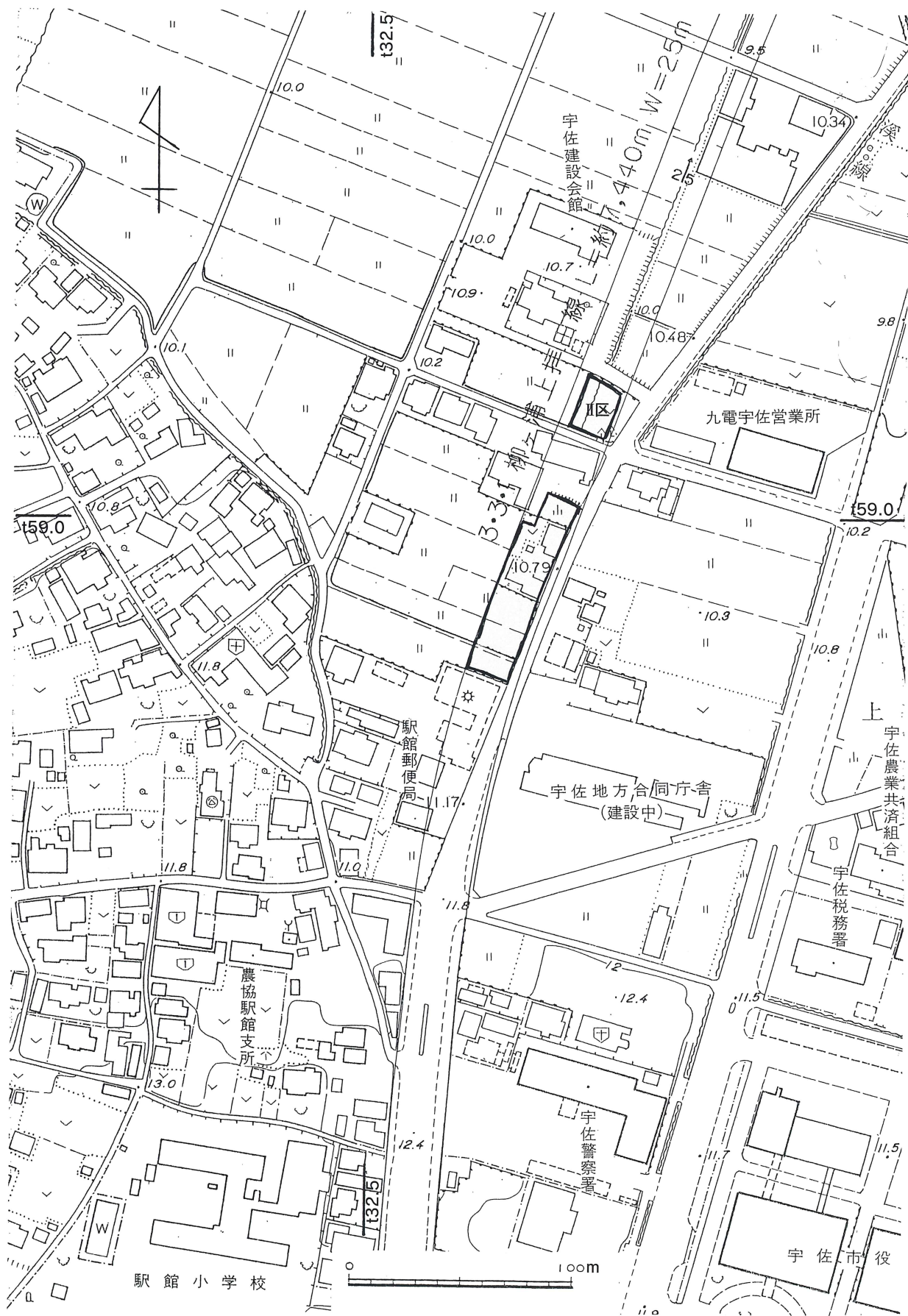
駅館川の左岸の低地にも遺跡がある。朝鮮式小銅鐸の出土した別府遺跡は、断面V字形で深い大規模な環溝が回らせていた。この他、弥生前期末～中期の中原遺跡、後期の上浦遺跡・中川遺跡・上居屋敷遺跡などが連続するように分布している。

古墳時代になると駅館川の右岸に高森古墳群があり、各時期の古墳が累代的に造営されているのが特徴である。特に大分県内で古いと言われる赤塚古墳や免ヶ平古墳は著名であるが、岩金遺跡と同様な土器も出土しており重要である。

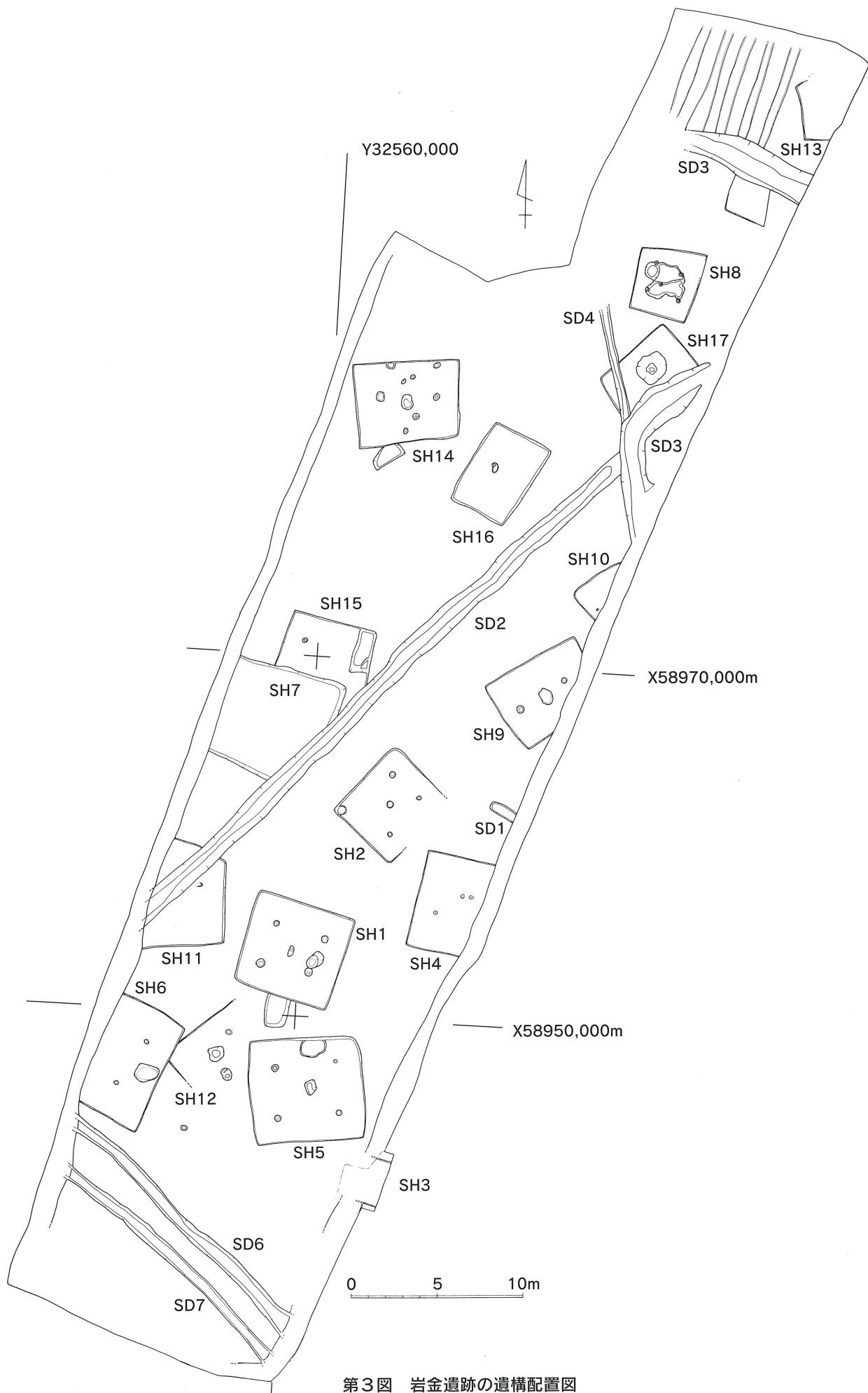


第1図 岩金遺跡と周辺の遺跡

- 1 岩金遺跡, 2 中屋敷遺跡, 3 畑田遺跡, 4 中園古墳, 5 小部遺跡
- 6 荒木城跡, 7 宇佐公通館跡, 8 池田遺跡, 9 城跡, 10 城井遺跡
- 11 葛原古墳, 12 葛原遺跡, 13 瓦塚遺跡, 14 辛島城跡, 15 法鏡寺跡
- 16 上浦遺跡, 17 樋田遺跡, 18 別府遺跡, 19 中原遺跡, 20 廟森古墳
- 21 四十塚遺跡, 22 高森城跡・本丸遺跡, 23 高森古墳群, 24 川部遺跡, 25 東上田遺跡
- 26 女鹿横穴群, 27 高居遺跡, 28 御幡遺跡, 29 ホキノ本石棺群



第2図 岩金遺跡発掘調査区位置図



第3図 岩金遺跡の遺構配置図

第3章 遺跡と遺物の調査内容

第1節 弥生・古墳時代の遺構と遺物

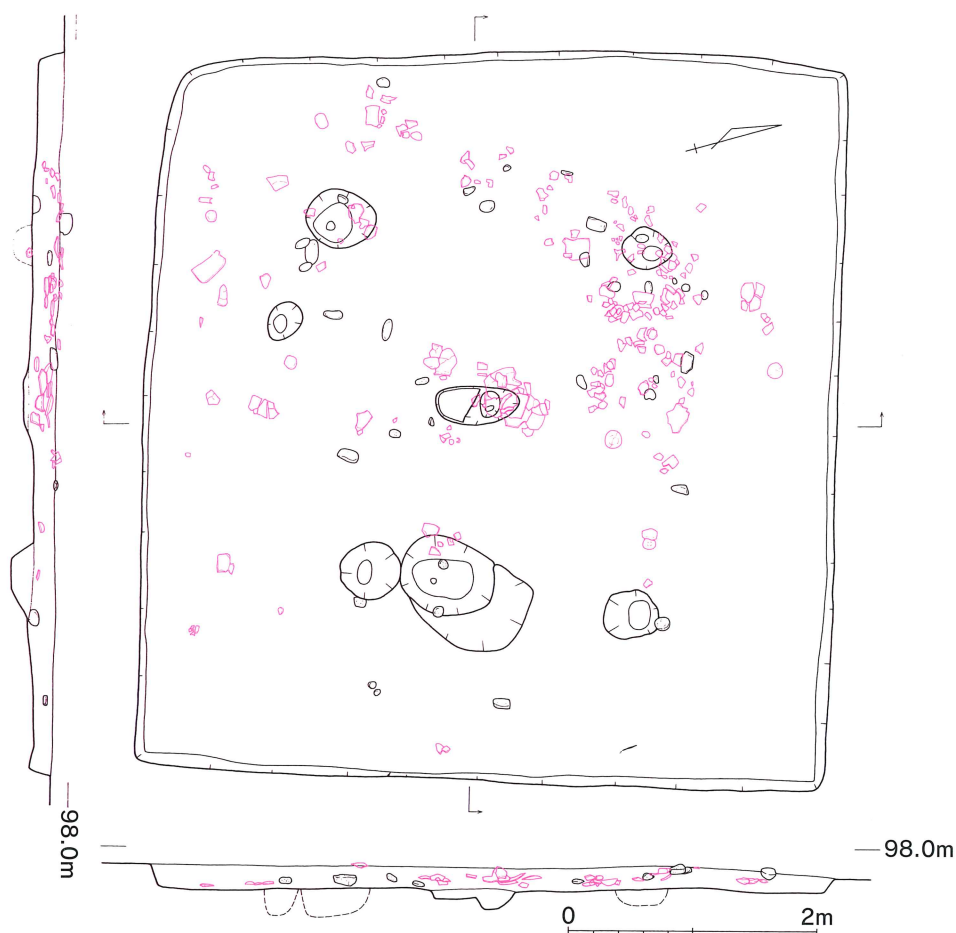
SH1 (第4図)

SH1は南北に長い調査区の南部に位置する。規模は南北560cm、東西580cmで面積は32.48㎡となる。検出面からの深さは8cm前後である。平面形はほぼ方形で、隅部は丸くなく屈折する。対角線上に4ヶ所の支柱穴がある。壁からの支柱穴の距離は、南壁間が120cmと160cm、東壁間が110cmと140cm、西壁間が140cmと100cm、北壁間130cmと140cmの距離を持っている。住居址の中央部に炉址が位置する。東側柱穴間(南東柱穴に接するように)に長軸68cm、短軸45cm、床面からの深さ20cm大きな掘り込み痕がある。

遺物は北側柱穴間の西より、中央炉址付近、南西柱穴付近に集中する傾向があり、住居址の東半は疎らである。遺物は全て床面の直上域から出土し、住居廃絶直後の廃棄に伴うものであろう。

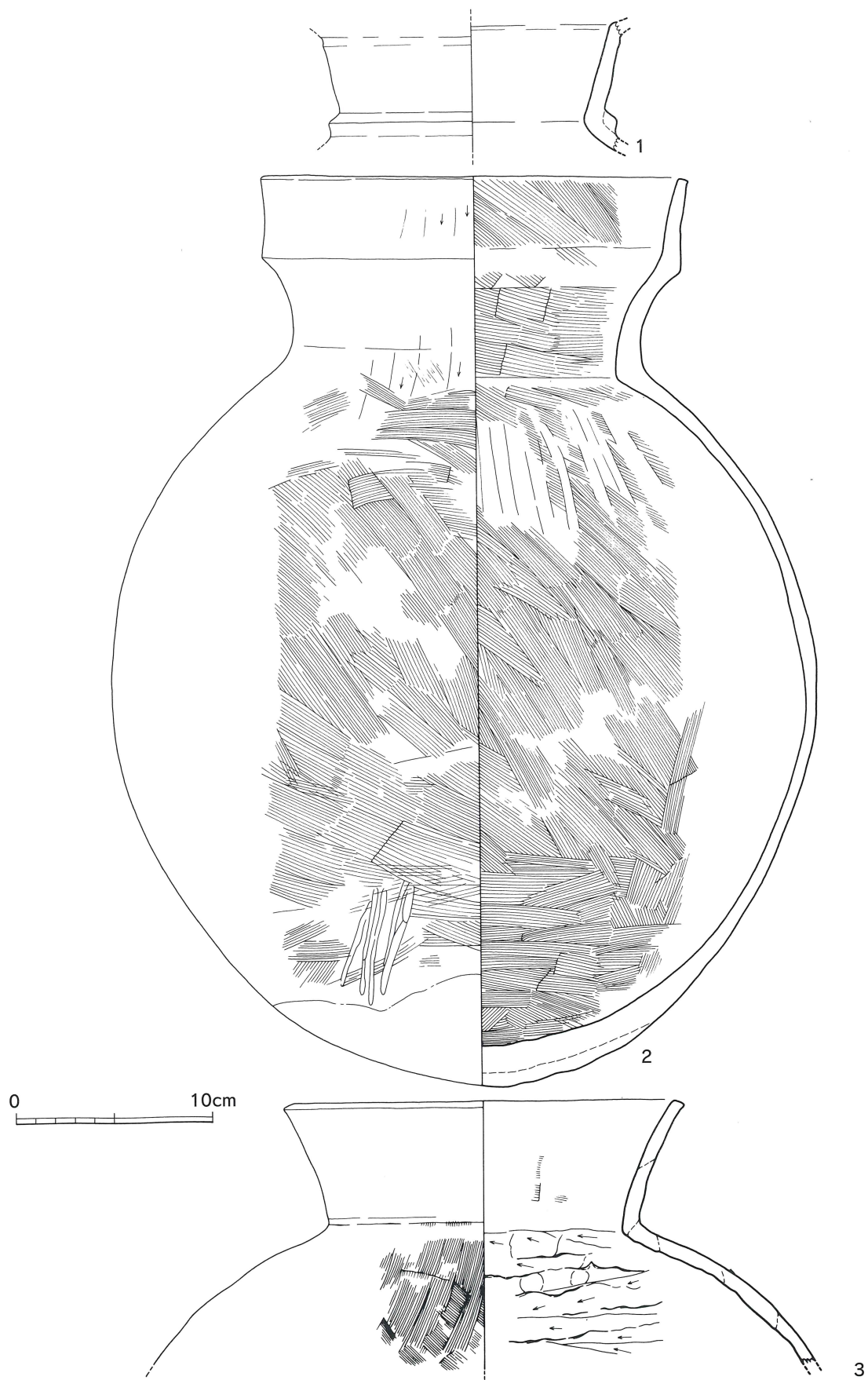
出土土器 (第5図～第6図)

1は断面三角形の突帯を巡らす在地系壺の頸部破片である。2は二重口縁壺の完形品である。一次口縁は直口気味に立ち上り、頸部は直口気味に立ち上がった後に外反する。内外面を丁寧な斜行するハケが残る。3は直口壺で胴部は球形である。外面側の調整は、口縁部が横ナデ、胴部は斜行ハケと縦ハケに仕上げる。内面側の調整は、口縁部は細かい横ハケ後に横ナデ、胴部はヘラ削り。ヘラ削りは口縁部と胴部境まで丁寧に仕上げ、境が鋭くなっている。4～7、9～13は強いていえば布留系の土師器である。4～7は胴部が球形である外面は縦ハケで調整し、上半に斜行～横方向のハケで仕上げる。内面はヘラ削りで上位方向へ削りあげる。5の内面調整は指

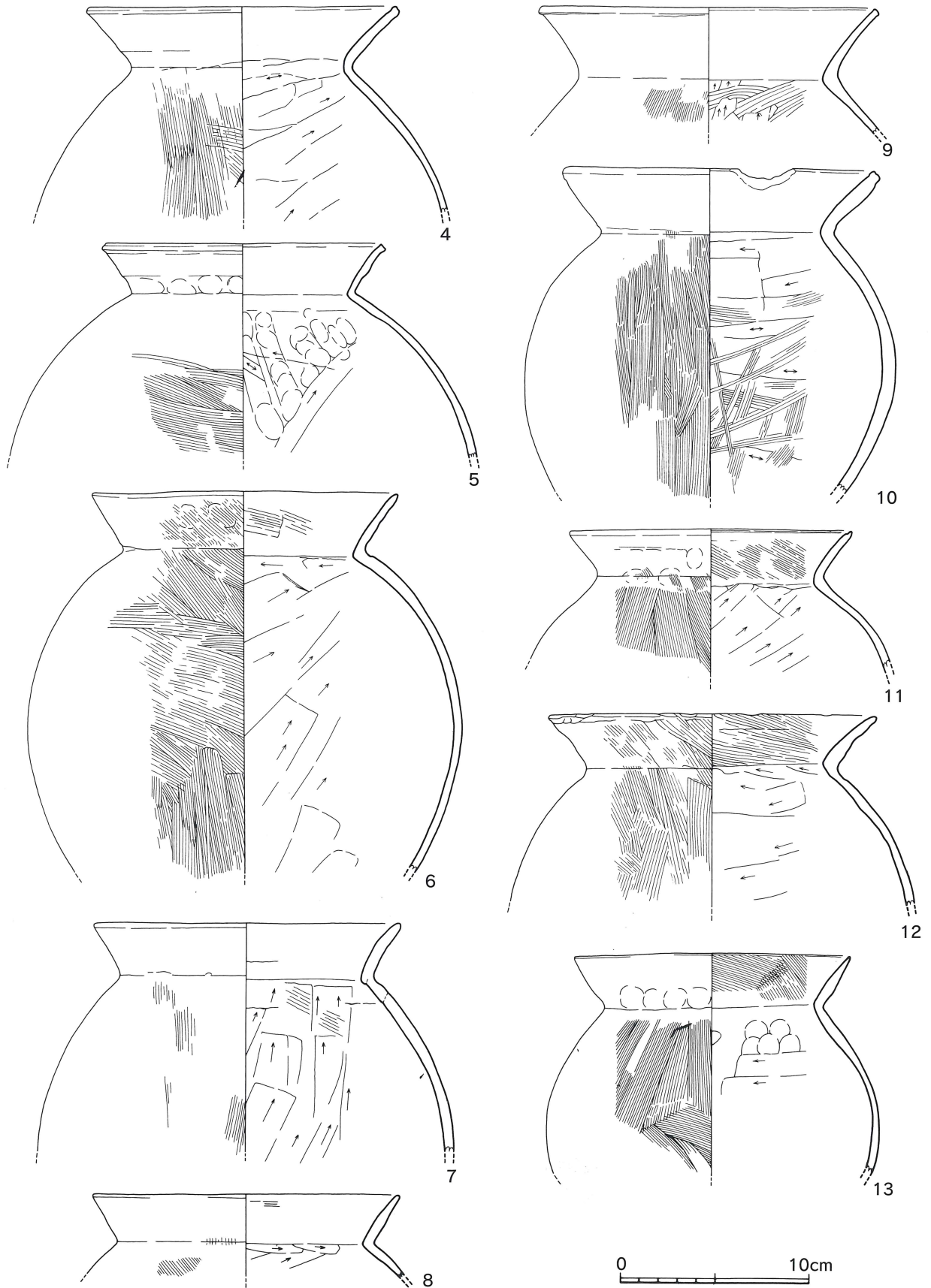


第4図 SH1実測図

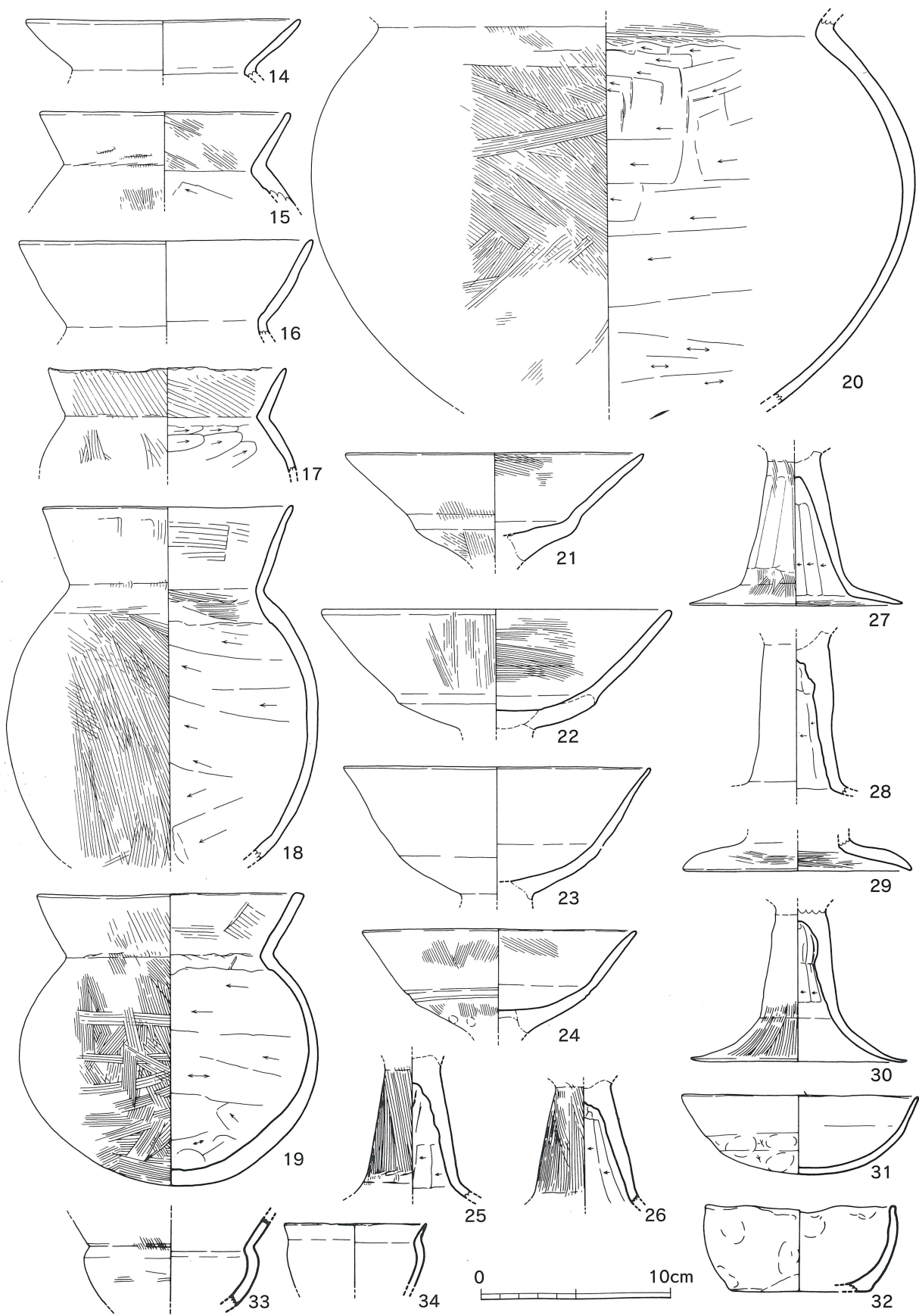
頭押圧後にヘラ削りで仕上げる。11は口縁部内面に斜行するハケ、胴部外面が縦ハケ仕上げである。13は胴部の最大形が中央からやや下がったところにある。外面は、口縁が指頭圧痕と横ナデ、胴部は縦ハケ。内面は口縁が斜行ハケ、胴部内面横方向のヘラ削りと指頭圧痕である。14～17は小型・中型の甕である。14は内外ナデ仕上げであるが詳細は不明。15の外面調整は縦ハケ後にナデ、内面は口縁部が斜行ハケ後に横ナデ、胴



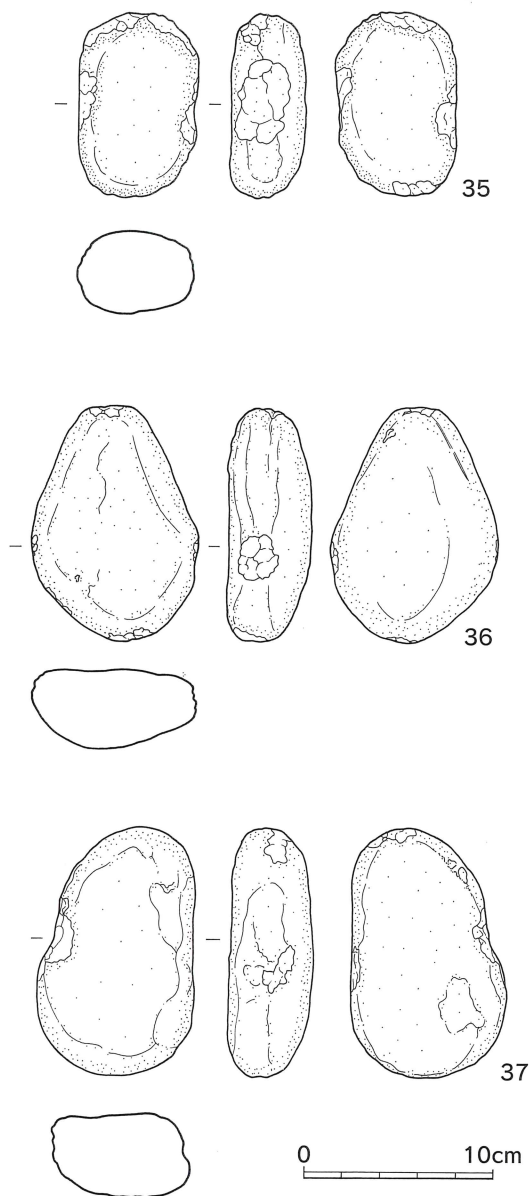
第5图 SH1出土土器实测图(1)



第6图 SH1出土土器实测图(2)



第7图 SH1出土土器实测图(3)



第8図 SH 1 出土石器実測図

出土石器 (第8図)

35は石錘と考えられる。法量は長さ9.7cm、幅6.4cm、厚さ4.4cm、重さ375.9gである。やや細長い楕円礫を用い、上下両端と両側中央部に打痕がある。両側の凹部が縄懸けの中心部であろう。36は上下両端と両側の凸部に敲打痕があり、敲石と考えたい。法量は長さ12.5cm、幅9.0cm、厚さ4.2cm、重さ630.9gである。37は石錘と考えられる。法量は長さ13.2cm、幅8.4cm、厚さ4.4cm、重さ697.3gである。やや細長い楕円礫を用い、上端と両側中央部に打痕がある。両側の凹部が縄懸けの中心部であろう。

部はヘラ削りで仕上げる。16は口縁部破片で、残存部では内外面に横ナデと縦ナデからなる。17は、くの字状に屈折する口縁部である。口縁部の調整は内外面とも斜行するハケ、胴部外面はナデ後に縦ハケ、胴部内面は横方向のへら削りで仕上げる。18は小型丸底風の壺である。外面側の調整は、口縁部と頸部付近は縦ハケ後に横ナデ、胴部は斜行ハケで仕上げる。内面側の調整は、口縁部は横ハケ後に横ナデ、胴部は横方向のへら削り。19は小型丸底壺である。外面側の調整は、口縁部上部が縦ハケ後に横ナデで、口縁部下部から胴部下半は縦ハケと不定方向のハケで仕上げる。内面側の調整は、口縁部内面が横ハケ後にナデ、胴部は横方向のへら削りである。20は大型壺の頸部から胴部の破片である。最大径は胴部上半にあり、外側へ張る。外面の調整は斜行するハケ、内面は横方向のへら削り。21~24は高坏の坏部分の破片である。21と22は口縁部との境に明瞭な段がある。23と24も口縁部との境に段の痕跡がある。口縁部は直線的で延びる。内外面は横ハケ後にナデ調整で仕上げる。23は内外面とも横ナデ、24は斜行するハケ後に横ナデ仕上げ。口縁との境に沈線を2条施す。25~30は高坏の脚部破片である。25~27は裾部が明瞭に屈折する。25と26は外面が縦ハケ、内面の上半が搾り痕で、下半が横方向のへら削りである。28は外面が横ナデで、内面の上半が搾り痕で、下半が横方向のへら削りである。29は裾の上面が僅かに膨らみ、30は脚部から裾部へスロープ状に移行する。31は碗形の鉢で、成形は積み上げ、内面はナデ、外面は上半の横ナデと下半の指圧痕で仕上げる。32はボウル形の鉢で、胴部が内湾しながら立ち上り、底部が水平となる。成形は手づくね、調整は内外面に指頭圧痕の後にナデ仕上げ。33は小型丸底壺で、成形は積み上げ、調整は外面がハケの後にナデで、内面はナデ仕上げ。34は小型の鉢で、成形は積み上げ、器形は鉤形に屈曲し、口縁端部が尖る。器面調整は内外面ともナデである。

SH2 (第9図)

SH2は南北に長い調査区の中部に位置する。規模は南北450cm、東西500cmで面積は22.5㎡となる。検出面からの深さは20cm前後である。平面形はほぼ方形で、隅部は丸くなく屈折する。対角線上に4ヶ所の主柱穴がある。壁からの主柱穴の距離は、南壁間が120cmと130cm、東壁間が130cmと115cm、西壁間が120cmと125cm、北壁間130cmと140cmの距離を持っている。住居址の中央部に炉址が位置する。東側柱穴間（南東柱穴に接するように）に長軸68cm、短軸45cm、床面からの深さ約30cm大きな掘り込み痕がある。

遺物は北側柱穴間の西より、中央炉址付近、南西柱穴付近に集中する傾向があり、住居址の東半は疎らである。遺物は全て床面の直上域から出土し、住居廃絶直後の廃棄に伴うものであろう。

出土土器 (第5図～第6図)

38は布留系の甕である。胴部が球形で、口縁が直口気味にやや内傾する。成形は積上げ。外面は縦ハケと横ハケ、内面は、口縁が横ハケで胴部がヘラ削り。39と40も布留系の甕か。40の成形は積上げ、外面は横ナデと縦ハケで頸部付近が指押え、内面は口縁が横ハケ、胴部がヘラ削りである。内面の胴部最上部に削り残しがある。

41は小型丸底壺で、成形は積上げ。口縁部外面の中央部が斜行ハケで他は横ナデ、胴部外面は横ハケ後に部分的に磨きを施す。口縁部内面は横ナデ後に部分的な磨き、胴部内面は篋ナデ仕上げ。

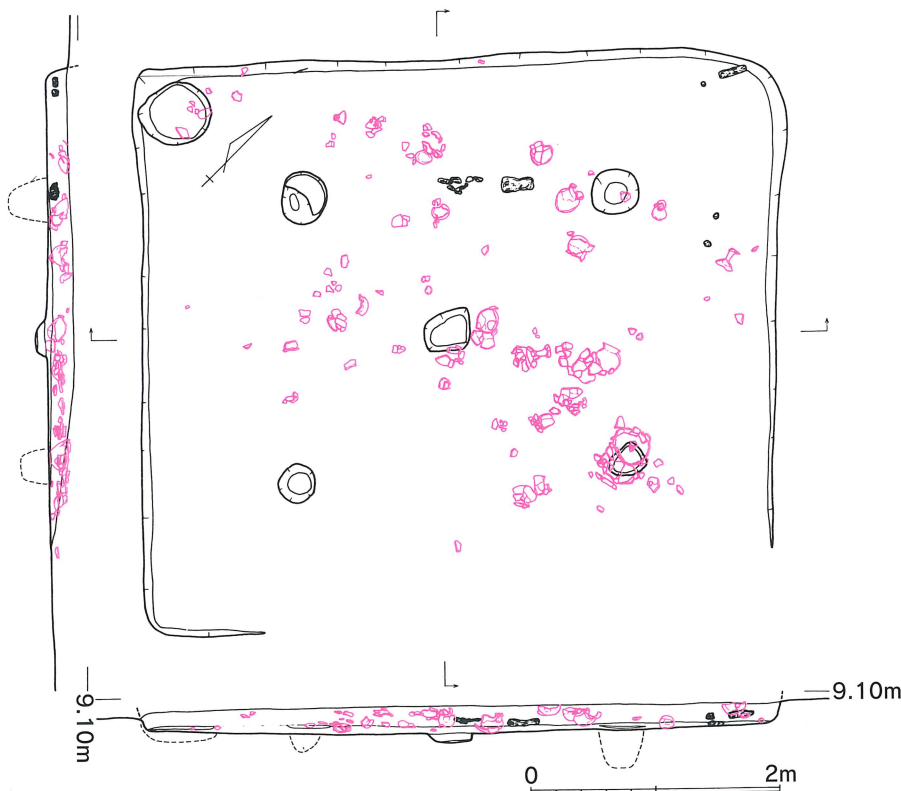
42は高坏の坏部破片である。この例も僅かに鉤形屈折の痕跡がある。調整は器体の外面が縦ハケ後にナデ、内面は横ハケと斜行ナデである。

43～51は布留系の甕で、胴部が球形となり、口縁部がくの字状に屈折し、成形は積上げ。いずれも外面にハケ、口縁の内面が横ハケ、胴部内面は斜行または横方向のヘラ削りで仕上げる。52と53も布留系の影響を受けたと考えられるが、口縁部と胴部の内面側の境界が丸みを帯び、外湾状を呈する。52の口縁部は外面が縦ハケ、胴部は上半が縦ハケ、下半が横ハケ胴部内面はヘラ削りである。54はくの字状に屈折する甕であるが、調整等は小破片

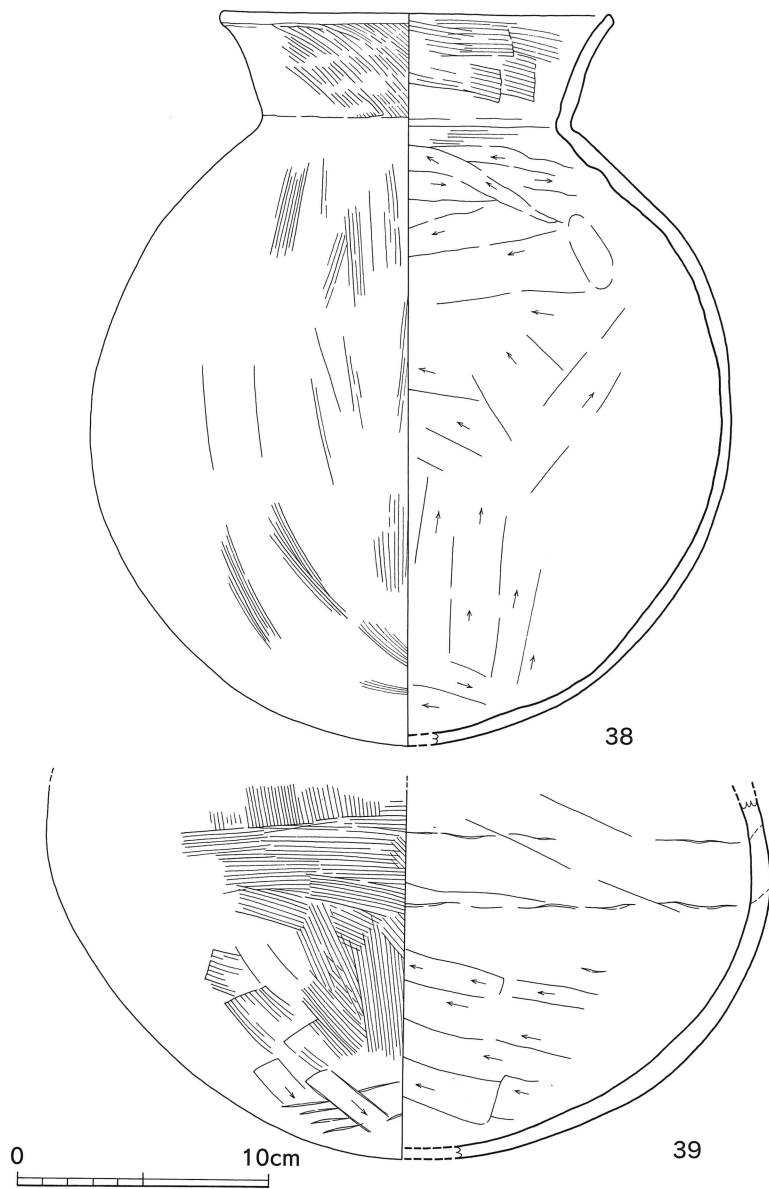
のためにはっきりしない。

55は碗形の鉢で、57は胴部口縁部境に鉤形の屈曲を持つ小型の鉢である。56の調整は器体の外面上半と内面はナデ、器体の外面下半はハケの後ナデである。57は外面が横ハケ後にナデ、内面は横ハケと斜行するハケである。

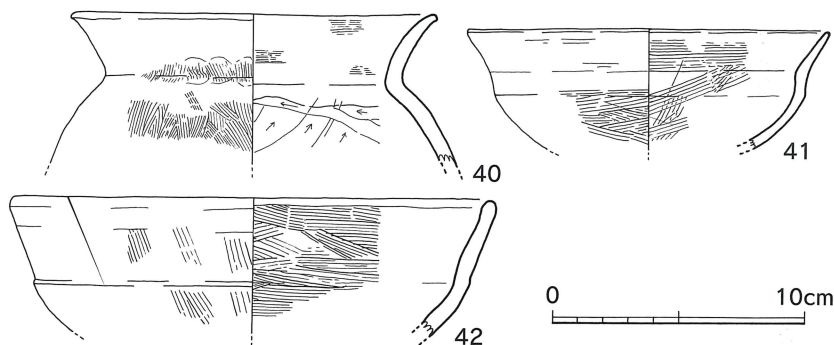
59～62は高坏のほぼ完形品である。このうち59～61は坏部が逆台形状で、脚部から脚裾部が強く屈折しラップ状に開く例である（A類）。また坏部の調整は外面の調整が縦ハケ、坏部下半は横ハケ、内面は横ハケまたはナデ



第9図 SH2実測図

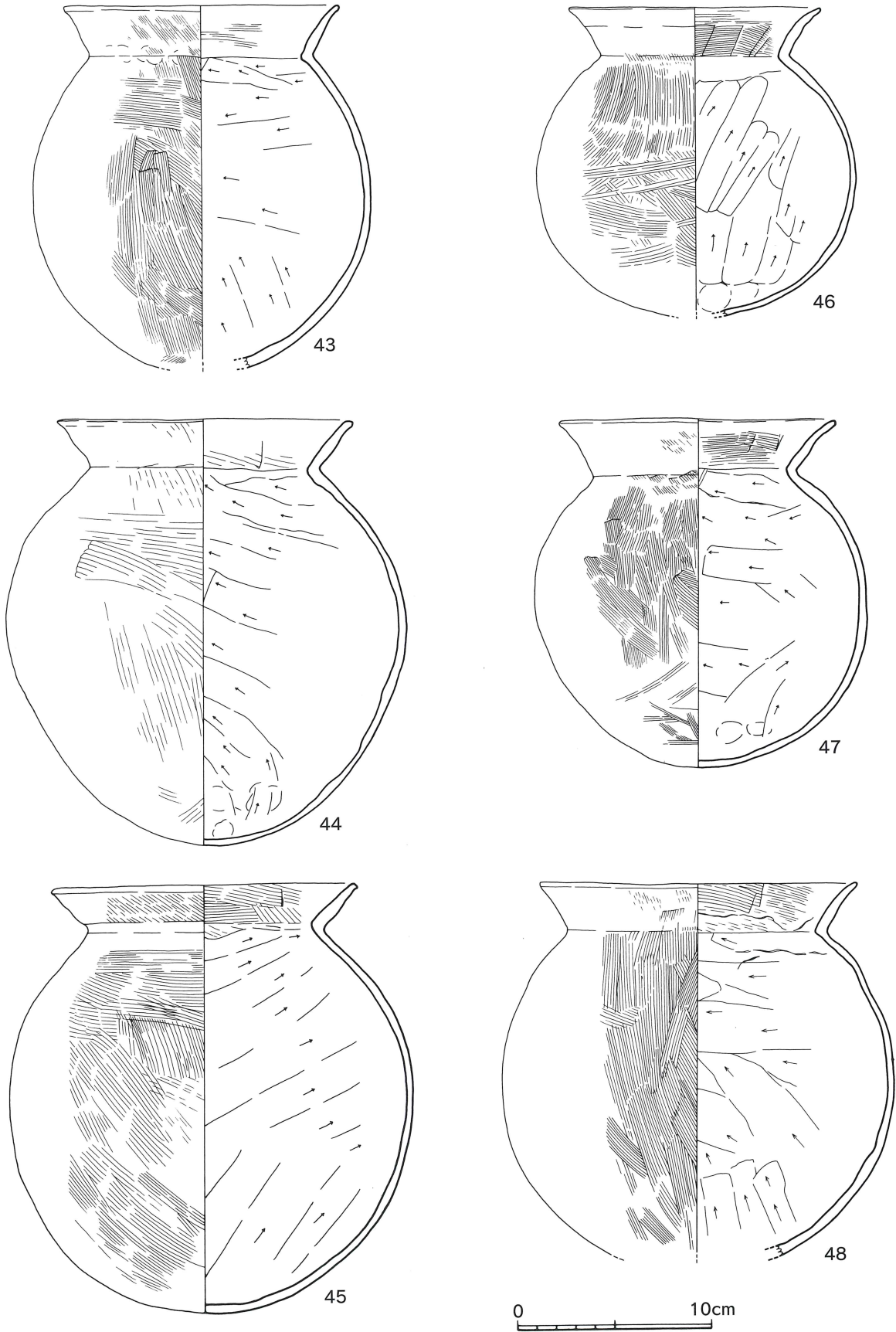


第10図 SH2出土土器実測図(1)

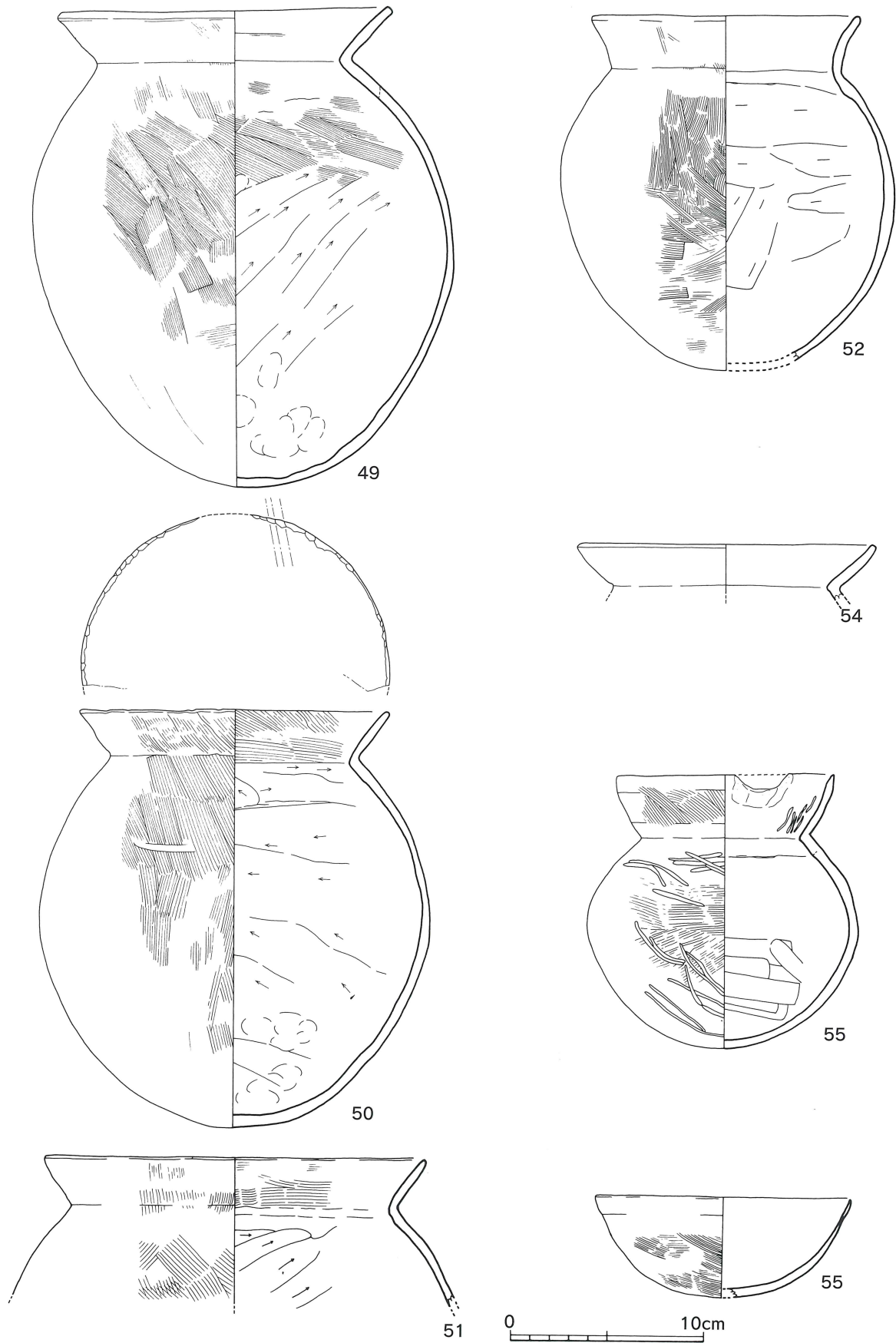


第11図 SH2出土土器実測図(2)

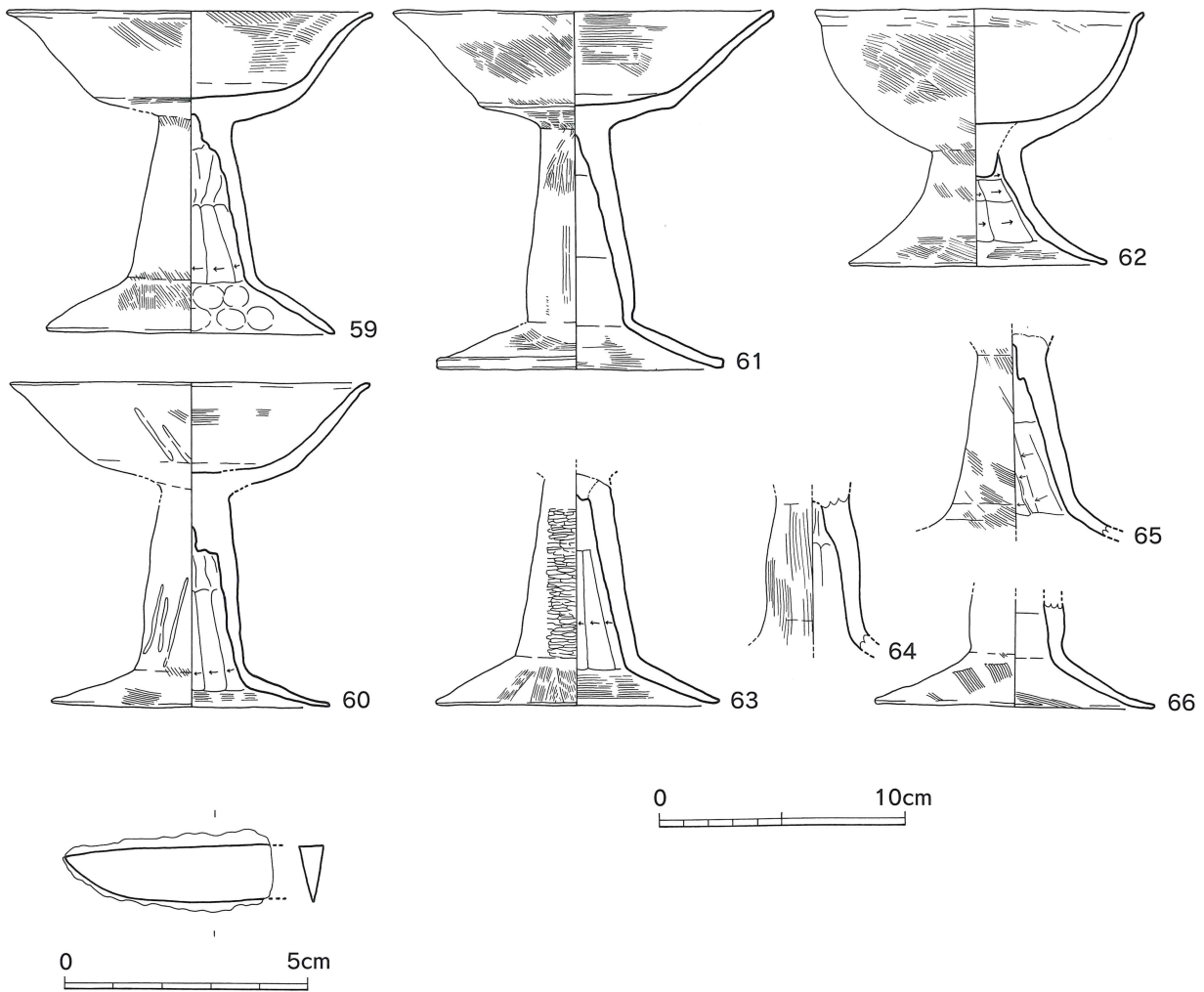
仕上げとなっている。59の脚部は外面が縦ハケ後にナデ、内面の上半が搾り痕、下半が篋削りで仕上げる。裾部外面の上半は縦ハケ、下半が横ナデとなっている。棄裾部内面は指圧痕となっている。60の脚部は外面が縦ハケ後に横ナデ、内面の上半が搾り痕、下半が篋削りで仕上げる。裾部外面の上半は横ハケ後にナデ、内面が横ハケとなっている。61の脚部は外面がハケ後にナデで、部分的に篋磨きがある。内面の上半が搾り痕、下半が篋削りで仕上げる。裾部外面の上半は横ハケ後にナデ、内面が横ハケとなっている。62は短い脚部に碗形の鉢が載るので、あるいは台付き鉢かもしれない(B類)。坏部外面はナデ後に横ハケ、脚部外面は斜行するハケとなっている。63~66も高坏の脚部であり、裾部がラッパ状に開くので本来存在した坏部も逆台形なのであったと予測できるのでA類と考えておきたい。63は明瞭な裾部の屈折があり、脚部外面がナデの後に入念な横ミガキ、裾部外面は縦ハケ、脚部内面の上部がナデ、下部が篋ケズリ後に横ナデで仕上げる。64は側面形が幾分湾曲する。外面が縦ハケ、内面の上部には絞り痕が残り、下半はナデ仕上げ。65は脚部から裾部にかけてややスロープ状に移行する。調整は外面が



第12图 SH2出土土器实测图(3)



第13图 SH2出土土器实测图(4)



第14図 SH2出土土器・鉄器実測図(5)

斜行ハケの後にナデ、内面は上部が絞り痕を有し、下半が匏ケズリ、裾部内面が横ナデで仕上げる。66は脚部外面は横ナデ、裾部は斜行ハケ後にナデ、裾部内面は斜行ハケ後にナデ。

刀子(第14図67)

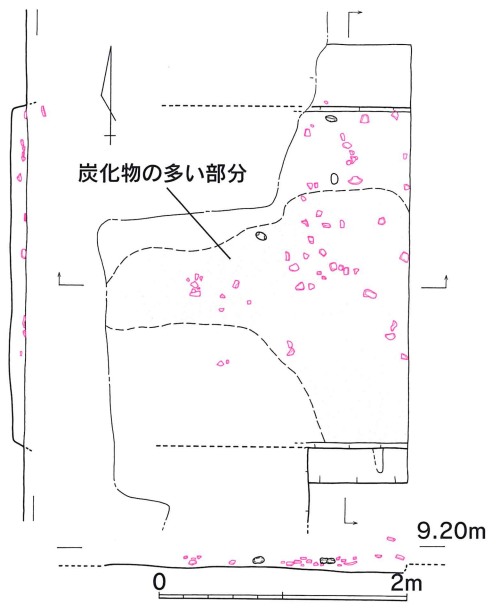
刀子が1点ある。長さ4.3cm、幅1.15cm、厚さ0.5cmである。切先から柄方向へ4.3cmの部分で破損している。断面は楔形である。素材は鉄である

SH3(第15図)

SH2は南北に長い調査区の南部に東壁付近に位置する。規模は南北270cmであるが、東西方向の幅が調査区外と攪乱部分の存在から明確ではない。しかし本遺跡における住居址の平面形は概ね方形なので、東西方向の幅も南北方向幅とほぼ同様であろう。したがって住居址の面積は7.29㎡前後であろう。検出面からの深さは15cm前後である。支柱穴は明確ではなかった。小型住居址であることもあって中央部に炉址は存在しないが、床面直上に焼土が広がっていた。この中に多くの遺物が含まれている。

出土土器(第16図)

38は布留系の甕破片である。口縁がくの字状に屈折する。成形は積上げ。残存部においては胴部外面が縦ハケ、口縁の内外面が横ナデ、内面は、胴部がへら削り。69は甕の口縁部破片で、口縁端部に面を作る。内面は斜行ハ

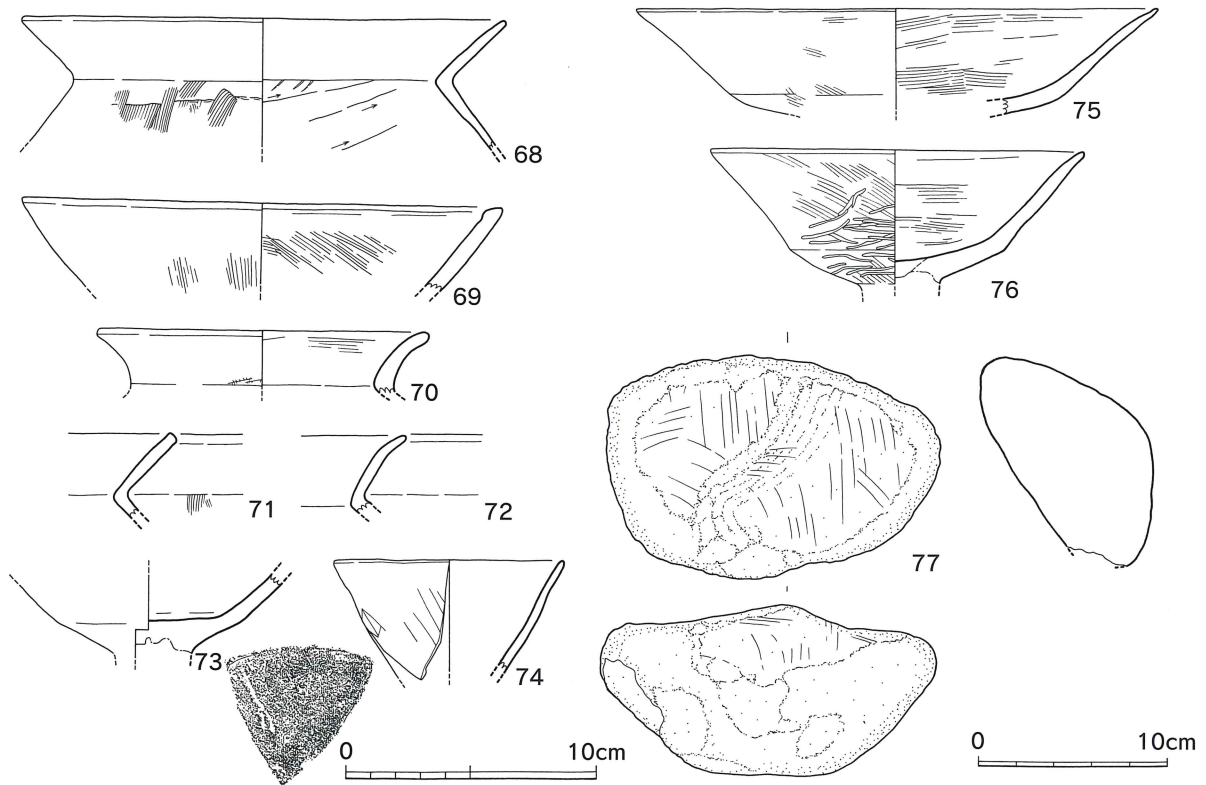


第15図 SH3実測図

ケ、外面は縦ハケ後に横ナデである。70は甕の口縁部破片である。くの字状ではなく外反し、頸部の屈曲はあまい。71と72は布留系の甕破片である。いずれも内外面が横ナデである。71は、くの字状で、72は、くの字状に屈折後、途中から外反する。73、75、76は高坏の坏部破片である。いずれも坏下部と坏上部間が屈折する。75の坏下部は水平に近い傾きである。73は内外面ナデで、成形は積上げ、差込みである。精良な粘土を用いており、あるいは外来系か。75は坏部外面は斜行ハケの後に横ナデ、内面は横ハケの後に横ナデ仕上げ。76は坏部外面は斜行ハケ後に横ミガキ、内面は横ハケ後にナデ仕上げ。成形は積上げ、連続成形で円盤充填がみられる。

出土石器 (第16図77)

77は砥石である。石材は不明である。



第16図 SH3出土土器・石器実測図

SH4 (第17図)

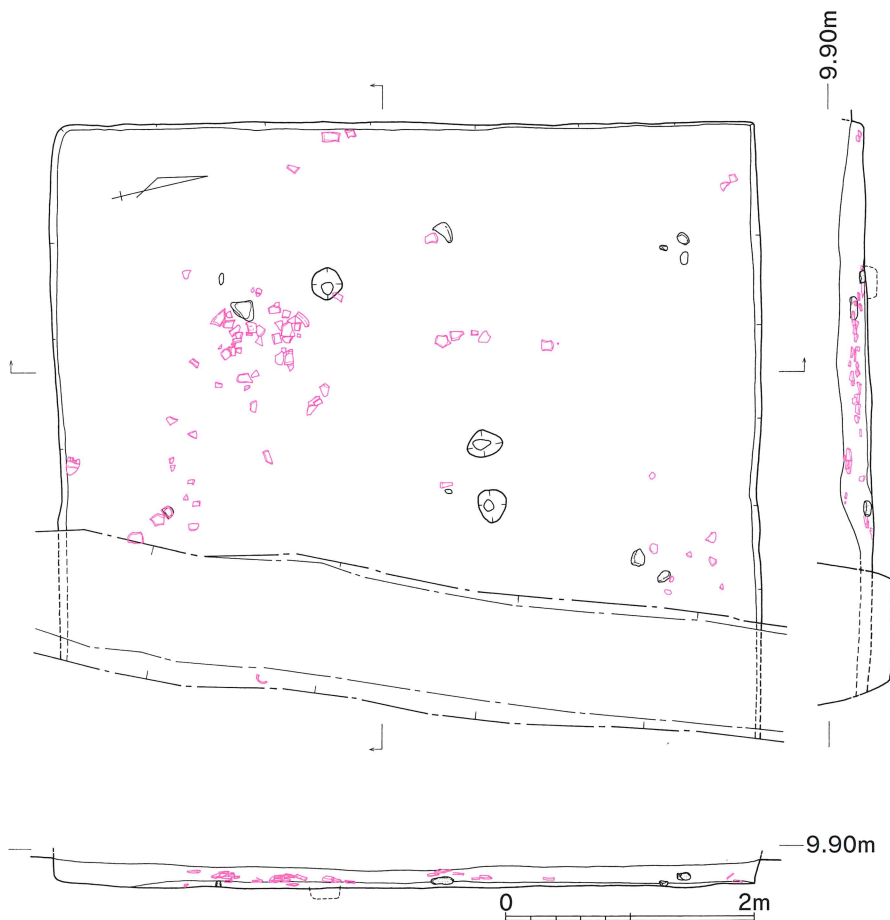
SH4は南北に長い調査区の中中部付近で、東壁沿いに位置する。規模は南北570cm、東西幅は調査区外に約3分1がかかる為、はっきりしない。しかし住居址の基本形は方形であるので東西幅は南北幅と同程度とみられる。したがって面積は31.36㎡となる。検出面からの深さは約20cm前後である。平面形はほぼ方形で、隅部は丸くなく屈折する。精査したが4本支柱穴は確認できなかったが、柱穴状のものが3ヶ所見つかったに過ぎない。

配石または石皿状のものが西側の壁から150cmと80cm離れた部分に位置していた。

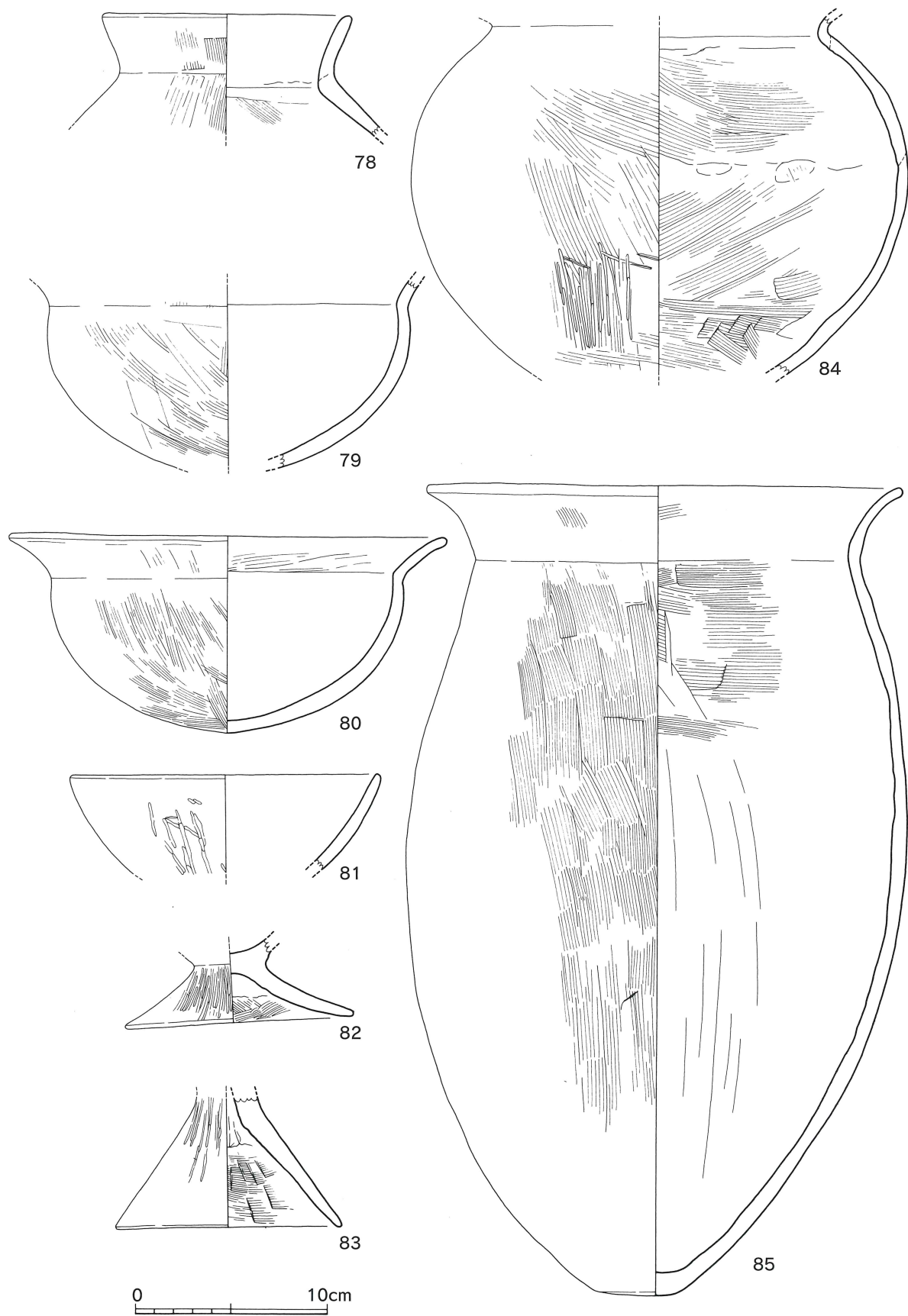
出土土器 (第18図)

78は壺か甕の口縁部破片で、直口気味に立ち上がる。成形は積上げ。口縁部外面は縦ハケ後に横ナデ、口縁部の内面は横ナデである。胴部外面は縦ハケで、胴部内面は斜行ハケ後にナデ調整で仕上げる。在地系の土器か。79と80はいずれも20数cm前後の口径をもつ大型の鉢である。頸部付近が直口気味に立ち上がり、口縁部は軽く外湾しつつ外方へ開く。いずれも口縁部が縦ハケ～斜行ハケ後に横ナデで調整する。胴部内面はナデで、胴部外は粗い縦ハケとナデ仕上げ。81は椀状の小型鉢であるが、あるいは台付鉢か。緩く内湾しながら立ち上る。成形は積上げ。調整は外面がナデ後に縦ミガキ、口唇部は横ナデ、内面はナデ仕上げである。82は台付き鉢の破片である。成形は積上げ。脚部外面は縦ハケ後に縦ミガキ、脚部の内面の上部はナデで下半は横ハケ後にナデである。83は高坏の脚部破片である。成形は積上げ。脚部外面はナデと縦ミガキ、脚部の内面の上半は絞り痕で、下半は横ハケである。鉢部内面の見込はナデで仕上げる。在地系の土器か。84は壺の胴部破片で、器形は球形である。胴部と口縁部の境は緩く屈曲する。成形は積上げである。胴部外面で頸部付近の上位が横ナデ、その下半は粗い

斜行ハケと縦ハケで最後に縦方向のミガキを部分的に施す。内面側の調整は頸部が横ナデ、胴部内面は粗いハケで調整する。篋ケズリ痕はない。85は長胴の甕で、口径24.9cm、頸部径20.1cm、胴部径26.1cm、器高41.8cmの大きさである。長胴部のやや上位に最大径があり、緩く窄まり、外反する口縁部がつく。成形は積上げ。調整は口縁部が縦ハケ後にナデで、内面は横ナデ。胴部外面は底部に近いところがナデ、他は縦ハケ、胴部内面は上半が横ナデ、中部から下部が縦方向の篋ケズリ状のナデ。



第17図 SH4実測図



第18图 SH4出土土器実測図

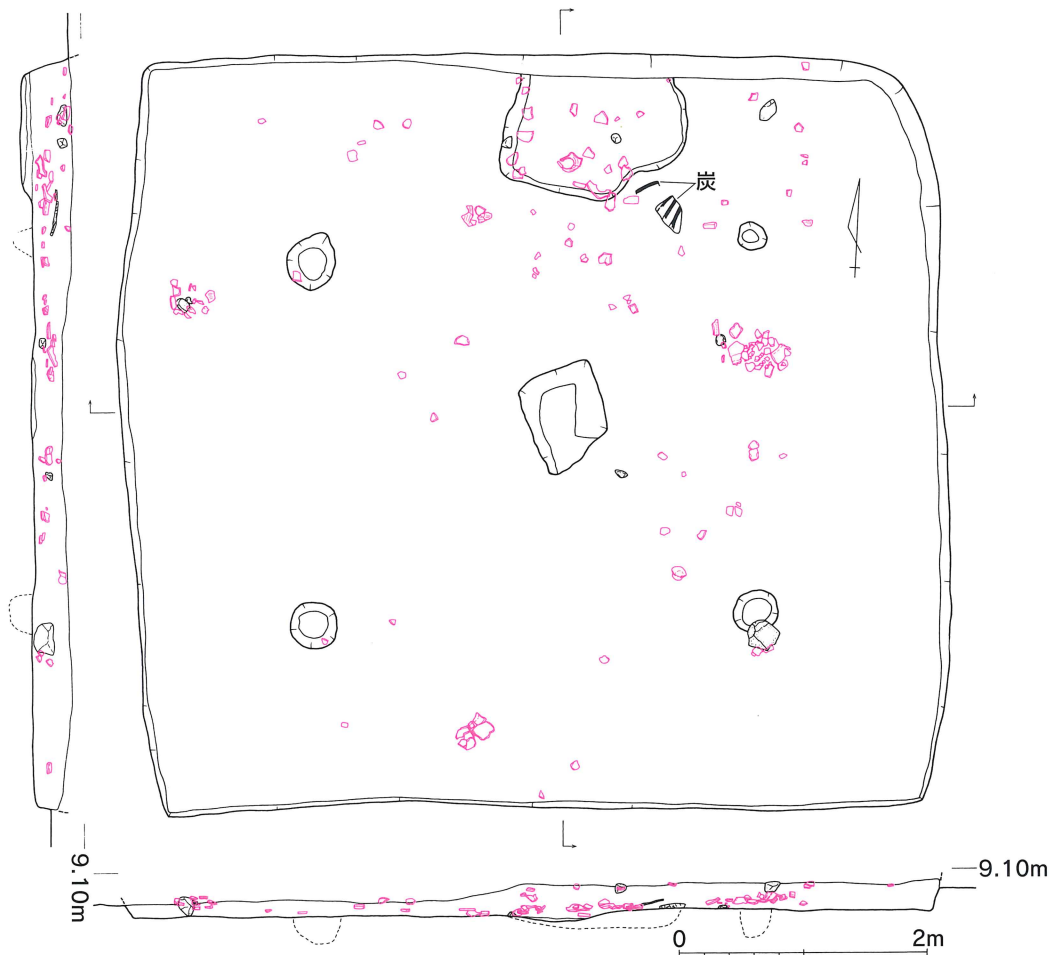
SH5 (第19図～第22図)

SH5は南北に長い調査区の南部に位置する。規模は南北600cm、東西655cmで面積は39.3㎡となる。検出面からの深さは8cm前後である。平面形はほぼ方形で、東北隅部を除き鋭く屈折する。対角線上に4ヶ所の支柱穴がある。壁からの支柱穴の距離は、南壁間が120cmと140cm、東壁間が135cmと140cm、西壁間が130cmと120cm、北壁間145cmと135cmの距離を持っている。住居址の中央部に炉址が位置する。東よりの北壁に接して長軸150cm、短軸80cm、床面からの深さ15cmの土坑がある。

遺物は北壁沿いの土坑付近に集中する傾向があり、他は同一個体の土器破片が散発的に集中する。住居址の東半は疎らである。遺物は全て床面の直上域から出土しており、住居廃絶直後の廃棄に伴うものであろう。

出土石器 (第20図)

砥石が一例出ている。法量は長さ17cm、幅12.5cm、厚さ4.9cm、重さ1,450gである。石材は砂岩である。表裏両面に研磨痕が認められるが、表面側に著しい。鋭く長い線状の傷がみられることから、金属器に由来する傷とみられる。



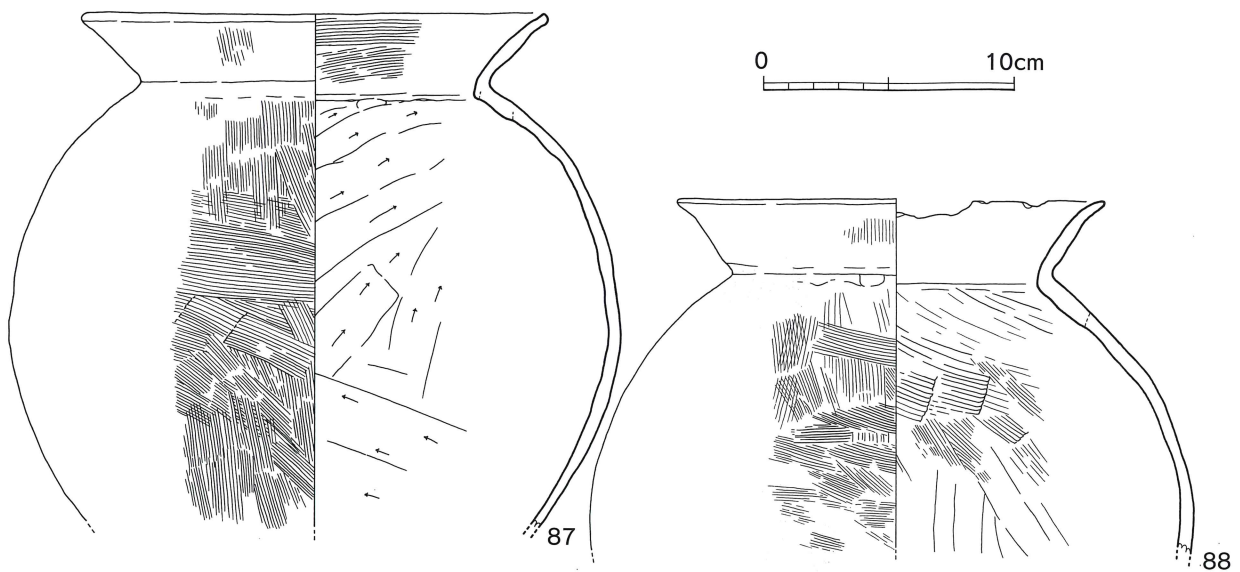
第19図 SH5実測図

出土土器（第21図、第22図）

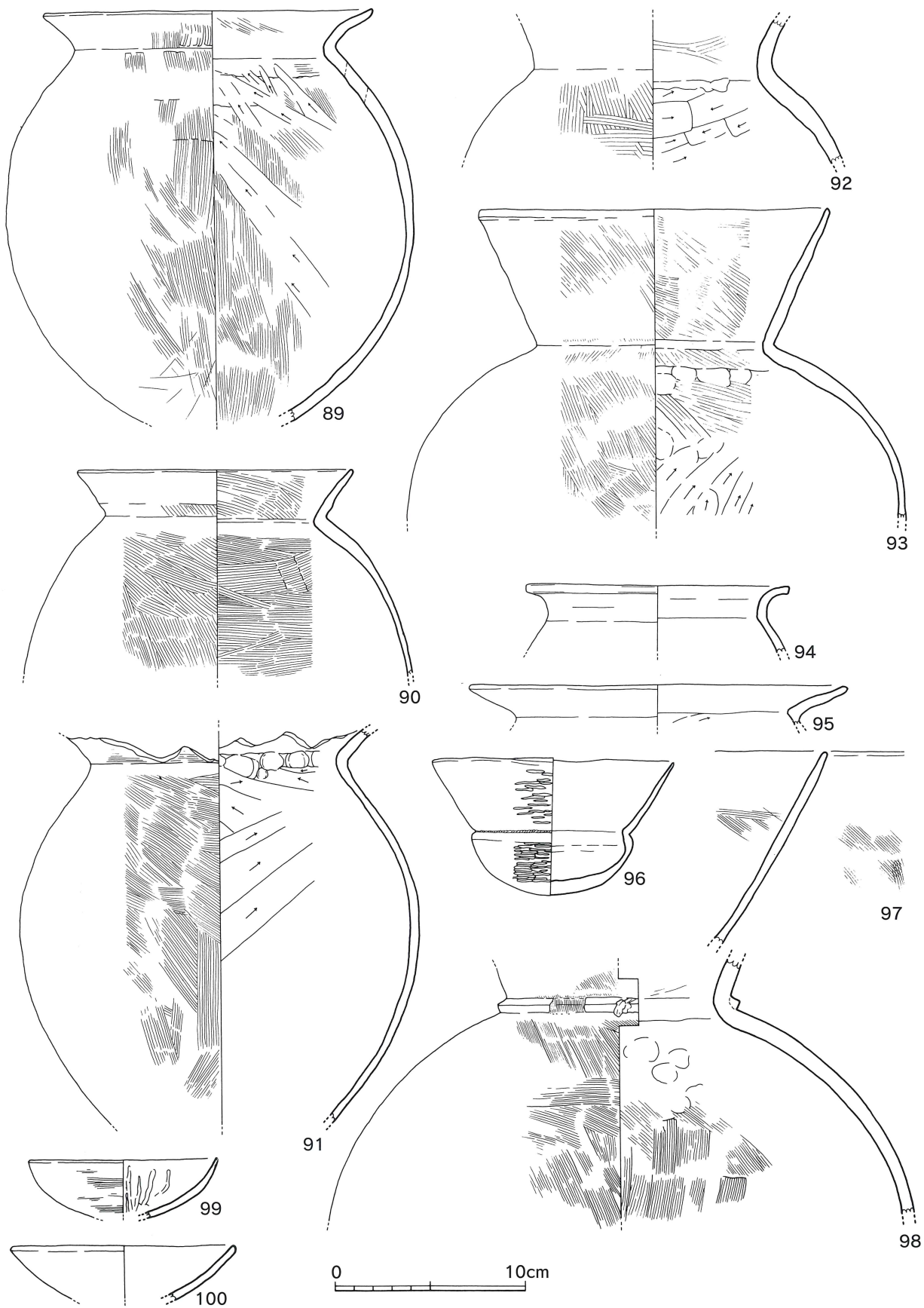
87は布留系の甕と思われる。胴部はほぼ球形で、頸部から口縁部にかけて、くの字状に屈折する。外面胴部下半が縦ハケで、上半部はヨコハケである。外面胴部斜行するヘラ削りとなっている。88は口縁端部付近でやや外反し、外面は不定方向のハケ、胴部内面は斜行するハケの後に板状ナデである。89は胴部が球形で、頸部から口縁部が外湾する。外面は底部近くがナデで、他は縦ハケとなっている。内面は口縁部が斜行するハケのあと横ナデ、胴部は斜行するハケの後に板状ナデが仕上げる。90は畿内系の影響を受けた甕で、口縁部がくの字状に屈折する。頸部外面の調整は縦ハケ後、横ナデ、胴部上半は斜行するハケ、下半は縦ハケである。91は畿内系の影響を受けた在地系の甕で、やや長胴の甕で口縁部を打ち欠く。外面は口縁部が横ハケの後に横ナデ、胴部上半は横ハケで下半は縦ハケである。内面頸部の屈折部を指頭で押し潰す。内面は口縁部が横ナデ、胴部が斜行するヘラ



第20図 SH5出土砥石実測図



第21図 SH5出土土器実測図（1）



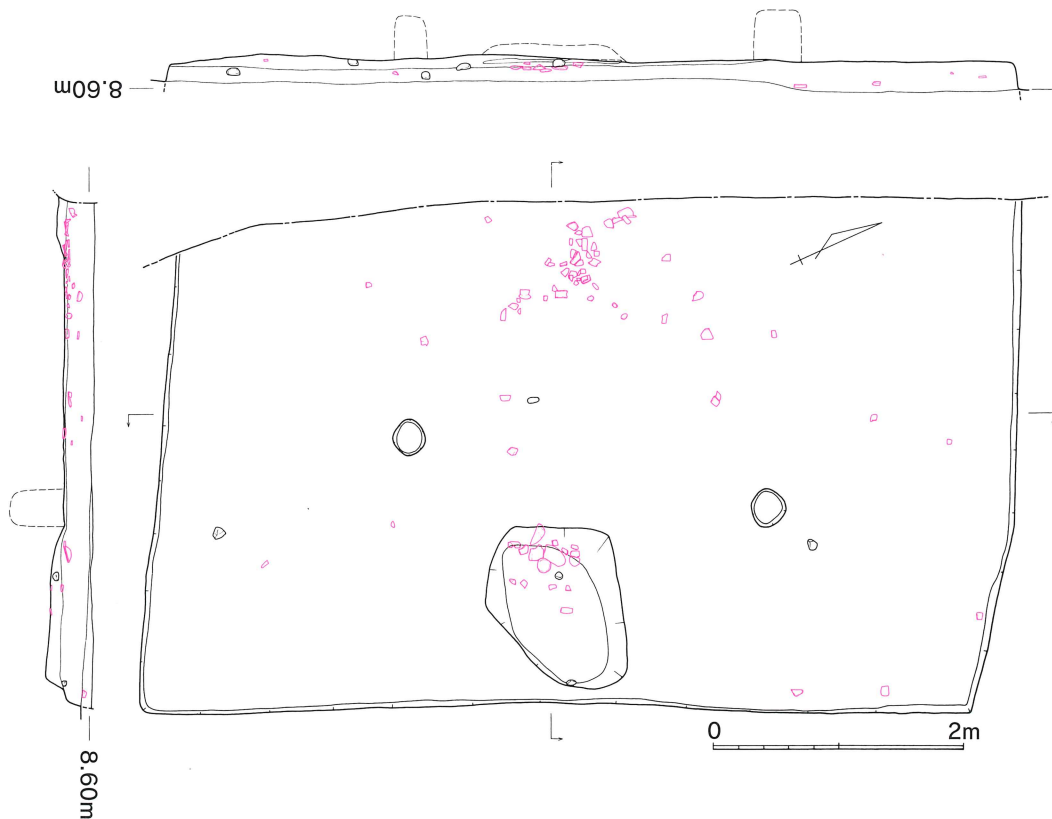
第22图 SH5出土土器实测图(2)

削りの後にナデを行なう。92は壺の破片で、口縁が外反しながら立ち上る。外面調整は口縁がナデ、胴部上半は縦ハケの後に横ハケ仕上げる。内面調整は口縁部が横ハケの後にナデで、胴部はヘラ削り。93は単口縁壺で、外面は横ハケ・縦ハケ、口縁は後にナデ仕上げ。口縁内面は横ハケ・斜行ハケの後にナデ、胴部内面は指圧後に粗いハケ、後に削りで仕上げる。94は小型の甕で、残存部位では横ナデ仕上げである。95は甕の口縁部破片で、大きく外方に開く。残存部位では内外面の口縁部が横ナデ、内面胴部上端に削りで仕上げしており、あるいは布留系か。96は外反口縁鉢で、口縁部が胴部高より高い。外面は口縁部が横ハケの後に横ナデ、更に横ミガキで仕上げる。胴部は丁寧な横ミガキで仕上げる。内面は口縁部が横ナデ、胴部がナデ仕上げ。口縁部と胴部間に沈線が見られる。97は単口縁壺で、外面は上部が横ナデ、下半は斜行ハケの後にナデ仕上げる。98は安国寺系壺の大型破片。外面は縦ハケ・横ハケで、頸胴部間に三角突帯を貼り付け後にナデ仕上げ。内面は口縁部では横ハケ後に横ナデ、頸胴部間がナデ、胴部上半が指圧後にナデ、下半が縦ハケ仕上げである。99は単口縁鉢で、外面が横ハケ、内面はナデの後に縦ミガキで仕上げる。

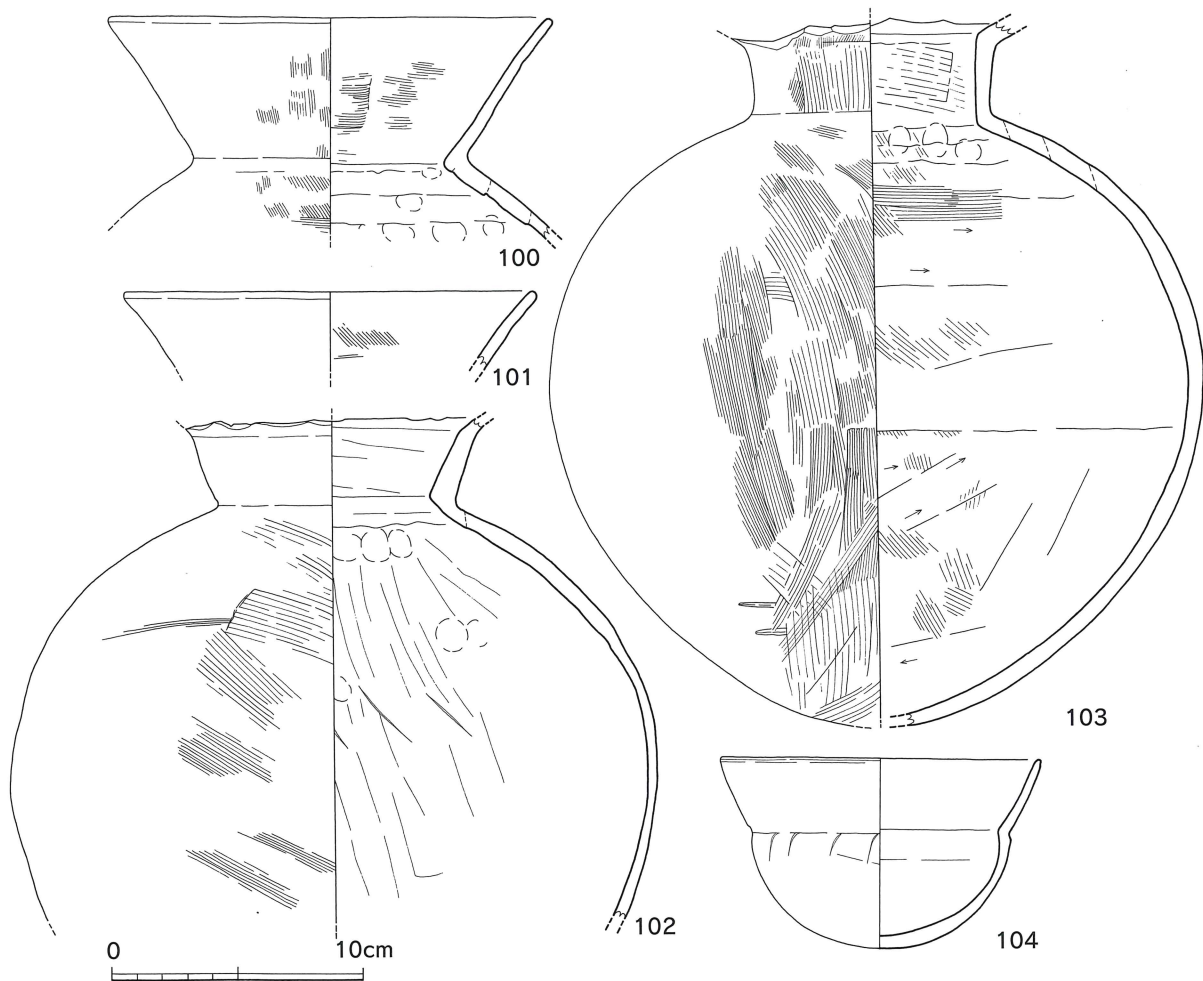
SH6 (第23図、第24図)

SH6は南北に長い調査区の南部に位置する。平面形はほぼ方形であるが、西側が調査区外で詳細は不明。規模は南北幅が約680cmであることから、東西幅も680cm前後と推定し、面積も46.24㎡と推定しておきたい。検出面から床面までの深さが約20cmである。支柱穴は住居址東半の2ヶ所が観察できたが、他住居との比較から調査区外に2ヶ所の計4ヶ所が推定される。検出面からの深さは約20cm前後である。東壁からの支柱穴の距離は、165cmと220cmの距離を持っている。住居址の中央部付近に炉址の痕跡は明確でない。東壁に接して長軸135cm、短軸110cm、床面からの深さ約12cmの土坑がある。

遺物は東壁に接する土坑内と住居址中央部床面上に集中する。



第23図 SH6実測図



第24図 SH6出土土器実測図(1)

遺物(第24図)

100は単口壺の口縁～頸部の破片である。頸部から直角に口縁部が長く伸びる。成形は積み上げで、内面に明瞭な積み上げ痕跡が残る。口縁部の外面は縦ハケ後に横ナデ、胴部外面は縦ハケ後にナデ、口縁部内面は横ハケ後にナデ、胴部内面は指頭圧痕で仕上げる。101は単口壺の口縁部破片である。口縁部外面は横ナデ、口縁部内面は斜行ハケ後に横ナデで仕上げる。102は二重口縁壺の頸部・胴部の大型破片で、口縁の屈折部を打ち欠く。胴部は最大径25.6cmで胴部高のほぼ中央にあり、球形をなす。成形は積み上げで、内面に明瞭な積み上げ痕が残る。胴部の最上部に著しい指頭圧痕が残る。頸部の直径は下が9.5cmで、上が11.4cmとなり、やや開き気味に立ち上る。頸部外面は横ナデ、胴部外面は斜行ハケ後にナデ、頸部内面は横ナデ、胴部内面は縦方向の篋ケズリで仕上げる。103は二重口縁壺で口縁の屈折部を打ち欠く。胴部は最大径26.1cmで胴部高のほぼ中央にあり、球形をなす。成形は積み上げで、内面に明瞭な積み上げ痕が残る。胴部の最上部に著しい指頭圧痕が残る。頸部は直径が9.5cmで直立する。頸部外面は縦ハケ、胴部外面は縦ハケ、頸部内面は横ハケ後に横ナデ、胴部内面の上部は横ハケ、中部から下部は斜行ハケ後に斜行する篋ケズリで仕上げる。なお、胴部下半で底部に近い部分に一部タタキが残るか。104は小型丸底壺風の鉢破片である。碗状の器形から僅かに内湾する口縁部が外方に開く。口縁部は内外面とも横ナデ、鉢部内面はナデで外面は横ナデ後に上部を板状工具痕と指ナデで仕上げる。

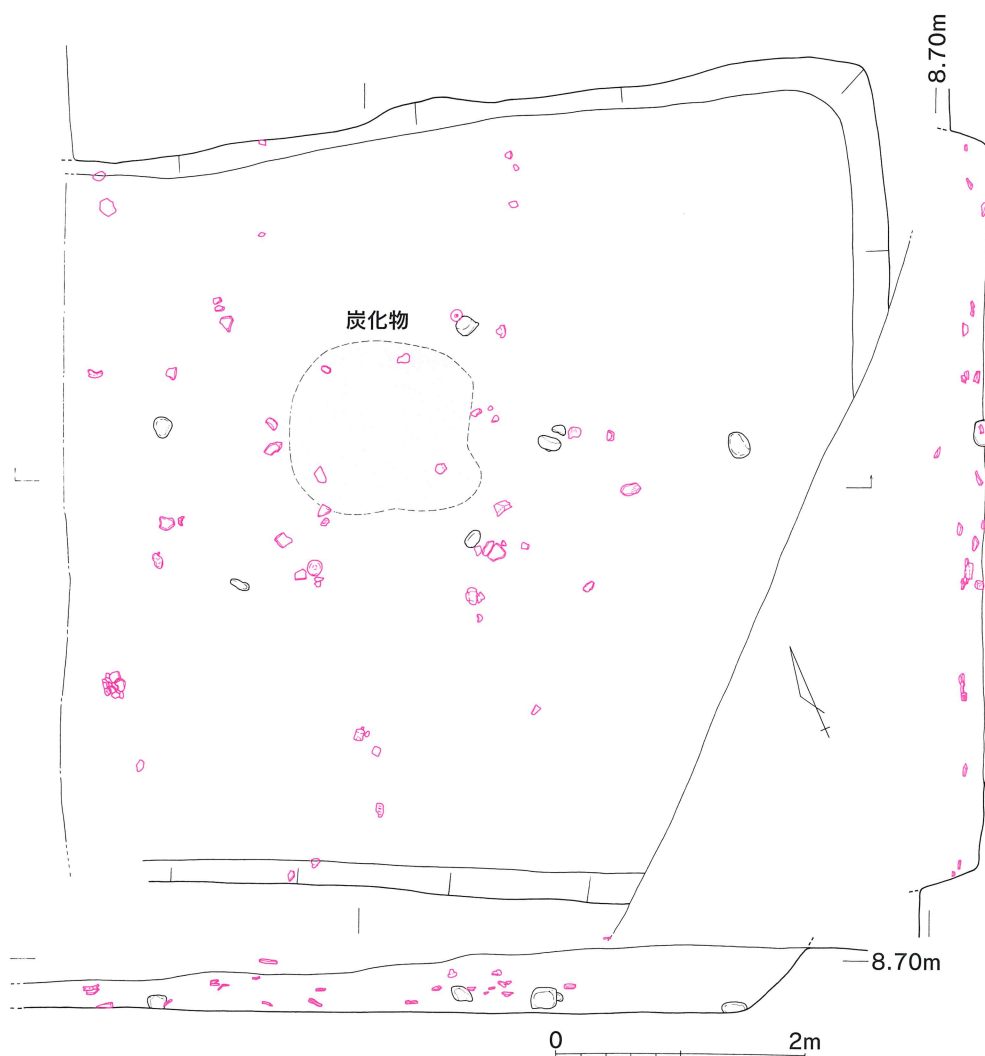
SH7 (第25図)

SH7は南北に長い調査区の中部に位置する。平面形はほぼ方形であるが、西側が調査区外で詳細は不明。規模は南北幅が約650cmであることから、東西幅も650cm前後と推定し、面積も44㎡前後と推定しておきたい。検出面から床面までの深さが最大で約55cmである。支柱穴は見られなかった。住居址の中央部付近に炉址の痕跡は明確でないが、焼土・炭化物の集中範囲ある。焼土・炭化物の集中範囲は東西140cm、南北135cm東壁に接して長軸135cm、短軸110cm、床面からの深さ約12cmの土坑がある。

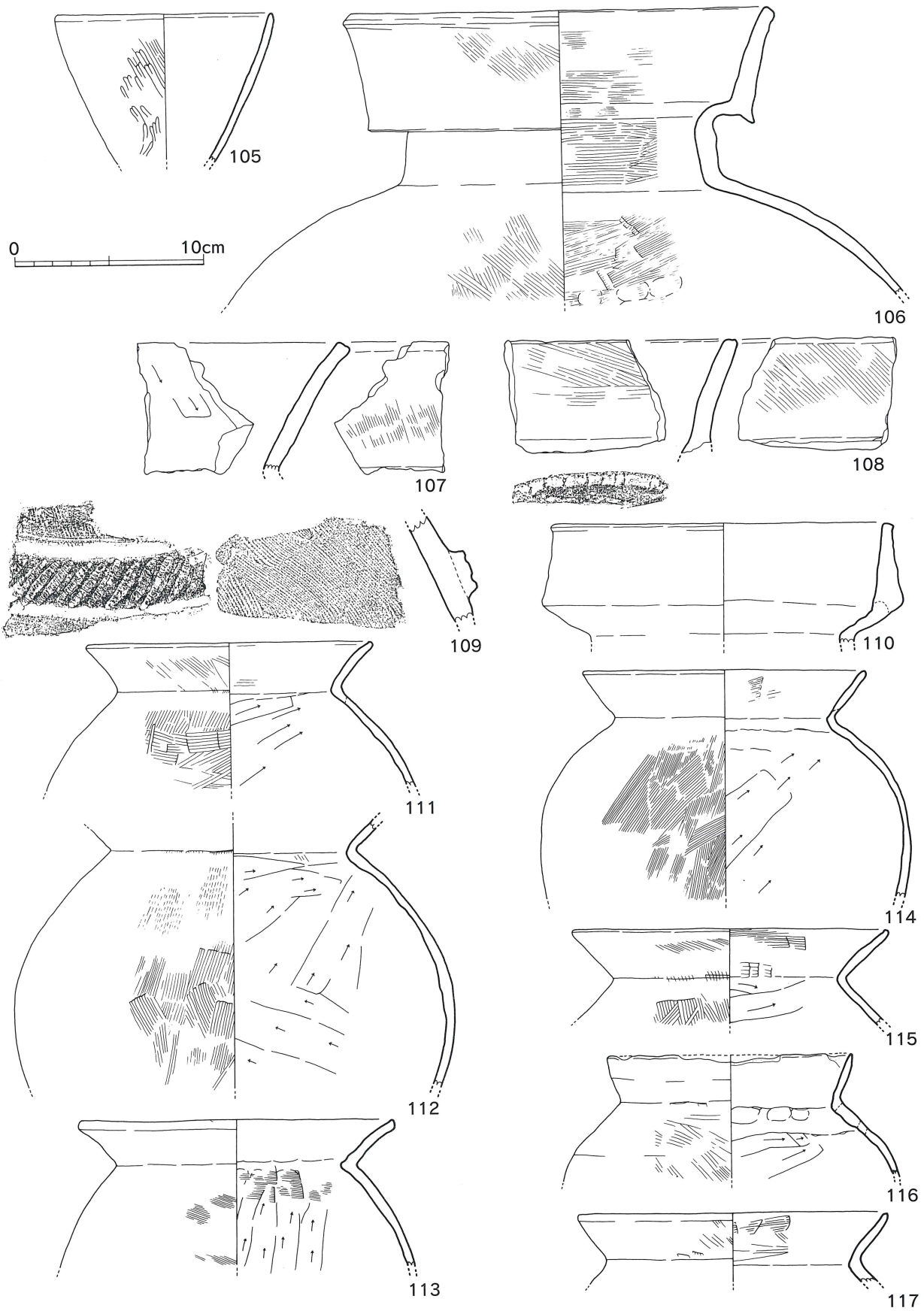
遺物は住居址中央部の焼土付近に多いが、密集する様子はなく散在する。遺物も完形品や大型破片はない。

遺物 (第24図)

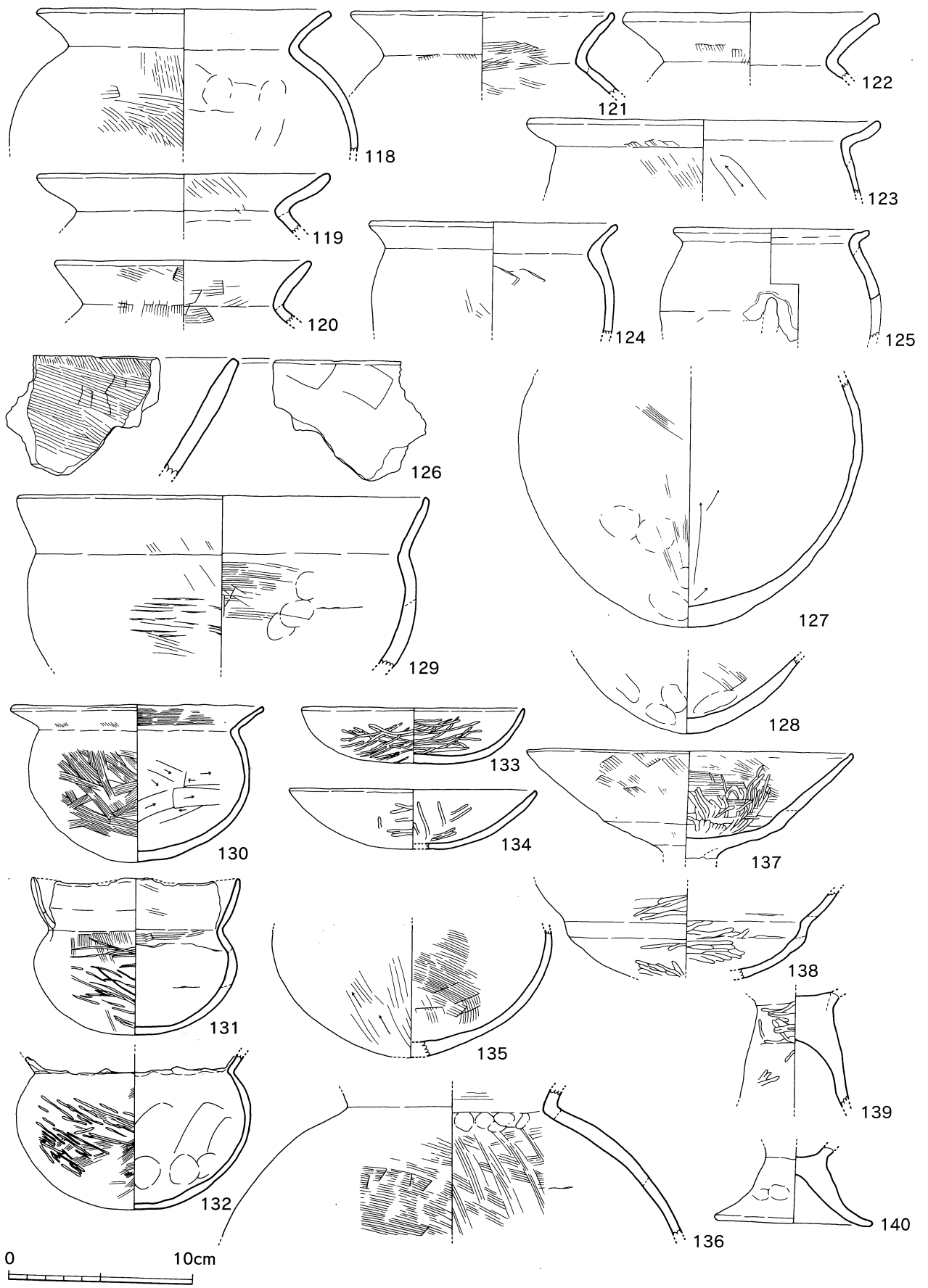
105は直口壺の口縁部破片である。外面は篋ミガキ、内面は丁寧なナデである。106は二重口縁壺の破片である。球形の胴部からやや内傾ぎみに立ち上がる。口縁・頸部間を逆L字状に曲げ、僅かに外傾させた口縁部となる。口縁端部付近は横ナデ、口縁部外面は斜行ハケ後に横ナデ、頸部外面は横ナデ、胴部外面はハケ後にナデである。口縁部・頸部内面は横ハケ後に横ナデ、胴部内面は最上部がハケ後にナデで、その下位が横ハケまたは斜行ハケである。107は単口縁壺の破片である。内外面は横ナデ・ハケ・横ナデである。108は二重口縁壺の破片である。内外面ともにハケで、破損面に接合痕が残る。109はおそらく在地性の壺の胴部破片である。外面はハケ後に突帯を廻らせ、上面にハケ目原体による圧痕を斜行させるように押圧する。110は二重口縁壺の破片である。僅か



第25図 SH7実測図



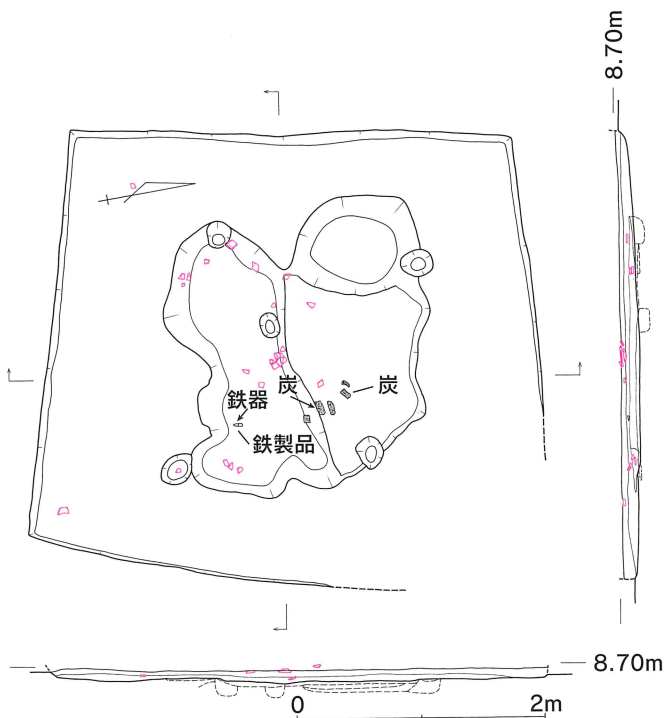
第26图 SH7出土土器実測图(1)



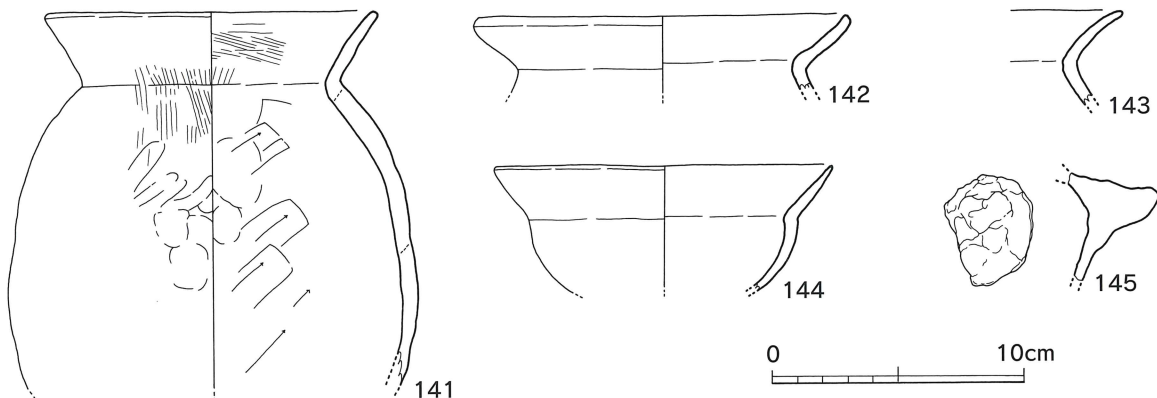
第27图 SH7出土土器实测图(2)

に残る頸部は内傾気味に立ち上がり、更に外傾する口縁部下半が延び、上方へ口縁部上部が上方へ立ち上がる。口縁部下半が縦ハケのほかは横ナデ。111から116は布留系の甕である。口縁部の外面はハケまたはナデ、胴部外面は横ハケと縦ハケからなる。口縁部の内面はナデ、胴部内面は縦または斜行のヘラケズリである。このうち116は口縁部がやや直口気味に立ち上がる。117もくの字上に口縁部が屈折するが、胴部内面の上半がナデ仕上げである。118～121はくの字形に屈折する。118は口縁部の内外面横ナデ、外面は横ハケと縦ハケであるが胴部内面は指押さえ後にナデ仕上げ。119～121の調整もハケまたはナデで、ヘラケズリはみられない。122はくの字状に屈折する口縁部をもつ甕で、頸部が締る。内外面とも基本的に横ナデ・ナデ調整がみられる。123はやや内径する胴部から直角に口縁部が外傾する甕である。この器形からあるいは弥生時代中期に遡る可能性が高い。胴部内面は縦ハケ。124と125は胴部上半に最大径がある小型甕で頸部から口縁部へは円く移行する。124は外面下半がハケ目、上半から口縁部内面にかけては横ナデである。胴部内面は上半がハケ、下半が斜行ハケである。125も

124と同様な甕であるが、口縁部は短い。胴部に焼成後の穿孔がみられる。126は鉢と推定される口縁部破片である。外面は斜行ハケ、内面はナデ調整で仕上げる。127は口縁部を欠く甕の胴部である。ほぼ球形の器形である。成形は積み上げで外面下半に指押え痕がある。外面はナデを主体に若干のハケ、内面はナデであるが、下半にヘラケズリ痕もみられる。128も127同様な甕の底部破片であろう。129は口径が22.4cmの大型の鉢である。ボウル状の鉢部からやや直口気味に口縁部が立ち上がる。130は小型の鉢で外面はハケ。131と132も小型の鉢で胴部外面はハケ後にミガキである。内面は130がヘラケズリ後にナデで、131と132はナデ仕上げである。133と134は小皿状の坏である。内外面はミガキである。137から140は高坏である。138には段が残る。137から139はハケの他、部分的にミガキが残る。



第28図 SH8実測図



第29図 SH8出土土器実測図

SH8 (第28図)

SH8は南北に長い調査区の北部に位置する。平面形はほぼ方形である。規模は南北幅が約400cmで、東西幅は365cm前後であるから、面積は14.6㎡と推定しておきたい。検出面から床面までの深さが最大で約20cmである。支柱穴は4本である。住居址の中央部付近に炉址の痕跡は明確でないが、焼土・炭化物の集中範囲ある。柱穴間の内側を浅く掘り下げている。

遺物は住居址中央部で柱穴間の内側を浅く掘り下げた部分散在する。遺物も完形品や大型破片は少ない。

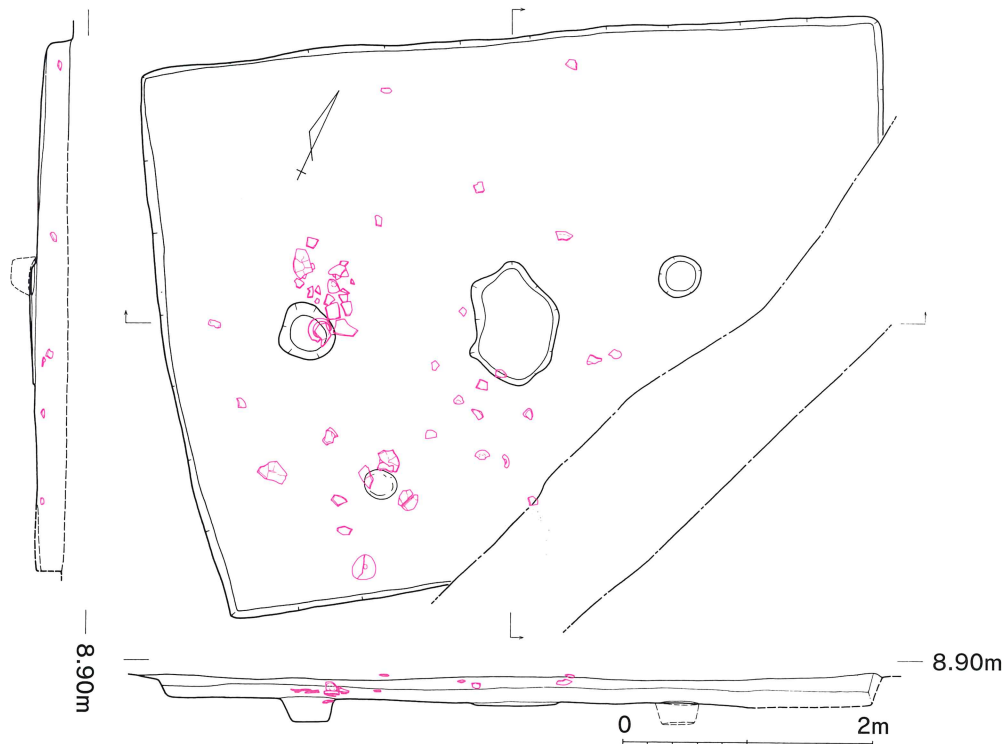
遺物 (第29図)

141は長胴の甕で、口頸部間がすぼまる。口縁の内面と口縁外面から胴部上位のハケ、胴部外面はナデと一部ミガキ。胴部内面はヘラケズリとナデで仕上げる。142は布留系の甕の口縁部破片である。残存部においては内外面の調整はナデである。口頸部はくの字状に屈折するが、口縁部がわずかに内湾する。143はV様式系の甕の破片である。口縁部は内外とも横ナデ、他はナデで仕上げる。144は小型鉢で、ボウル状の鉢部からやや直口気味に口縁部が立ち上る。口縁部は内外とも横ナデ、他はナデで仕上げる。145は甕の取っ手である。内外指押え。

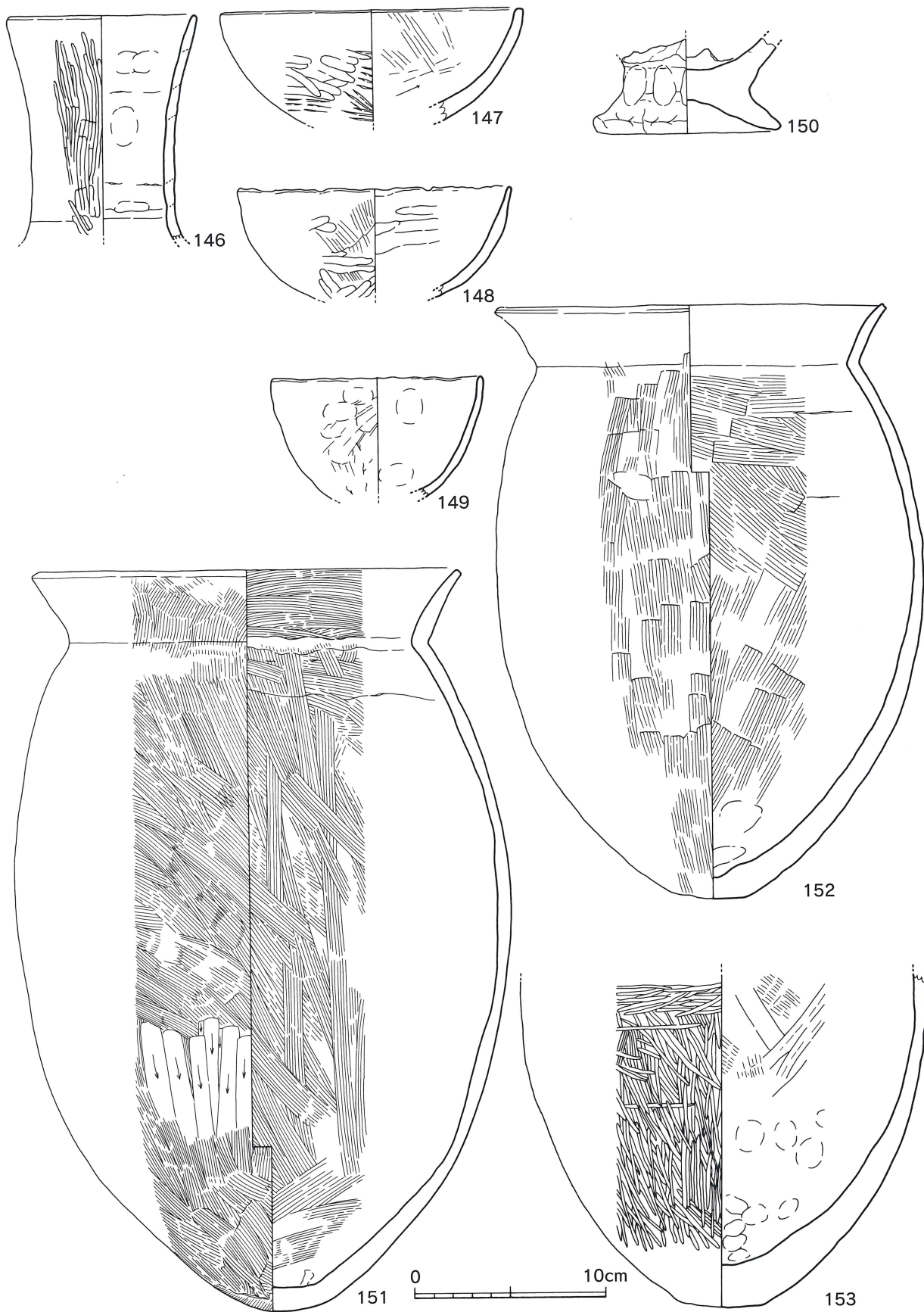
SH9 (第30図)

SH9は南北に長い調査区の中部に位置する。平面形はほぼ方形である。規模は南北幅が約595cmであることから、東西幅も445cmの長方形で、面積は26.47㎡と推定しておきたい。検出面から床面までの深さが最大で約20cmである。支柱穴は南北の長軸に2本見られる。住居址の中央部付近に炉址があり、東西方向に長軸100cm、短軸70cmの規模をもつ浅い皿状である。焼土・炭化物の集中範囲ある。焼土・炭化物の集中範囲は東西140cm、南北135cm東壁に接して長軸135cm、短軸110cm、床面からの深さ約12cmの土坑がある。

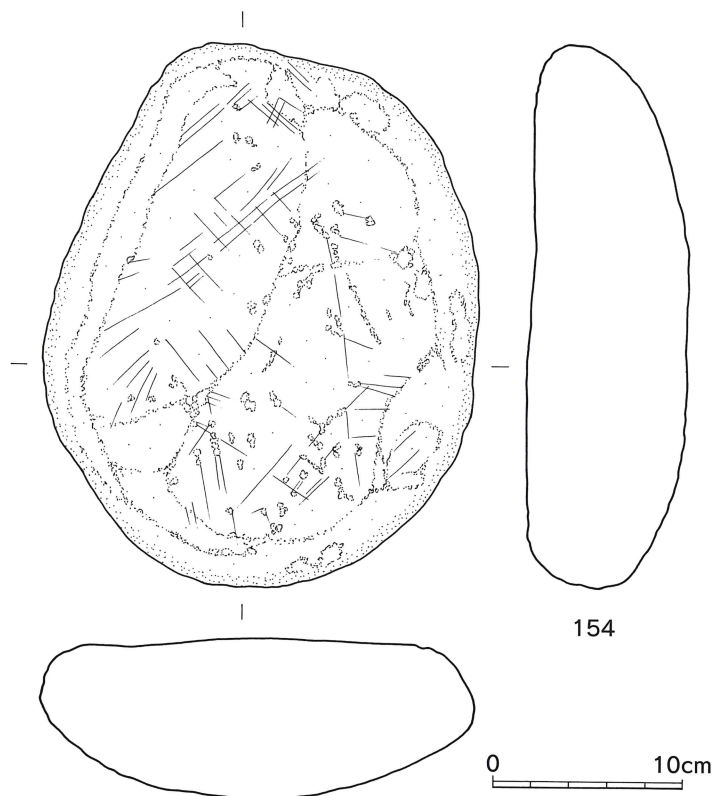
遺物は住居址の東半分と南側柱穴付近多い。石皿または配石は住居址南東隅部に近い部分に位置する。



第30図 SH9実測図



第31图 SH9出土土器实测图



第32図 SH9出土砥石実測図

ケで仕上げる。152の調整は口縁部の内外面で横ナデ、胴部外面が縦ハケ、胴部内面は胴部最上部の5cmが横ハケ、その下位は縦・斜行するハケで仕上げる。153の調整は外面が縦ハケ後に上部を横ミガキ、下半は縦ミガキ、内面はハケ後ナデで、下半は指圧後にナデで仕上げる。

石器 (第25図)

154は砥石である。長軸29cm、短軸23cm、重さ7,800gの大きさをもつ楕円の河床礫を用いる。上面の平坦面に摩滅痕が残る。線状痕は金属器の研ぎだしともなうものか。

SH10 (第33図)

SH10は南北に長い調査区の中部に位置し、調査区外に係っているので全形は明確でない。住居址の西壁と南壁の一部が残っているため平面形はほぼ隅丸方形であると推定する。また西壁沿いに土坑があるが、これが住居址にしばしばみられる壁沿いで等間隔にある土坑であれば、壁一辺は約400cmとなる。したがって住居址の規模は400cm×400cmと推定されることから面積は16㎡と推定しておきたい。検出面から床面までの深さが最大で約15cmである。支柱穴は明確ではない。西壁沿いの土坑は直径35cm前後のほぼ円形である。

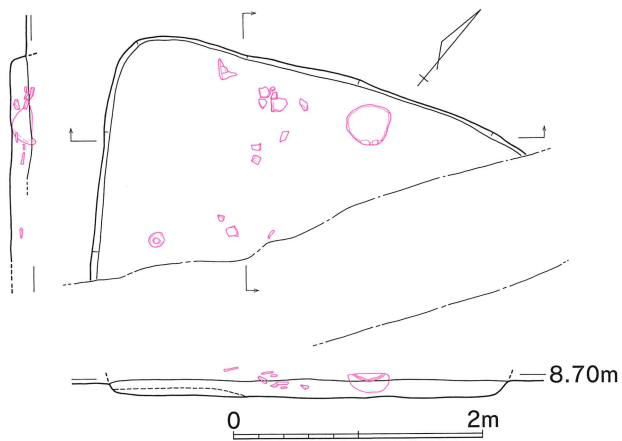
遺物は住居址の西側壁沿いで、土坑の南側に多い。

遺物 (第33図)

155は小壺で、口頸部が短く直口する。器高11.1cm、口径7.1cm、胴部最大径11.5cm、底径5.2cmの大きさである。胴部が著しく張る。底部はやや厚い。口縁部は内外面が横ナデ、胴部外面の上半はハケ後に縦ミガキ、下半は横ミガキとナデで仕上げる。胴部内面は成形時の指押えと、その後のナデで仕上げる。156と157は跳ね上げ口縁の流れを引く長胴風の甕である。頸部が僅かにすぼまり、口縁部がややくの字状に外傾する。156は口縁部

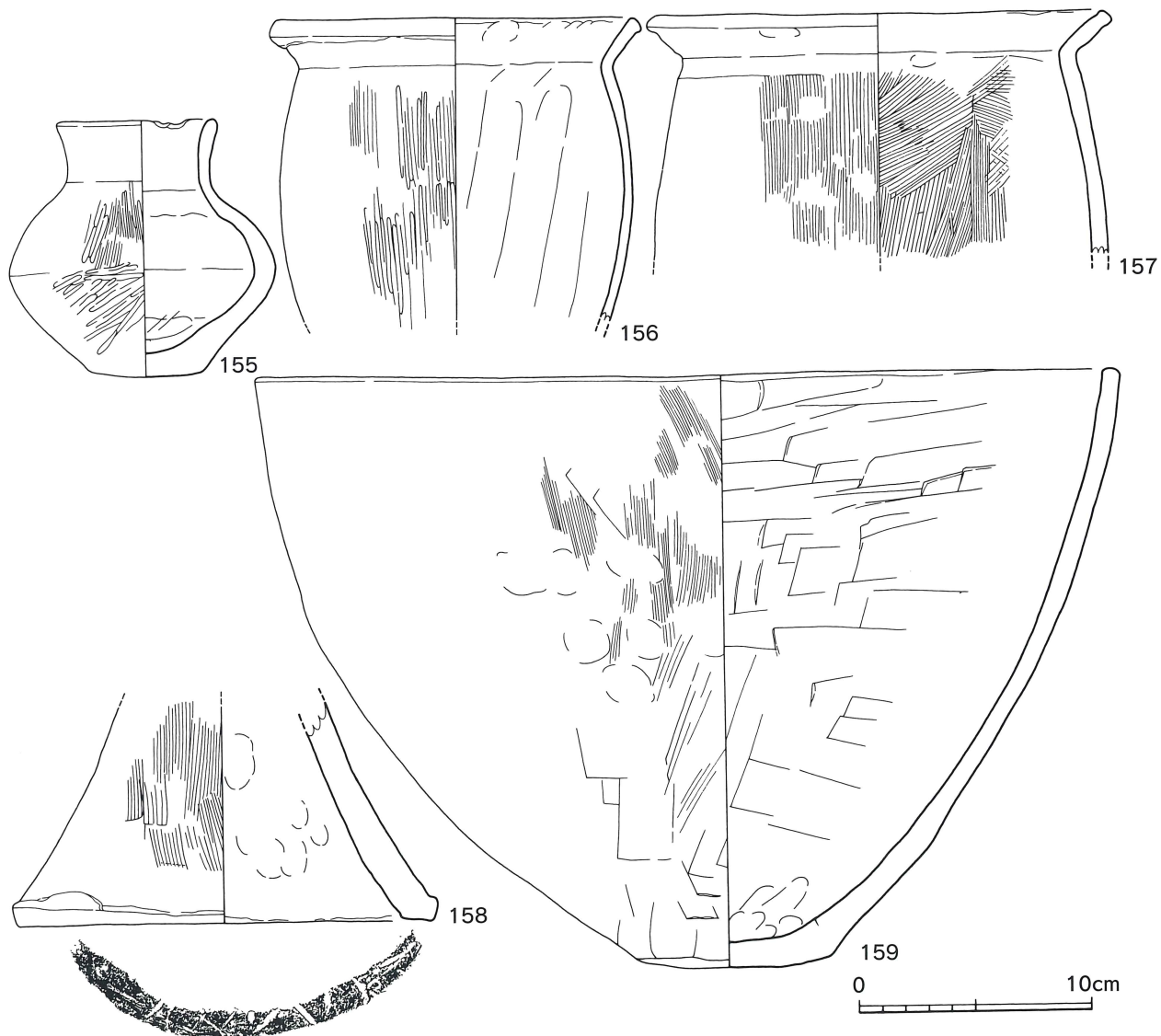
遺物 (第24図)

146は長頸壺の口縁部破片である。成形は積み上げで内傾接合により内面に指圧痕が残る。外面は丁寧な縦方向のミガキで内面は横ナデである。147～149は素口縁で碗形の鉢ある。147は直径16cm、器高約6.5cmの大きさである。外面の上部が横ナデ、下半はヘラミガキとタタキ、内面は縦ハケと斜行ハケで仕上げる。148は直径14.4cm、器高約6.5cmの大きさである。内外面ヘラミガキで仕上げる。149は前2例に較べ深めの例で、直径11.2cm、器高約6.7cmの大きさである。外面は未調整で、指圧痕が観察される。内面は横ナデ・縦ナデ・ヘラミガキで調整している。外面に黒斑がある。150は台付鉢の底部破片であり、表面に指圧痕が観察される。151～153は長胴の甕で、最大径が胴部の上半にあり、口頸部はすぼまる。口縁部は外傾する。151の調整は外面が縦・横のハケ、内面は口縁部が横ハケで胴部が縦・斜行するハ



第33図 SH10実測図

の内外とも横ナデ、頸部は横ナデ、胴部外面は縦ハケ後に縦ミガキ、胴部内面は縦方向のナデ。157は口縁部は内外面横ナデ、頸部内面は横ナデ、胴部外面は縦ハケ、内面はほぼ斜行ハケと縦ハケで仕上げる。158は口径37.1cm、器高25.5cm、底径8.6cmの大型の鉢である。底部から軽く内湾しつつ立ち上る素口縁となる。成形は積み上げで、外面に指頭圧痕が残る。調整は、外面に斜行または縦方向のハケ、内面は横方向のハケ、内面見込は指



第34図 SH10出土土器実測図

ナデ、底部外面は円状にナデで仕上げる。外面に黒斑がある。158は台付鉢などの脚部である。内傾しながら立ち上る。脚下方の器厚は1.7cmと厚い。外面は縦ハケ、内面の下半は横ナデであるが、内面上半は積み上げ時の指頭圧痕が残る。接地面は平らで圧痕が残る。以上観察してきた土器のうち155~157は古墳時代前期のものとは異なる様相を持っている。弥生時代中期の名残と判断される特徴から弥生時代後期前葉の土器群と考えられる。

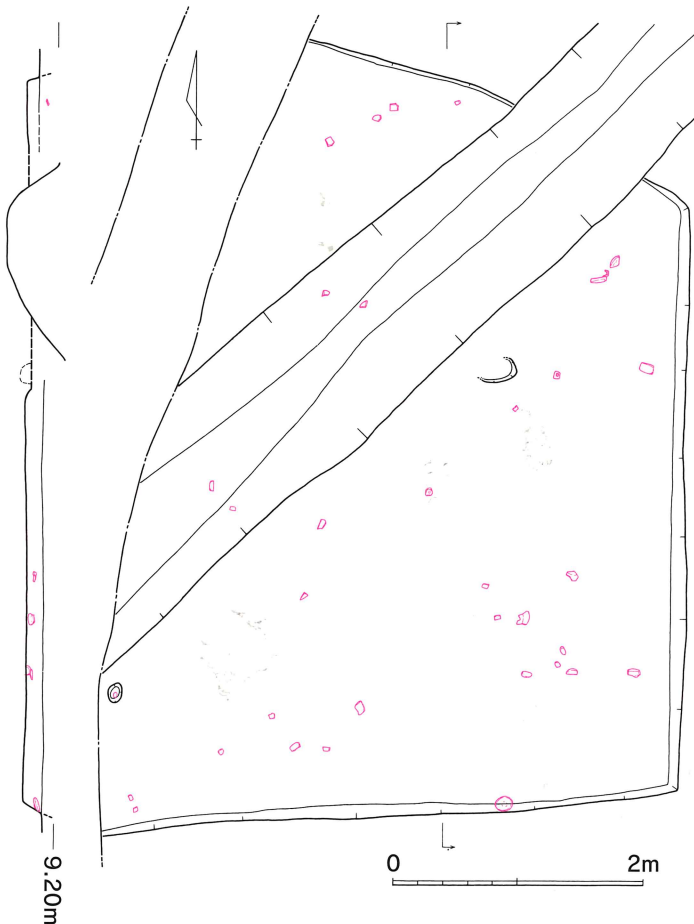
SH11 (第35図)

SH11は南北に長い調査区の南部に位置する。住居址中央部と西半部が後世の溝や調査区外に係っていることもあり、平面形は方形と考えられるが明確でない。北東隅部から北壁が開き気味に延びる。住居址南東隅部は鋭く屈折する。北壁と南壁の最長部分で620cm、東西幅は不明である。検出面から床面までの深さが最大で約15cmである。支柱穴は明確でない。炉址もはっきりしない。

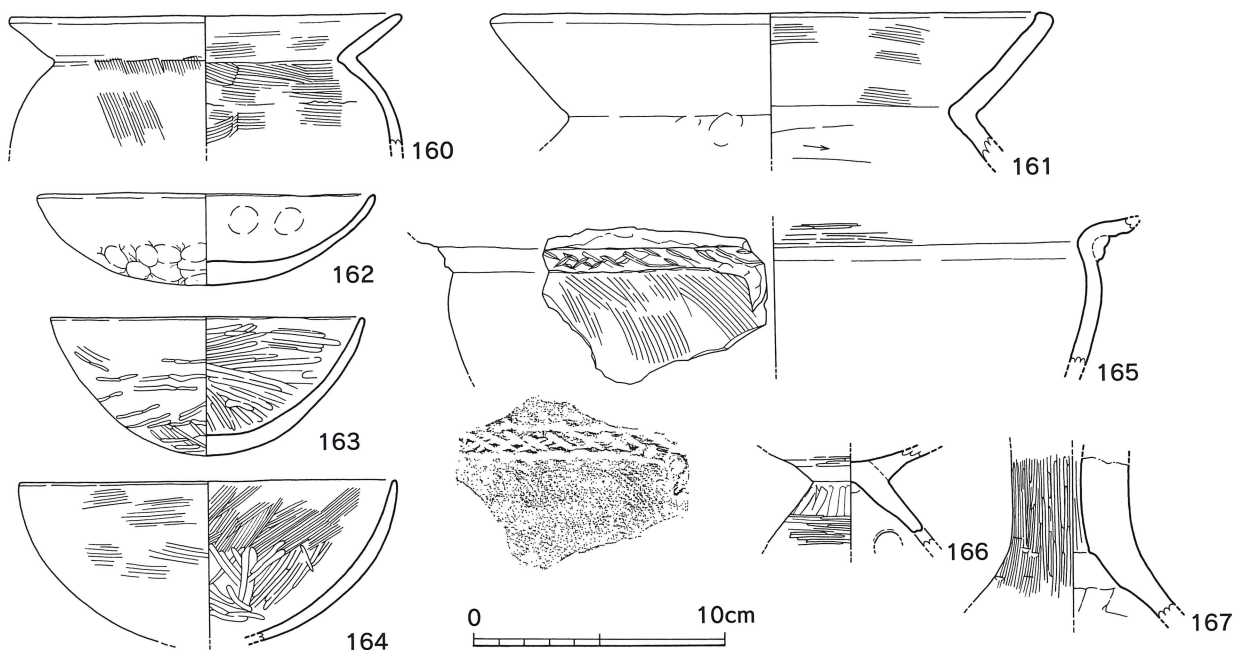
遺物は住居址内に散在する状況で、部分的に集中するとはいえない。石皿または配石は住居址南東隅部に近い部分に位置する。

遺物 (第36図)

160は口縁部がくの字状に屈折する甕である。頸部が強く屈折するため内面の稜が鋭く残る。胴部の最大径が上半にある。口縁部外面は横ナデ、胴部外面は縦ハケ後にナデ、口縁部内面は横ハケ後にナデ、胴部内面は横ハケで仕上げる。161も口縁部がくの字状に屈折する布留系の大型甕である。口径は22.4cm、頸部径は16.2cmである。成形は積み上げで、外面に指圧痕が残る。外面は横ナデで、口縁部の内面は横ハケ後にナデ、胴部内面はヘラケズリで仕上げる。162は皿もしくは直口鉢である。手づくねで成形するため外面下半や内面に指頭圧痕が残る。外面上半は横ナデ、外面下半は指頭圧痕のみの未調整、内面はナデで仕上げる。内面に赤色顔料が付着している。163と164は単口縁の鉢または小鉢である。163の口径は15cm、器高6.3cm+ α である。外面は斜行ハケ後にナデ、内面は斜行ハケ後にナデで仕上げる。165は大型鉢の破片で、ボウル状に立ち上がり、外方へL字状に屈曲させる。頸部に突帯を貼り付け、胴部側に垂らしている。また突帯上に斜格子状の刻み目を入れている。口縁部外面は横ナデ、胴部外面は斜行ハケ、口縁部内面は横ハケ後にナデある復元できる口径は29cm、胴部内面はナデである。166は精製の器台破片である。脚部に穿孔がある。器台部外面は横ミガキとナデ、脚部外面は上半が縦ミガキ、下半が横ミガキであ



第35図 SH11実測図



第36図 SH11出土土器実測図

る。器台部内面はナデであるが、やや摩滅している。脚部内面はナデ仕上げ。167は高杯の脚部である。外面は縦ミガキ、内面上半は絞り痕、下半の上部がナデ、下半下部が横ハケで仕上げる。

SH12 (第37図)

SH12は南北に長い調査区の南部に位置する。平面形はほぼ方形と考えられる。隣接するSH5とSH6に切られ、南西隅部が残っているだけで規模は全く不明である。検出面から床面までの深さが最大で約13cmである。主柱穴はしっかりしたものが南壁から推定200cm、西壁から330cmの距離をもっていることから、あるいは長方形プランで二本主柱穴の可能性もある。柱穴の西側に長軸90cm、短軸80cm、深さ17cmの規模おもつ炉址がある。この炉址やこの周辺には焼土・炭化物の集中範囲ある。

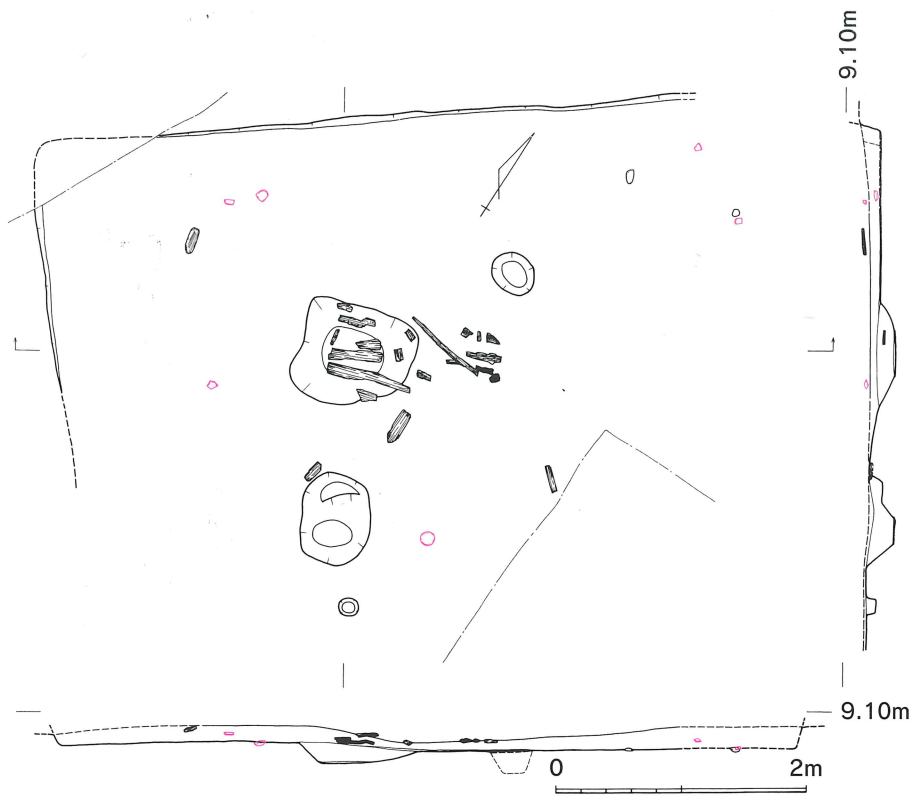
遺物は住居址の東半分と南側柱穴付近多い。石皿または配石は住居址南東隅部に近い部分に位置する。

遺物 (第24図)

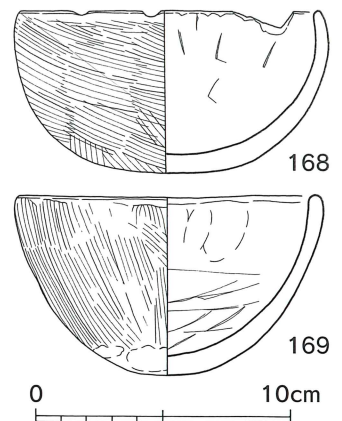
168は単口縁の小鉢で、低部から丸く立ち上り、内側に内湾する。外面は横ハケで、内面は上半にナデ、下半には工具痕を丁寧に施す。口縁に大小3ヶ所の打ち欠き痕が残る。169は単口縁の小鉢で、底部から丸く立ち上り直口気味に立ち上る。外面は縦ハケで、内面は上半にナデ、下半には工具痕が残る。外面の下部から底面にかけては成形時の指押え痕と、ナデ調整痕が残る。口縁に大小3ヶ所の打ち欠き痕が残る。このように168と169は微妙に製作技術が異なっており、別の工人による製作が推測される。

SH13 (第37図)

SH13は南北に長い調査区の北部に位置する。平面形はほぼ方形と考えられる。北側に隣接する溝に切られていることと、住居址東側の残りが悪く規模は全く不明である。検出面から床面までの深さが最大で約15cmである。主柱穴も全く不明であった。遺物は住居址の西半分に散在するにすぎない。



第37図 SH12実測図



第38図 SH12出土土器実測図

遺物 (第38図)

170と171は小型丸底壺である。170は口径12.4cm、頸部径は8.2cm、器高6.7cmで、外面は口縁部・胴部とも斜行ハケ後に横ナデ仕上げ。内面は口縁部が横ナデ・一部ハケ目後に

ヘラミガキ、胴部はヘラケズリ後にヘラミガキである。171は口径11.2cm、頸部径は8.6cmで、外面は口縁部が横ナデ、胴部が縦ハケ後にナデ仕上げ。内面の口縁部は斜方向のナデ後に縦方向のミガキ、胴部内面はナデ仕上げ。172は単口縁の大型鉢で、口径29cm、胴部最大径29.4cm、器高15.6cm(推定)の大きさである。口縁部上端付近の内外面が横ナデ、外面は斜行ハケとナデ、内面は上半の斜行ハケと下半のヘラケズリからなる。

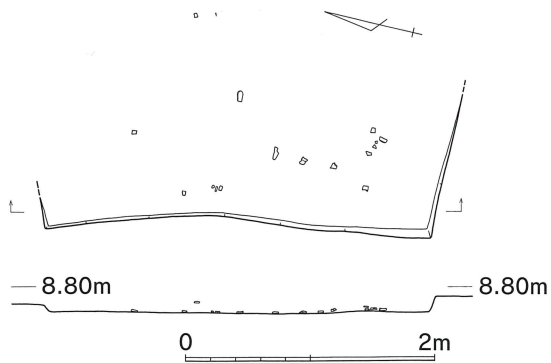
SH14 (第41図)

SH14は南北に長い調査区の中部に位置する。平面形は長方形で、隅部が鋭く屈折する。規模は長軸が約620cm、東西幅は490cmで、面積は30.38㎡となる。検出面から床面までの深さが最大で約25cmである。支柱穴は南北の長軸の中心軸に沿って2本見られ、短い側壁から135cmと145cmの距離をそれぞれもつ。また支柱穴に直交するように2本の小柱穴がある。住居址の中央部付近に炉址があり、長軸に直交するような造作を行なっている。炉址の長軸は90cm、短軸70cmの規模をもつ浅い皿状の炉である。炉址には焼土・炭化物が集中する。このほか西側柱穴の南側壁間に赤色顔料が集中する範囲がある。この部分の赤色顔料集中範囲は東西100cm、南北80cmの広がりをもつ。北側の長側壁に接して2個の柱穴状の窪みがあるが、その性格は不明。

遺物は住居址内に散在する状況で、部分的に集中するとはいえない。石皿または配石は住居址南東隅部に近い部分に位置する。このうち砥石は南壁に近い柱穴状の穴に直立に近い形で出土した。また北壁沿いに小型で坩堝状の小鉢が散在している。

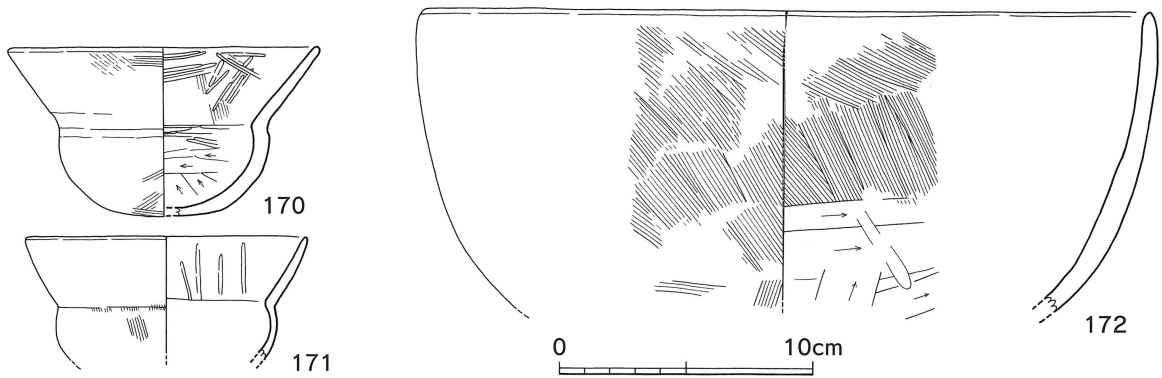
出土土器 (第42図・第43図)

173は、くの字状に口縁部が屈折する甕の破片。内外面とも調整は横ナデ仕上げ。174は長胴風の甕か。胴部は上部で緩くすぼまり、頸部から口縁僅かに外傾する。外面の上半は指頭圧痕が残るだけで未調整。下半も縦方向のナデである。内面は斜行ハケ。175も長胴風の甕か。口径は22.1cmである。胴部は上部で緩くすぼまり、頸部

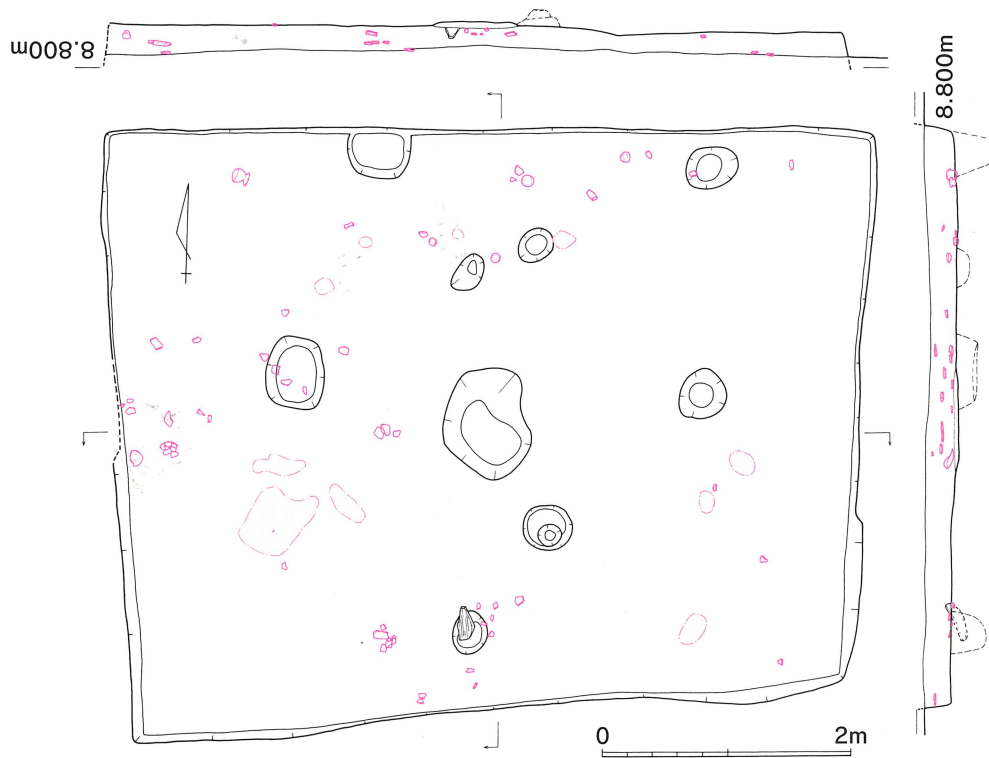


第39図 SH13実測図

から口縁僅かに外傾する。外面の上半は斜行ハケ、下半はナデ仕上げか。口縁部の内面はハケ工具による横ナデ、胴部内面は横ハケ仕上げ。176は単口縁に近い鉢である。胴部は砲弾状に立ち上がり、口縁部は緩く外反する。外面は横方向の並行タタキ痕が残り、摩滅する。口縁部内面は横ハケ、胴部内面は斜行ハケ後にナデ仕上げ。177は小鉢か。ボウル状に立ち上がり、上部で直口気味の口縁となる。成形は手づくねで、調整はない。178は器台か。下半が

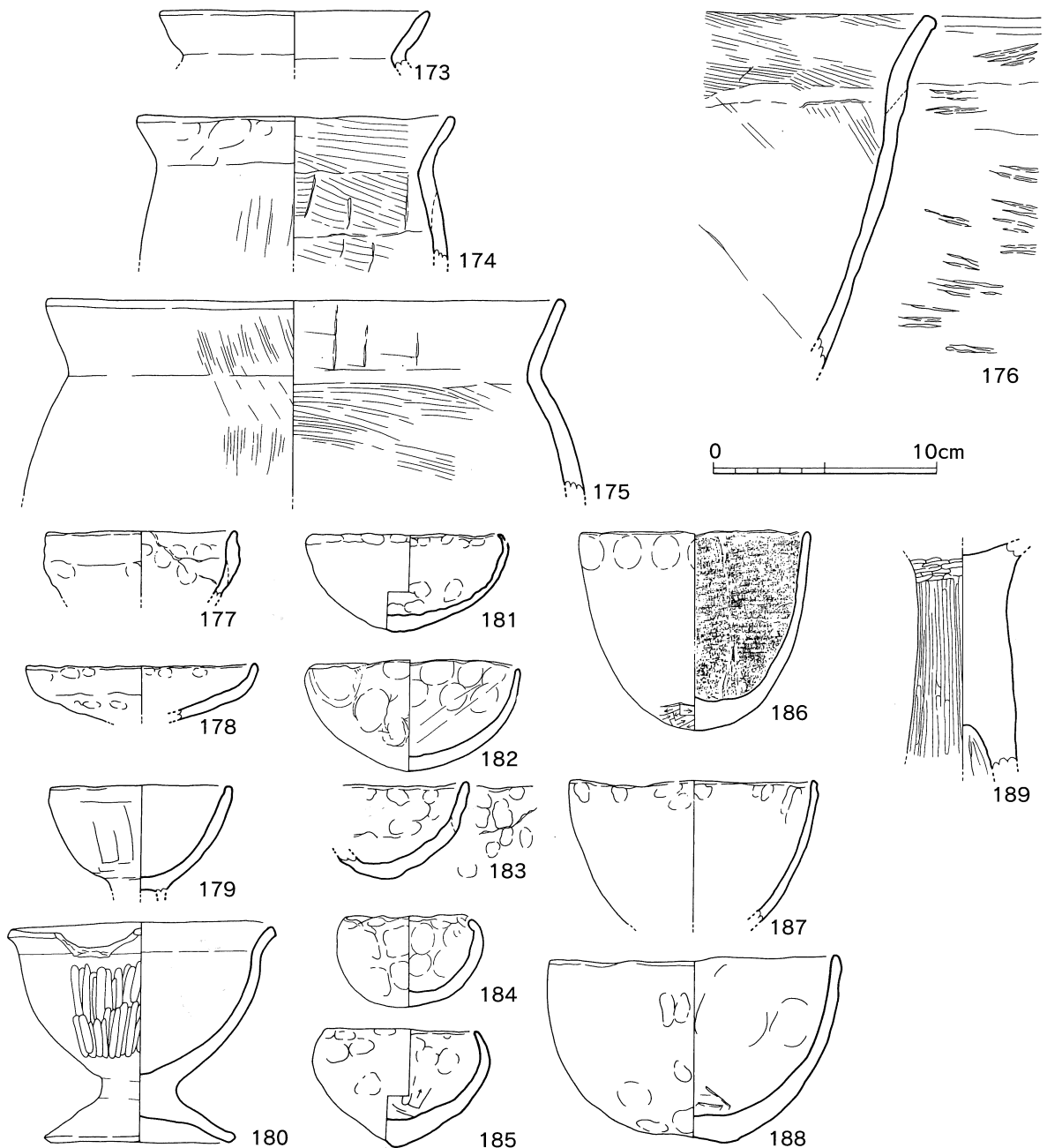


第40図 SH13出土土器実測図

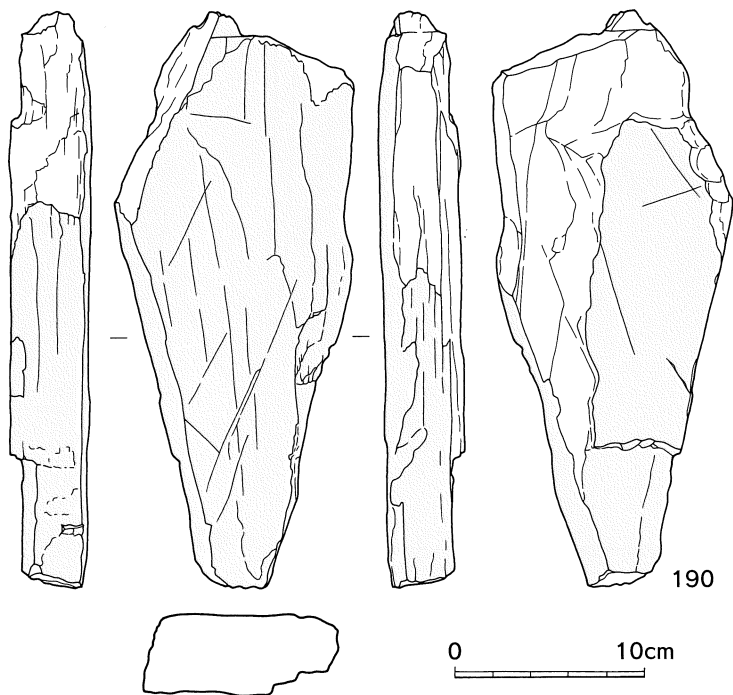


第41図 SH14実測図 (網かけは赤色顔料散布)

朝顔状に開き、口縁部が短く直口気味に立ち上る。ほぼ未調整で、指頭圧痕が顕著。179はボウル状に立ち上る小鉢を持つ台付鉢である。内外面はナデ仕上げ。脚部に近い鉢部下半には工具痕が残る。180は小型の台付鉢である。低い脚部からボウル状に立ち上がり、短く外反する口縁部となる。短い口縁部の調整は内外面とも横ナデ、鉢部外面は指頭圧痕後に縦ミガキ、鉢部内面は指頭圧痕後にナデで仕上げる。脚部内外面は概ねナデ仕上げ。181～185は小鉢または碗である。185のように底部が尖るものとそれ以外のものに区別できる。口縁が直口気味の183もあるが、ほかは内側に内湾する。成形は手づくねで、指頭圧痕が残る。186～188も小鉢であるが、本住居址の



第42図 SH14出土土器実測図



第43図 SH14出土砥石実測図 ※網かけは磨痕

なかでは中型の部類に属する。186と187は丸底から緩く立ち上るものである。186は指頭圧痕後に外面はナデ、内面は貝殻条痕調整、底部外面はヘラケズリなどで仕上げる。187は手ずくねで、外面の上半は未調整、下半が縦ナデ、内面もナデ。188は丸底で碗形呈し、手ずくねで成形している。外面は未調整であるが、底部はナデ仕上げ。内面は軽くナデ、見込部に工具痕が残る。189は高坏の脚部である。坏部と接する付近の外面は横方向のヘラミガキ、その下は縦方向のヘラミガキで仕上げる。内面は縦方向のナデ仕上げ。

出土石器 (第43図)

190は内外面と側面に琢磨痕のみられる砥石である。石材は結晶片岩である。法量は、重さ2,400g、長さ30.3cm、幅12.7cm、厚さ4.4cmである。

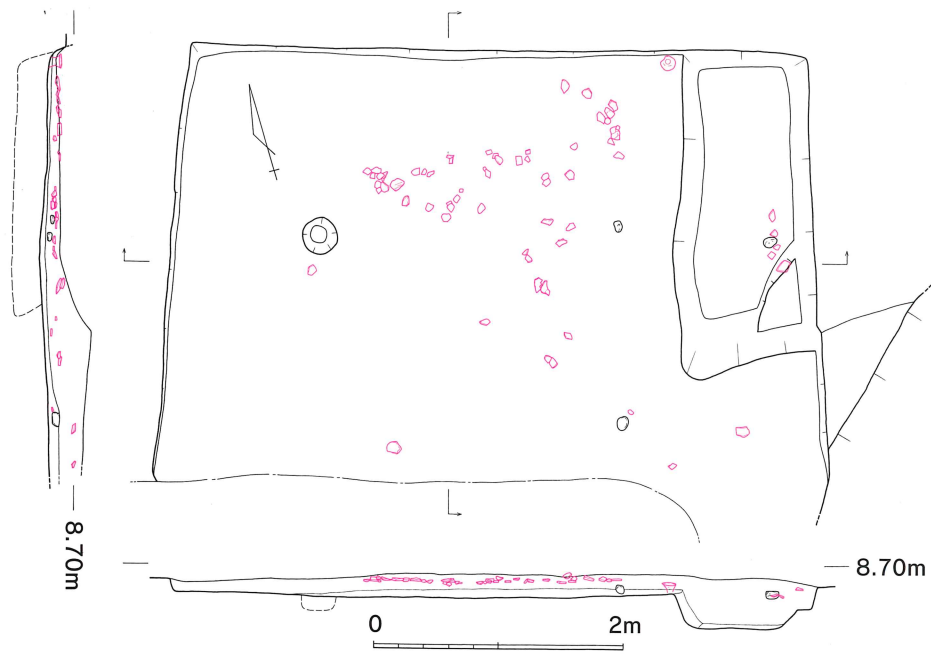
SH15 (第44図)

SH15は南北に長い調査区の中部に位置する。SH 7に南半を切られているが、平面形はほぼ方形である。規模は東西幅が約540cmであることと、残存部の広がりから長方形ではなく、南北幅も540cmの長方形で、面積は29.16㎡と推定しておきたい。検出面から床面までの深さが最大で約35cmである。住居址の北東隅部から東壁に沿って長方形の掘り込みが設置されている。その規模は南北260cm、東西115cm、深さ25cm (床面から)である。北西隅部に近い部分に支柱穴がみられる。この位置から考えて本来は4本支柱穴であったと考えられる。

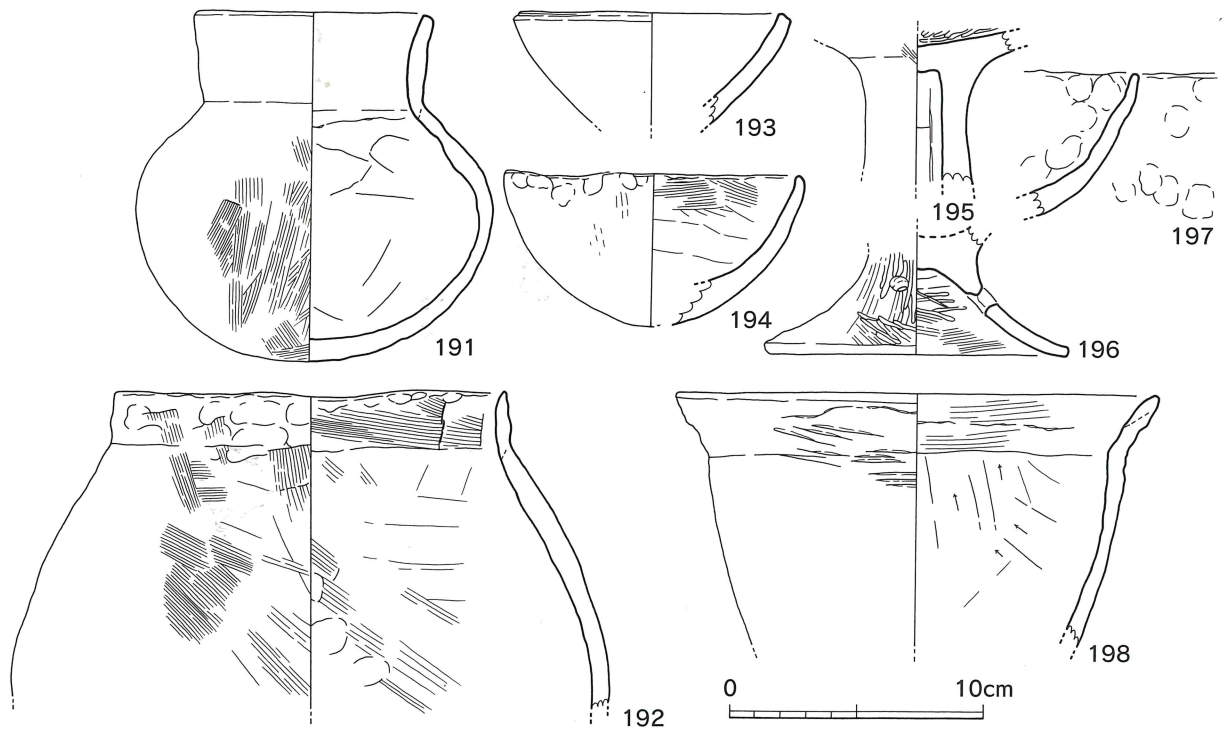
遺物は柱穴と長方形の土坑の間に集中している。

出土土器 (第45図)

191は口縁部が直口する小壺で、成形は積み上げ。口縁部の内外は横ナデ、胴部外面の上部はハケの後に横ナデ、下半は縦ハケとナデで仕上げる。内面は頸部付近がナデ、胴部内面はケズリのようなナデ仕上げ。192は単口縁の壺か。長胴形の胴部で、すぼまった部分から直口する短い口縁がつく。口縁の外面は未調整、胴部外面は縦・斜行ハケ、口縁部内面は横ハケ、胴部内面は斜行ハケか横ナデ仕上げ。193は碗か。やや内半しつつ外方へ開く。内外面はナデ仕上げ。194は単口縁の小壺で、成形は積み上げか。外面ナデ、内面の上部が横ハケ、下半が横ナデ仕上げ。195は坏部下半と脚部上半の高坏破片である。坏部外面は縦ハケ、坏部内面はヘラミガキ、脚部外面は摩滅している。196は台付鉢の脚部である。脚部が緩やかに外湾しつつ接地する。脚部外面は縦ミガキと下半の斜行ハケ後のヘラミガキ、内面は横ハケ後にヘラミガキ。穿孔は3ヶ所に見られる。197は碗または、小鉢、器面の調整はみられない。198は深鉢で、砲弾状に立ち上り、口縁部が僅かに外傾する。頸部及び胴部の最大径は16.5cmである。口縁部から胴部の上部は平行タタキ後には未調整、胴部外面の下位はナデで仕上げる。口縁部内面は横ハケ、胴部内面は一部ヘラケズリ後にナデで仕上げる。



第44图 SH15实测图



第45图 SH15出土土器实测图

SH16 (第46図)

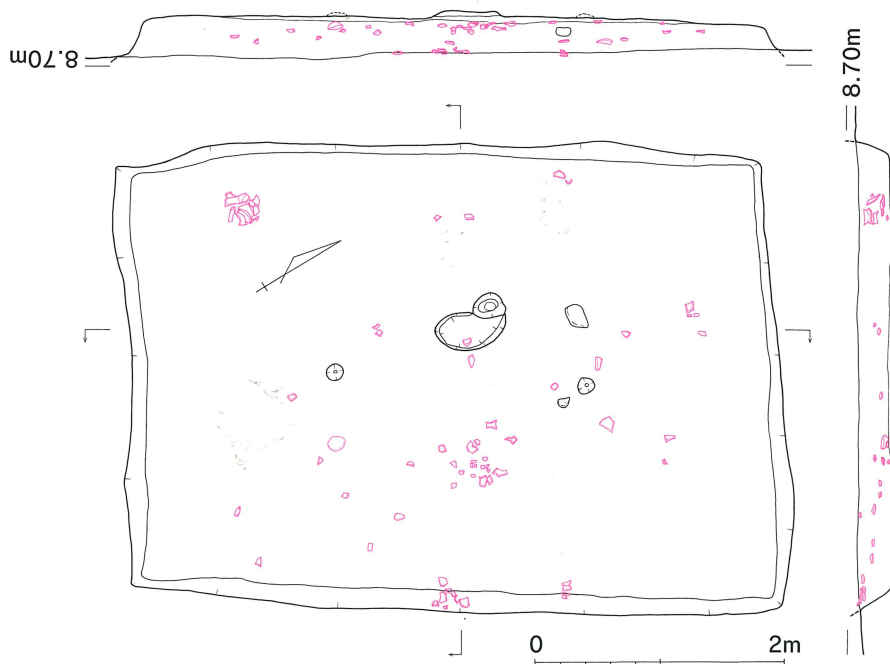
SH16は南北に長い調査区の北部に位置する。平面形はほぼ長方形である。規模は南北の長軸幅が約535cmで、東西の短軸幅は378cmの長方形で、面積は20.22㎡となる。検出面から床面までの深さが最大で約30cmである。支柱穴は南北の長軸に2本見られ、北壁から155cm、南壁から163cmに位置している。住居址の中央、やや東寄りに長軸60cm・短軸30cmの浅い炉址がある。

遺物は住居址の同一個体ごとに散在する。床面直上位置する例が多い。石皿または配石は北側柱穴の西側に位置する。

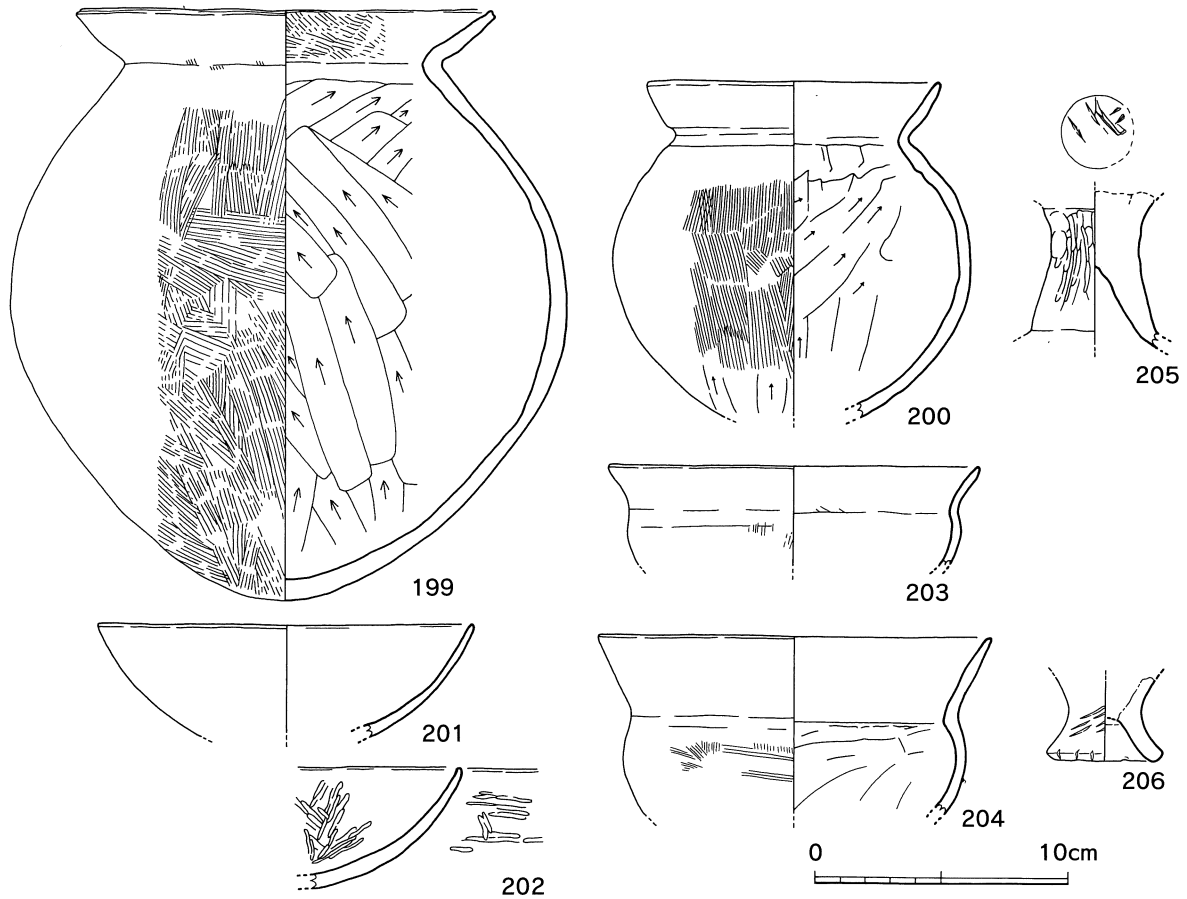
出土土器 (第47図)

199は布留系の甕である。胴部は球形で口縁部はくの字状に屈折する。口縁部が外面側に肥厚する。口唇部は方角型で未調整。法量は口径16.6cm、胴部最大径21.9cm、器高23.2cmである。口縁部外面と頸部から2cmまでの範囲は縦ハケ後に横ナデ、胴部外面は基本的に縦ハケであるが、上位に横ハケがみられる。口縁部内面は横・斜行ハケ後に横ナデ仕上げ。胴部内面は縦または斜行するヘラケズリで仕上げる。外面下半に赤化部分があり、二次被熱か。200も小型の布留系の甕である。胴部は球形で口縁部はくの字状に屈折する。口縁部が外面側に肥厚する。口唇部は丸く収める。法量は口径11.7cm、頸部径9.3cm、胴部最大径14.2cm、器高約13.6cmである。口縁部内外面は横ナデ、頸部内外面も強い横ナデ、頸部境から胴部2cmまでの範囲は縦ハケ後に横ナデ、その下は基本的に縦ハケであるが、底部外面にヘラケズリで仕上げる。頸部境から胴部側2cmの間はケズリ残し、胴部内面はヘラケズリで仕上げる。201と202は単口縁の碗か小鉢で、内湾状に立ち上がる。201は内外面ナデ仕上げ。底部付近は摩滅している。口径は14.9cm、器高は約5.2cm前後であろう。202は内外面ヘラミガキで仕上げる。203と204は小型の鉢で、ボウル状に立ち上がり、僅かに口縁部が外傾する。頸部がやや絞まる。203は口縁部の内外面が横ナデ、他はナデで仕上げる。胴部に僅かに縦ハケが認められる。法量は口径は14.8cm、胴部最大径13.2cmである。204は口縁部の内外面は横ナデ、頸部外面は強い横ナデ、胴部外面は縦ハケ後にナデ仕上げ。胴部内面はヘラケズリ後にナデ仕上げ。法量は口径15.6cm、頸部径は13cm、器高は約11cm前後か。205は

高坏の脚部破片である。脚の側方観は弓形に抉れるようなスタイルである。上面の破損部には坏部との接合に際し、刻み目をいれている。調整は外面が横ナデ後に縦ミガキ、内面の最上部は横ナデでその下が縦ナデ仕上げである。V様式系か。205は脚台式の製塩土器である。外面は左下がりの平行タキ後にナデ、内面はナデ仕上げ。底径は4.5cmである。



第46図 SH16実測図



第47図 SH16出土土器実測図

SH17 (第48図)

SH17は南北に長い調査区の北部に位置する。490cmの西壁とSD 5に切られた北壁・南壁が一部残存している。幅約220cmのSD 5の東側部分にSH17の東側部分がみられなかったので、SD17の平面形はほぼ方形と推定される。したがって概ね東西方向の幅も490cm前後と推定されるので、面積は24.01㎡となる。検出面から床面までの深さが最大で約20cmである。主柱穴は確認できなかった。住居址の中央から北西よりに、長軸180cm、短軸160cmの壁状の立ち上がりを持たない浅い皿状の窪みがある。この皿状の浅い窪みの中央に径55cm、深さ10cmの炉がある。浅い窪みから炉址にかけて炭化物が多量に観察される。

遺物は炉址の北東部分からその隣接部分に集中的に位置する。

出土土器 (第49図)

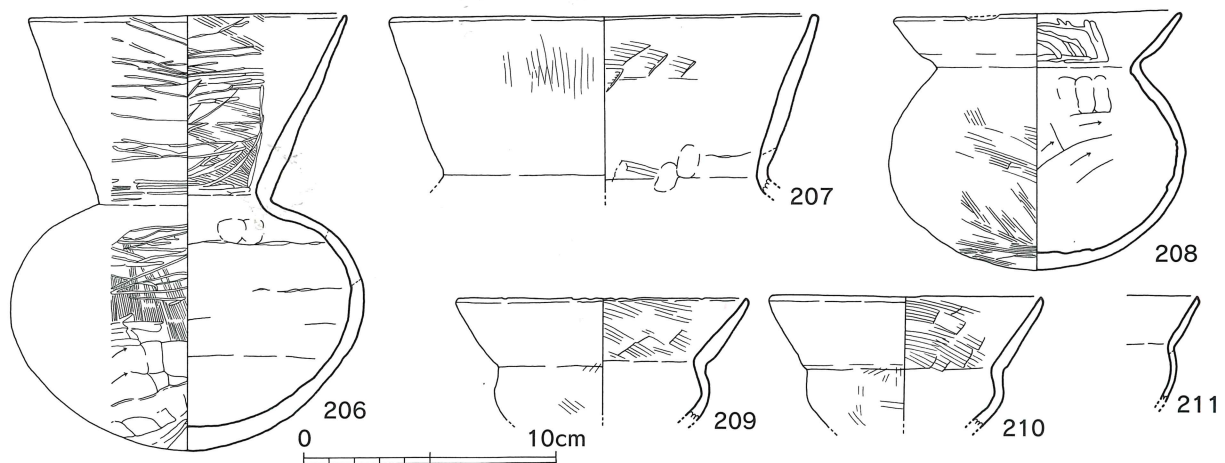
206は小型丸底壺風の器形をもつ直口壺である。横にやや長い楕円形の胴部から外傾する口縁部が立ち上る。頸部の外面側は直角に近い角度で鋭く屈折し、頸部内面側は丸く成形している。内面には1.5cm前後の積み上げ痕が残る。口縁部内外面はヘラミガキであるが、内面は斜行ハケ後である。胴部外面は上部が縦ハケ後にヘラミガキ、胴部下部はヘラケズリとヘラミガキである。207も直口壺の口縁部破片である。外面は中央付近が一部縦ハケのみで他は横ナデ、内面も一部横ハケのみで他は横ナデ仕上げ。208は小型壺である。丸みをもった算玉状の胴部から外傾する口縁部が立ち上る。口縁部下半側が肥厚する。胴部外面下半に煤が付着する。口縁部は外面が横ナデ、内面はヘラミガキ、胴部外面は横ナデと不定方向のハケ、胴部内面はヘラケズリで仕上げる。209～211はほぼ同形の小型丸底壺である。胴部の上部で軽く内傾し、口縁部が外方に立ち上る。口縁部外面の下端が

肥厚する。調整は口縁部内面に斜行ハケ、胴部外面に若干の斜行ハケが観察され、他はナデまたは横ナデである。3例とも同様な調整と思われるが、211のみ口縁部内面にハケはない。212～215は小型の鉢である。212と213は胴部がボウル状に立ち上がりつつ頸部でしまり、外傾する口縁部が立ち上がる。212は胴部内面がヘラケズリであるほかはナデ調整で仕上げる。213は外面が不定方向のハケで、口縁部内面は横ハケ、胴部内面はナデで仕上げる。214は外傾する胴部から短く胴部上部に屈折し、外傾する口縁部が立ち上がる。調整は外面は不定方向のハケとナデ、胴部外面のナデ、内面は口縁部では中央部分にハケが残り、他はナデで仕上げる。215は214と同様に胴部の上位に屈折する肩がつく。口縁部は短く外傾する。口縁部内面・胴部外面上位・口縁部は横ナデ、胴部内面上位はヘラミガキ、胴部下位は丁寧なナデで仕上げる。胴部外面にタタキ状のものかと思われる。216は高坏の坏部破片である。坏部の下部が水平に近く、広く外傾する上部の口縁となる。口縁部外面は最初にナデ、中位から坏部下半にハケ、その後中位を部分的に縦ミガキで仕上げる。内面もナデの後、斜行ハケを行い、その後、

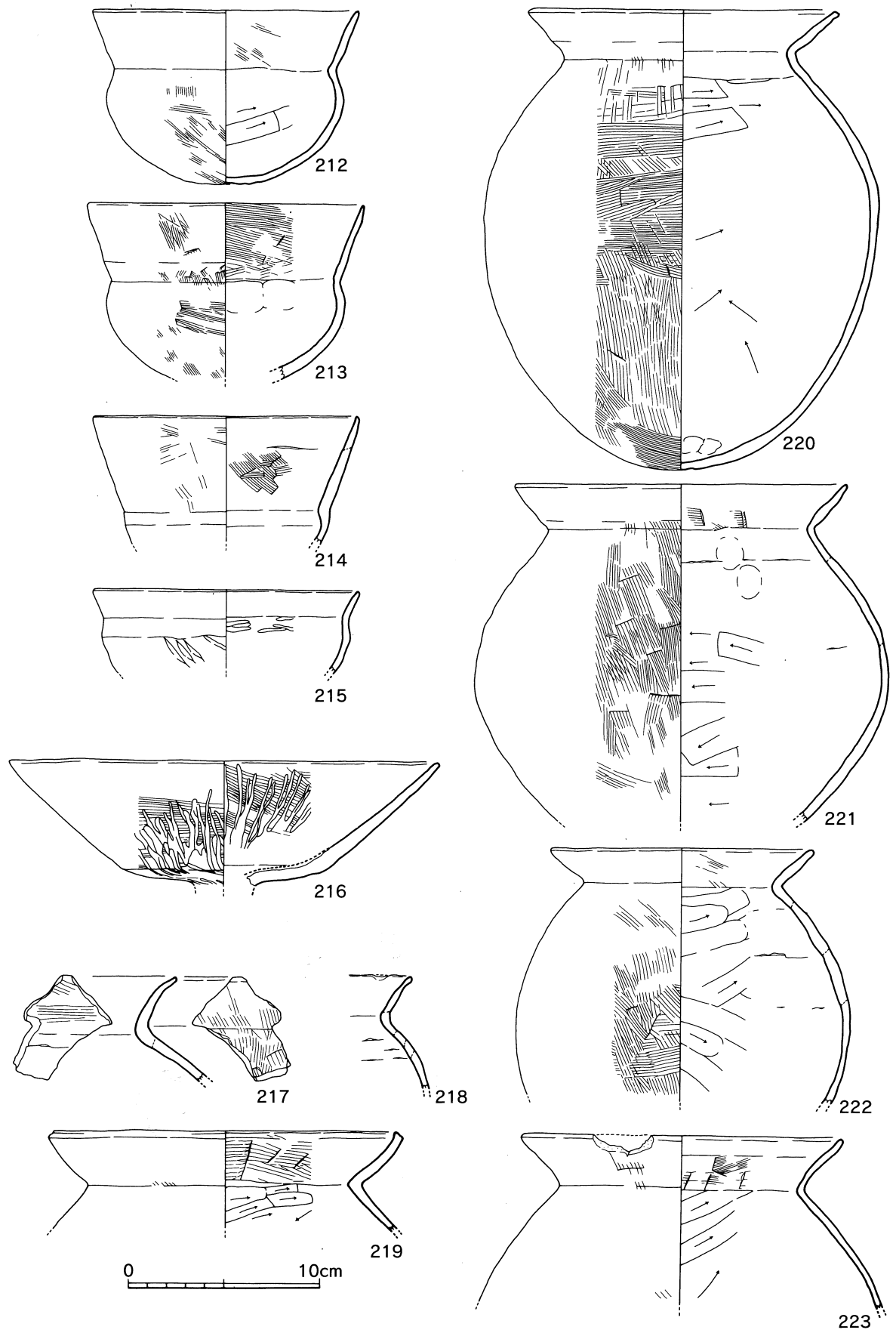
縦ミガキである。217はV様式系の甕の口縁部破片である。外面は縦ハケ、口縁部内面は横ハケ、胴部内面はナデで仕上げる。118は甕の口縁部破片である。内外面はナデで仕上げる。内面に接合痕が残る。119は布留系の甕口縁部破片である。口縁部はくの字上に屈折するが、やや内湾する。外面は一部に縦ハケ痕が残るが概ね横ナデ、口縁部内面は横ナデ、胴部内面はヘラケズリで仕上げる。220～223は布留系の甕で、口縁部に一部ハケ痕を残すものの概ねナデ、胴部外面は縦ハケ後に上半に横ハケ、胴部内面はヘラケズリで仕上げる。



第48図 SH17実測図



第49図 SH17出土土器実測図(1)



第50图 SH17出土土器实测图(2)

第2節 その他の遺構と遺物

SD1 (第51図)

SD1は南北に長い調査区の中部の東部の調査区境に位置する。東方は調査区外のため、全長は不明であるが、SD1の西端部から調査区境までの長さが165cm、最大幅が66cm、深さが10cmの規模をもつ。南北からの勾配は緩やかで、浅い皿状である。遺物は大破片が多い。内部の覆土は焼土・炭が多い。このようなことから水路等の溝ではないと考えられる。覆土と遺物から古墳時代前期の遺構である。

出土土器 (第52図)

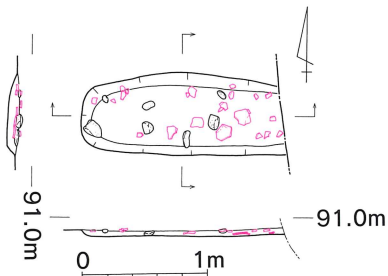
224は手づくねで成形したミニチュア土器である。外湾気味にまげており、指頭圧痕が顕著である。

SD2 (第3図)

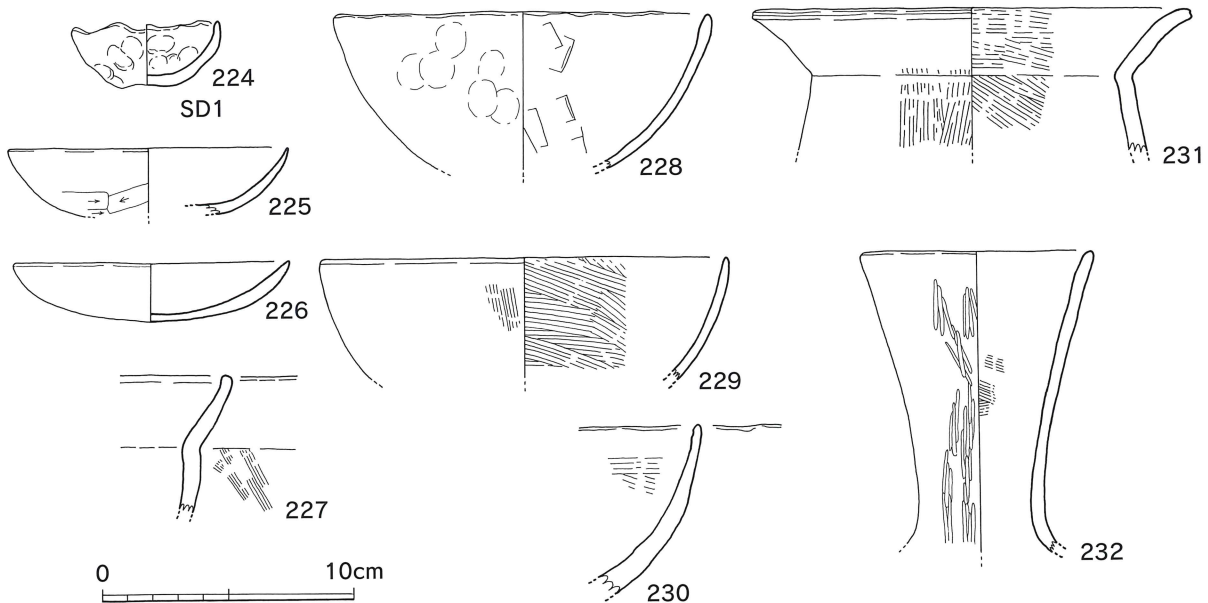
SD2は南北に長い調査区の北部に位置し、調査区東西境に延びる。したがって全長は不明であるが、全長は800cm、最大幅200cm、深さ50cmの規模を有している。溝内堆積物は大小の礫が多い。遺物はこの中に混在する状況であった。

出土土器 (第52図)

225と226は小皿である。225は内外面がナデ、226は皿部下半がヘラケズリと内面が丁寧なナデのほかは横ナデである。227は小型鉢の口縁部破片である。直口気味の胴部から僅かに外傾する口縁部立ち上がる。口縁部は僅かに内湾気味である。228～230は碗の破片で、内湾しながら立ち上がる。228の外表面は成形による指頭圧痕が残り、その後ナデ、内面は工具による調整後ナデ仕上げ。229の外表面はハケ後にナデ、内面は横・斜行ハケで仕上げる。230は外表面は成形による指頭圧痕が残り、その後ナデ、内面も成形後に粗い横ハケとナデで仕上げる。231は内傾する胴部から外反する口縁部となる。口縁部外表面は横ナデ、



第51図 SD1実測図



第52図 SD1・SD2出土土器実測図

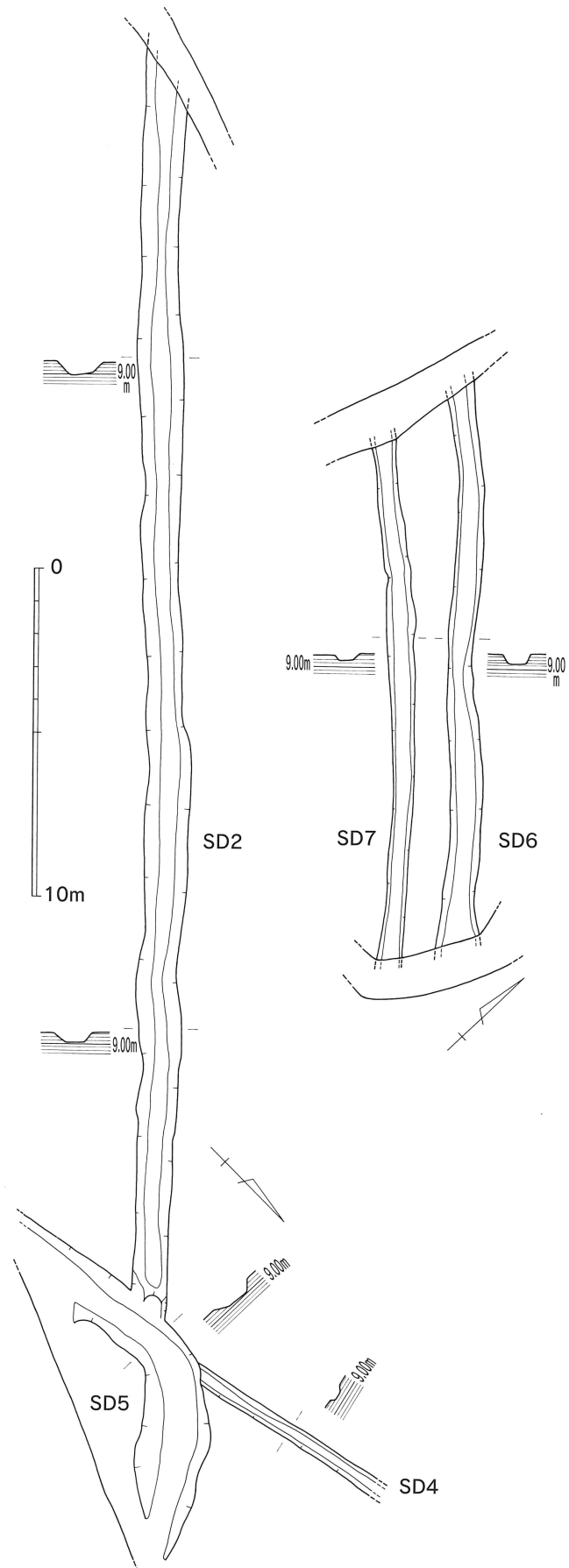
胴部外面は縦ハケ、口縁部内面は粗い横ハケ、胴部の内面は斜行ハケで仕上げる。232は長頸壺の破片で、おそらく球形の胴部から逆撥形に細長く開く口頸部である。外面はナデ後に縦方向のヘラミガキ、内面はハケ後にナデ仕上げ。

SD 2 (第53図)

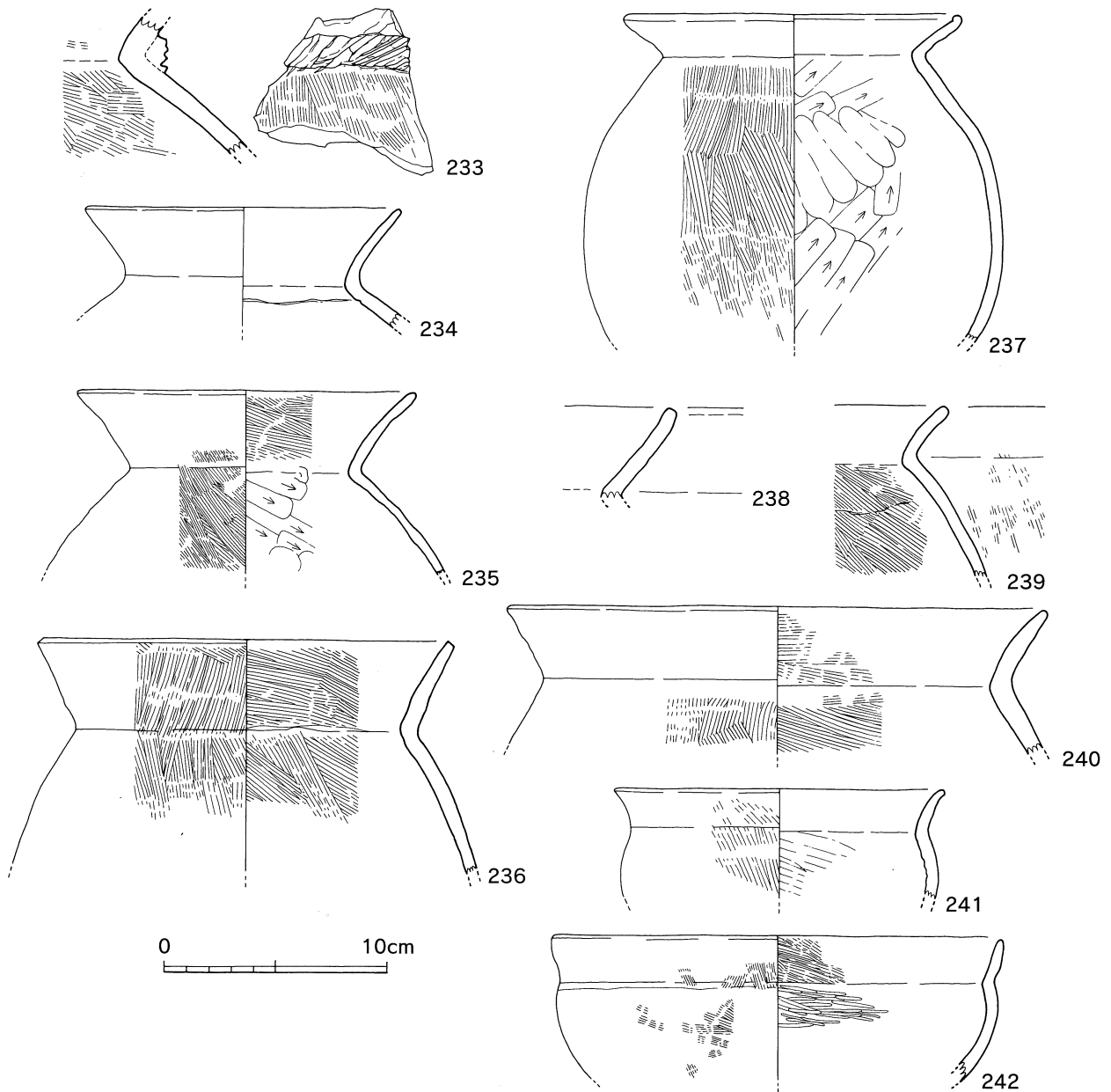
SD 3 はほぼ調査区の南北に沿って延びている。北端はSD 5 に合流し、南端は調査区南部の東側壁に向かって延びる。北端のSD 5 との境界部分の断面形が鞍状となり、遺構検出面は低く、溝底より高くなるなど取水口となっている。出土遺物から15世紀代の溝か。

出土土器・陶磁器・その他 (第54・55図)

233は壺の頸部・胴部付近の破片である。外面は縦ハケ後に頸部へ貼りつけの帯をめぐらせている。帯の上面は平坦で、あるが斜行する刻みがある。この帯の加殖によって頸部が分厚くなり、破損しやすい部分が補強されと理解できる。内面は横ハケで仕上げる。234はくの字形に屈折する甕の口縁部破片である。頸部の屈折部は内外ともに丸みを帯び、内面に接合部が沈線状になっている。調整は内外面ともナデである。235はおそらく球形胴部からくの字状に屈折する口縁部が立ち上がる。調整は口縁部外面は斜行ハケ後に横ナデ、胴部外面は斜行ハケ、胴部内面は右下がりのヘラケズリで仕上げる。236は長胴形の胴部から頸部で絞まり、外傾する口縁部が立ち上がる。口唇部に面があり、未調整である。口縁部外面は横ナデ後に縦ハケ、胴部外面は縦ハケ・斜行ハケである。237は球形の胴部からくの字状に屈折する口縁部をもつ布留系の甕である。口唇部を丸くおさめ、内側に沈線を施す。口縁部の調整は内外面とも横ナデ、胴部外面最上部1.5cmまでは縦ハケ後に横ナデ、その下は縦ハケで仕上げる。胴部内面の上半はヘラケズリ後にナデ、下半もケズリで仕上げる。238もくの字状の甕破片である。内外面とも横ナデ。239も同様な甕破片。口縁部内外面とも横ナデ、胴部外面の上半は縦ハケ後に横ナデ、その下半が横ナデ、胴部内面は斜行ハケ後にナデ。240大型長胴形の在地系の甕であ

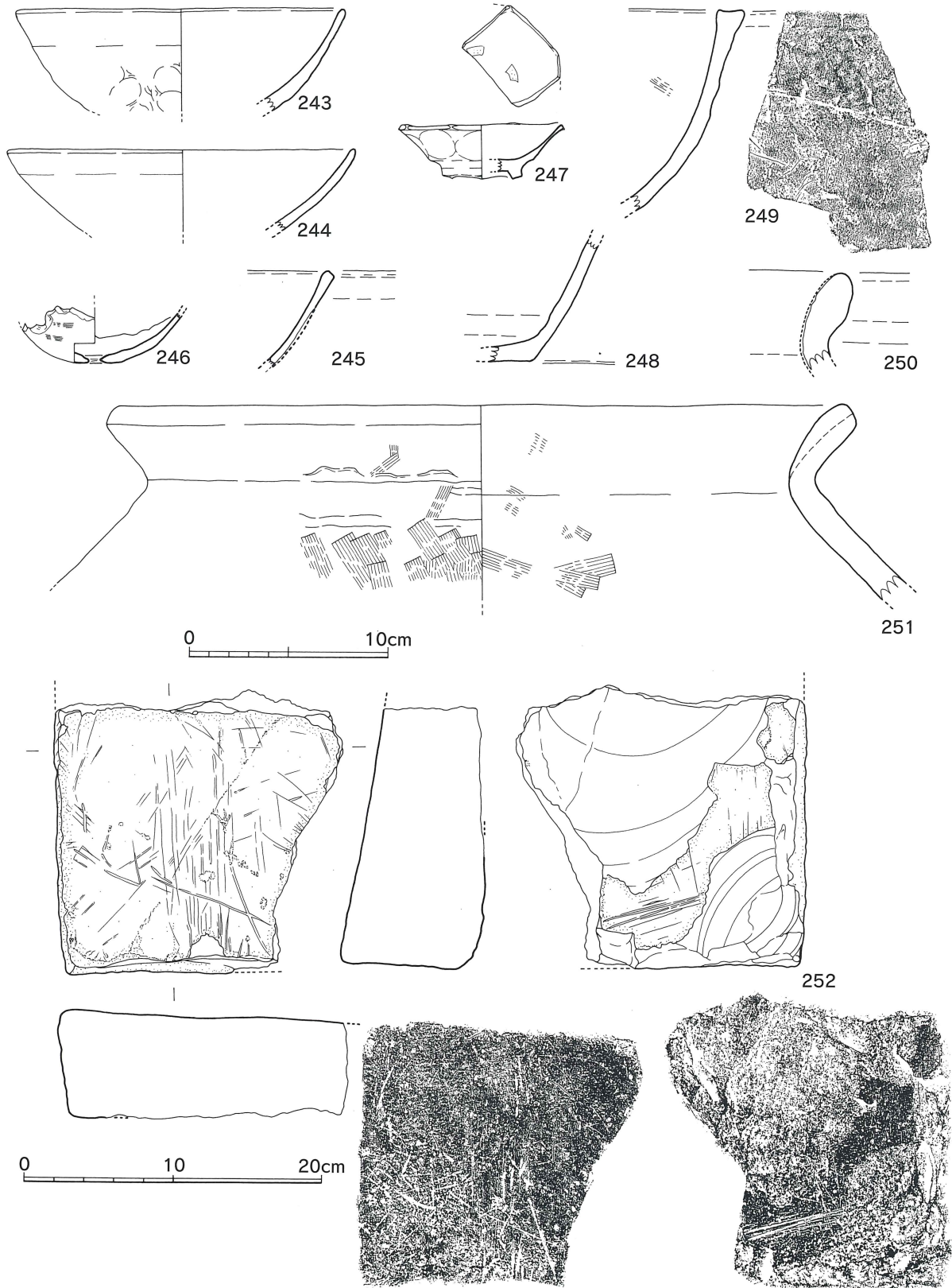


第53図 SD 2・SD 6・SD 7実測図



第54図 SD3出土土器実測図

と思われる。内傾する胴部上半から外傾する口縁部が立ち上がる。口縁部は外面が縦ハケ後に横ナデ、内面はナデの後に横ナデ、胴部外面は縦ハケ、内面は横ハケ後に横ナデ・斜行ハケで仕上げる。241は小型の鉢と考えられる。口縁部は、外面と胴部の境界が不明瞭。口径は15.8cm。外面は口縁部から頸部にかけては縦ハケ後に横ナデ仕上げ。内面は横ハケ後、斜行ハケで仕上げる。内面の粗い斜行ハケは、あるいは貝殻条痕か。242はボウル状の胴部から短く口縁部が立ち上がる。外面は縦ハケ後にナデ、内面は口縁部が斜行ハケ語にナデ、胴部内面は横ミガキで仕上げる。243は瓦質土器の碗で、成形は型づくり。内面は平滑なナデ、口縁部外面の上半は横ナデとナデ、その下は未調整。244は碗で、成形は積み上げ。内外面はナデ仕上げ。245は瓦質土器の碗で、成形は型づくり。内面は平滑なナデ、外面は摩滅している。246は碗の底部破片か。底部を焼成後に穿孔している。外面は縦ハケ後にナデ、内面はナデ仕上げ。247は中国製の白磁八角形小坏で、口縁部の上・中位に施釉、口縁

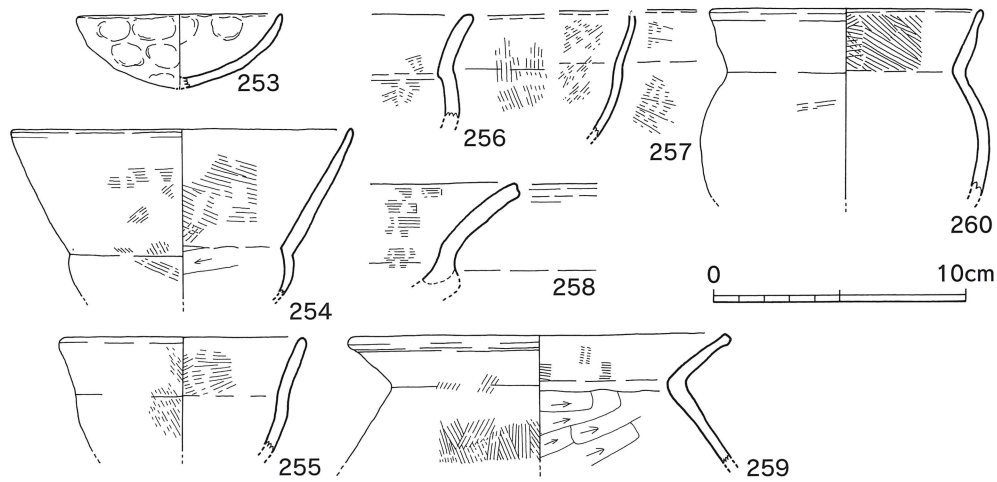


第55図 SD3出土土師器・白磁・石製品

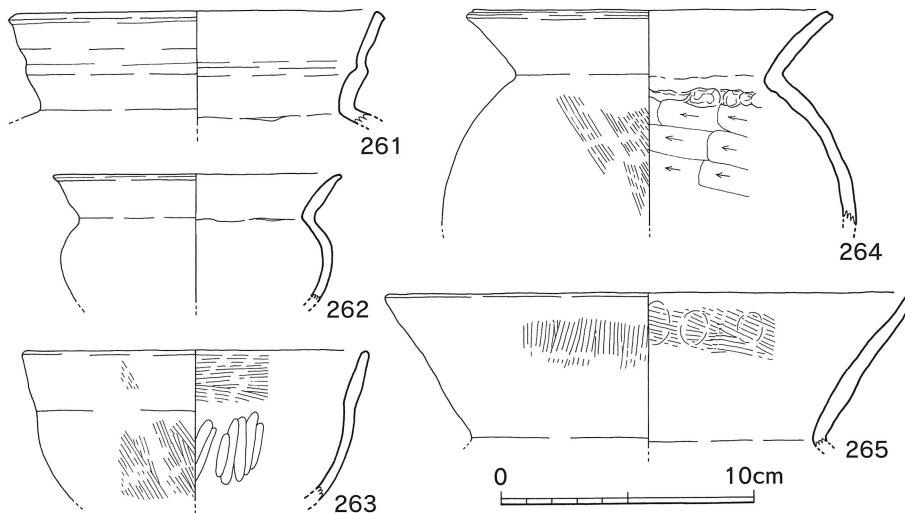
部の下位から底部にかけてが露胎である。施釉は乳白色である。成形は轆轤で八角系、脚は4本と推定される。248は瓦質土器の鉢である。外面は摩滅し、内面は横ナデである。249は鉢の口縁部破片である。器形は内湾しながら上方へ立ち上がる。口唇に幅があり、僅かに窪む。口縁部の上半は未調整、下半はナデ、内面は斜行ハケ後に横ナデ仕上げ。250・251は瓦質土器である。250は甕の口縁部破片。口唇部・口縁部外面は横ナデ、内面は剥落する。251は口縁部から頸部の破片である。口唇部は横ナデ、口縁部外面はハケ後にナデ、頸部から胴部外面はハケ後にナデ仕上げ。内面は横ハケ後にナデ仕上げ。

石器 (第55図)

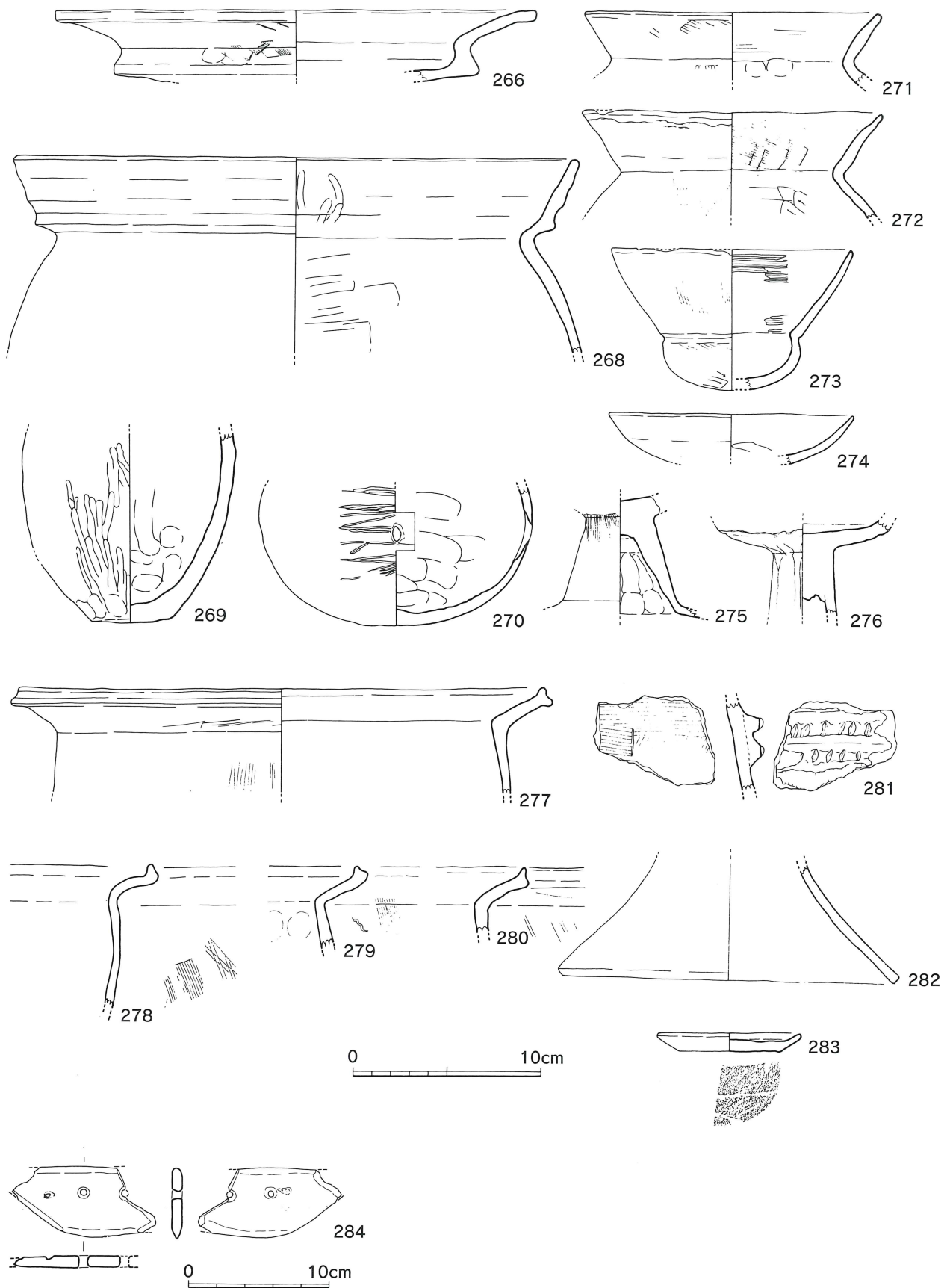
252は砥石である。本来長方形であったと推定される。直角部分が残る。厚さは6.75cmである。琢磨面には鋭い擦痕が残る。



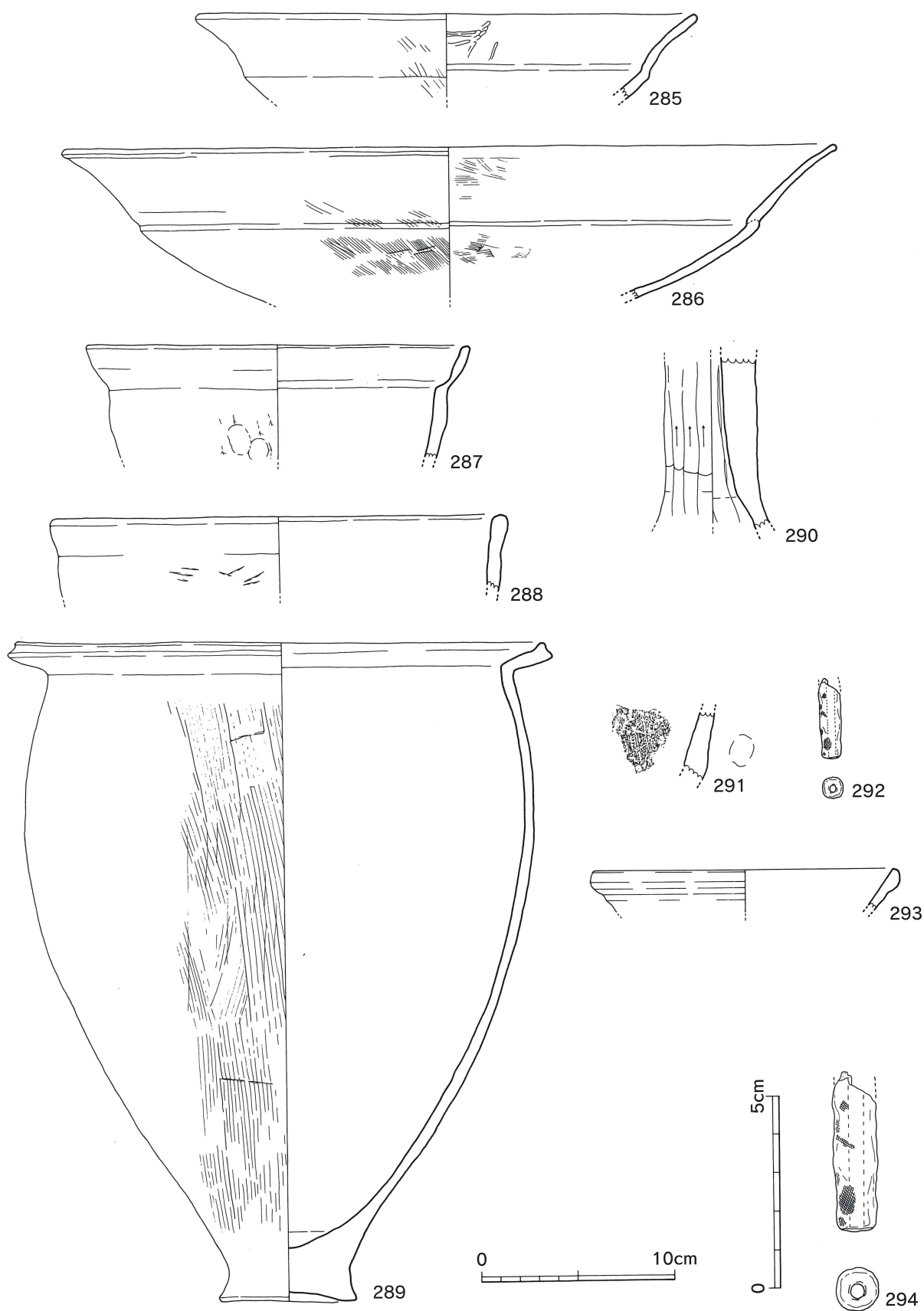
第56図 SD4出土土器実測図



第57図 SD5出土土器実測図



第58図 表面採集の遺物



第59图 II区出土土器·白磁·土锤实测图

SD4 (第53図)

SD4はほぼ調査区の北半にあり、SD5に接続する小流路である。SD5の屈曲部分から北方に向かって延びる。北端はSD5に合流し、南端は調査区南部の東側壁に向かって延びる。幅は50cm、深さ20cm、である。

遺物 (第54図)

253は手づくねの小皿である。内外面がナデである。法量は口径8.2cm、器高4cmである。254は小型丸底壺である。小さく碗形の胴部から、長く外傾する口縁部が付く。法量は口径18.3cm、頸部径11.3cmである。調整は、口縁部の上部が内外面横ナデ、口縁部の中位から下位は外面が横ハケ後にナデで、内面は横ハケ・斜行ハケである。胴部外面は斜行ハケ後にナデ、内面はヘラケズリ。256は小型の壺で、ボウル状に胴部が立ち上がり、頸部で内側に湾曲する。257は小型の鉢であり、胴部がボウル状に立ち上がり、緩やかに口縁部に移行する。調整は内外面とも粗い縦ハケ・斜行ハケ後にナデ仕上げ。260は小型の壺である。15.3cmの胴径を測る球形の胴部から、外傾する口縁部が立ち上がる。口縁部の外面はナデで内面は斜行ハケ、胴部内面は丁寧なナデ。

SD5 (第53図)

SD5はほぼ調査区の北半にあり、大きく、くの字形にカーブしながら調査区外に延びる流路である。幅は210cm、深さ30cm、である。

遺物

261は二重口縁の壺であるが、山陰系と推定される。262・263は小型の壺である。263は胴部内面にナデ後にヘラミガキで仕上げる。264は布留系と思われる。265は大型直口壺である。

表面採集の遺物

266は二重口縁の壺で、段が鍵形に屈折する。268は山陰系の壺である。口縁部の内外面ヘラミガキである。269は小型の甕で、外面に粗い縦方向のヘラミガキ、内面と底部外面はナデ仕上げ。270は壺の胴部破片。外面は粗い横ヘラミガキ、内面は指ナデで、外面側からの穿孔がある。271と272は布留系の甕。273は小型丸底壺で、口縁部が大きく延び、開く。274は皿で、内外面ナデ。275は器高の低い高坏の脚部。あるいは台付鉢の脚部か。裾部が明瞭に屈折する。坏部の見込み部分はナデ、外面の上位がハケ、下半がナデ、脚部の内面は縦の指圧痕で仕上げる。276は高坏の坏部から脚部にかけての破片で、ナデ調整。277～280は弥生時代中期須玖Ⅱ式並行の甕破片である。278・279は口縁部の内外面横ナデ、胴部外面縦ハケ、胴部内面ナデ仕上げ。281は壺の胴部破片。282はSD1から出土した高坏の脚部破片である。内外ナデ仕上げ。283は中世の土師器小皿で、底部糸切り離し。284は石包丁。285・286はⅡ区の包含層出土の高坏の坏部である。坏部上半と下半の境界が僅かに鍵形に屈折する段がつく。内外面とも斜行・横のハケ調整後にナデ仕上げである。285は復元口径26cmで、286は復元口径が41cmになる大型例である。287はⅡ区の包含層出土の鉢である。口縁部の内外面とも横ナデ、胴部の内外面はナデ仕上げである。288はⅡ区の包含層出土の鉢である。口縁部の内外面とも横ナデ、胴部の外面は指おさえで、内面はナデである。289はⅡ区の住居址が僅かに残存していた部分に押し潰れていた状況で出土した須玖Ⅱ式並行の甕である。大きさは、器高33.8cm、口径28.3cm、頸部径24.3cm、胴部径26.5cm、底部径7cmである。290は高坏の脚部破片である。外面ヘラケズリ、内面は横ナデ。291はⅡ区包含層出土の製塩土器。年代は8世紀～9世紀の六連式で焼塩用。内面は布目、外面は指押さえナデで仕上げる。293はⅡ区包含層出土の玉縁の白磁である。年代は12世紀～13世紀。294はⅡ区包含層出土の土錘である。法量は長さ4.15cm、直径1.1cm、孔径0.4cmである。布目痕あり。

第4章 まとめ

1 遺構

岩金遺跡で検出した遺構は古墳時代前期の布留系土師器を含む時期である。これまで宇佐平野の古墳時代前期の遺跡としては川部・高森古墳群にある古墳1期の赤塚古墳や古墳2期の免ヶ平古墳が知られていた。ところが対応する集落遺跡が近隣地域に未発見であった。唯一、駅館川から2.7km西へ入った中位河岸段丘上に小部遺跡がある。今回検出された岩金遺跡の集落跡は約0.3km離れた駅館川を挟んで中位の段丘崖上に川部・高森古墳群を臨む場所に位置しており、最も関係の深い集落の一つであったと推定できる。

しかし古墳時代の遺構は17棟の住居跡からなるが、全て同一の時期ではなく数期にわたる住居跡群である。その一方で、住居の重複は顕著ではない。住居跡の平面形は方形、または長方形を基本とする。ほぼ全景が俯瞰できる住居跡を参考にする、長方形の場合が2本支柱穴、正方形の場合が4本支柱穴という組合せである。こうした2種類の建物構造に格別な面積上の違いはみられない。

住居跡内部の覆土は流入土と推定しており、しかも住居跡間に切りあい関係が少ないことから住居廃絶後に埋まりきらずにいたことが理由の一つであろう。

2 遺物

遺構と遺物の時期について整理しておこう。弥生時代後期から古墳時代前期の土器編年については高橋徹の編年案がある(高橋2001)。この編年案に岩金遺跡の土器を照らすことで時期区分を行なう。

弥生時代終末期 SH4とSH9・SH10・SH14・SH15が該当する。SH4・SH9の甕には内外面ハケで、胴径が口径より大きい長胴甕がある。またこの長胴甕は底部がやや平底風であり、SH10の鉢も平底風である。SH4には台付き鉢や高坏の脚部がハの字状に開く短い脚部がある。

古墳Ⅰ期 SH6・SH11・SH12が該当する。SH6の土器には畿内5様式系の壺があり(103)、頸部が筒状になる。小型丸底風の鉢の口縁がやや内湾する(104)。SH12の土器は高坏の脚部がラッパ形に開かず、緩やかに広がる(167)。またSH11の小型の器台～台付き鉢の脚部に穿孔がある(166)。

古墳Ⅱ期 SH3・SH7・SH8・SH16・SH17が該当する。SH3の高坏の内面が水平である。SH8の長胴甕は、口縁が外傾し、かつ直線的である(141)。同じくSH8の広口の小型丸底風の鉢は、口縁部の高さに対し胴部の高さがやや高い(144)。SH7の高坏の内外面にミガキが残る(137・138)。

古墳Ⅲ期 SH1・SH2・SH5が該当する。SH1の高坏の脚部がやや長くハの字状に屈曲する。SH2の高坏の坏部の口縁が直線的。布留系甕の胴部内面調整が斜行するヘラケズリ。SH5の小型丸底壺は、外傾する口縁が直線的で胴高より長い。また布留系甕の口縁部をナデ調整することにより、外面がやや膨らむ。

以上のように岩金遺跡の遺構と遺物は弥生終末期から古墳Ⅲ期まで続いている。また赤塚古墳が古墳Ⅱ期、免ヶ平古墳が古墳Ⅲ期に並行すると考える。

註

高橋徹は概ね弥生終末が庄内式並行、古墳Ⅰ期が纏向3式、古墳2期を纏向4式に比定している。

参考文献

高橋徹2001「大分の弥生・古墳時代土器編年」『大分県立歴史博物館研究紀要』2、大分県立歴史博物館、1～32

写 真 图 版



SH14. 赤色顔料散布状況



SH14. 190



SH2. 44



SH2. 45



SH2. 55



SH2. 62



SH9. 151



SH16. 199



SH17. 206



SH17. 208



SH17. 220



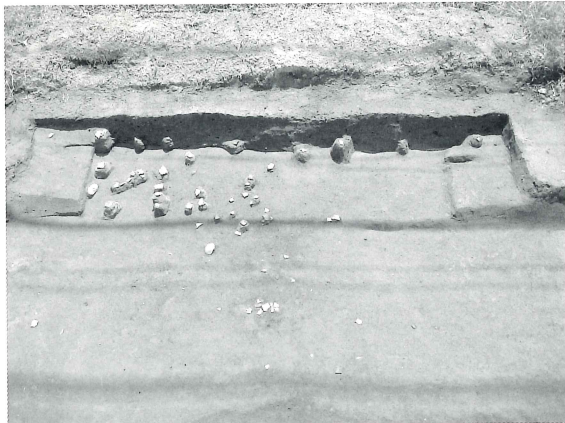
SH17. 222



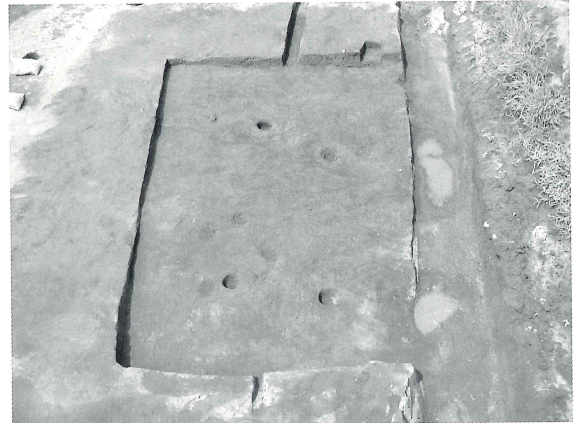
SH1 全景



SH2 全景



SH3 全景



SH4 全景



SH5 全景



SH6 全景



SH7 全景



SH9 全景



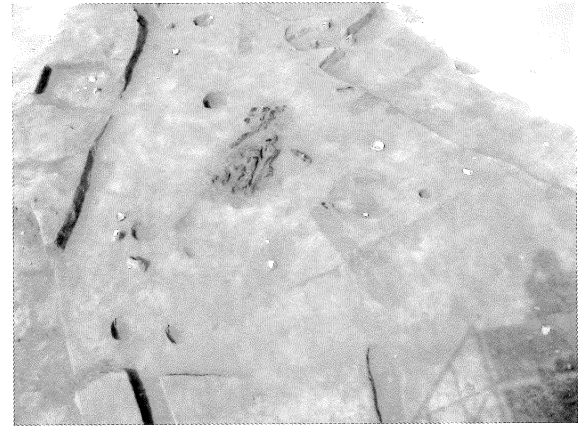
SH10 全景



SH10 遺物出土状況



SH13 全景



SH14 全景



SH15 全景



SH16



SH12 炭化材の出土状況



SH5 遺物の出土状況



SH6 遺物の出土状況



SH14 砥石の出土状況



SH14 遺物の出土状況



SH10 遺物の出土状況



SH14 遺物の出土状況 高坏



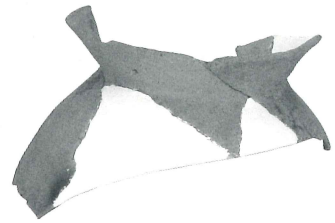
SH16 遺物の出土状況



SH1 · 1



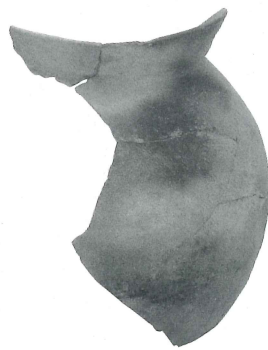
SH1 · 2



SH1 · 3



SH1



SH1



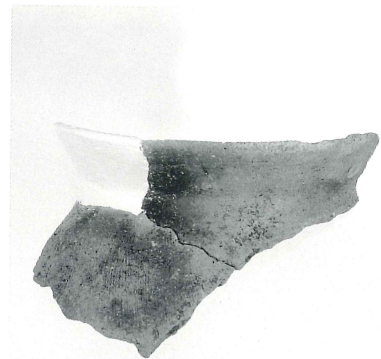
SH1



SH1



SH1



SH1



SH1



SH1



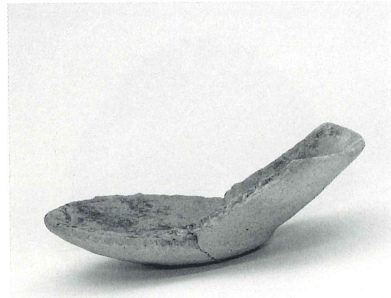
SH1



SH 1 · 19



SH 1 · 21



SH 1 · 22



SH 1 · 23



SH 1 · 24



SH 1 · 25



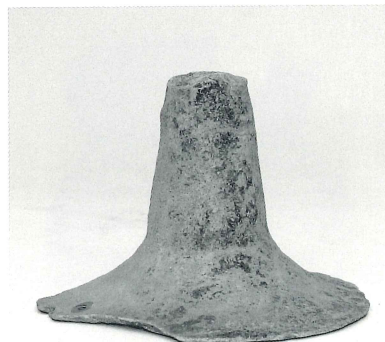
SH 1 · 26



SH 1 · 27



SH 1 · 28



SH 1 · 30



SH 1 · 31



SH 1 · 35



SH1 · 36



SH1 · 37



SH2



SH2 · 43



SH2



SH2



SH2 · 46



SH2 · 48



SH2 · 49



SH2 · 50



SH2 · 52



SH2 · 55



SH2 · 59



SH2 · 60



SH2



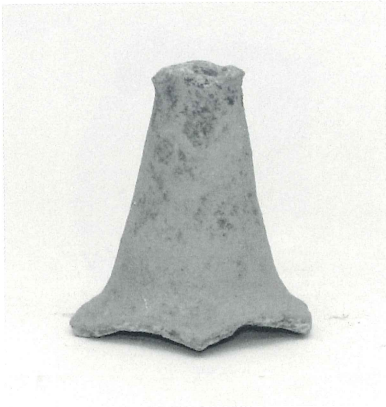
SH2 · 62



SH2 · 63



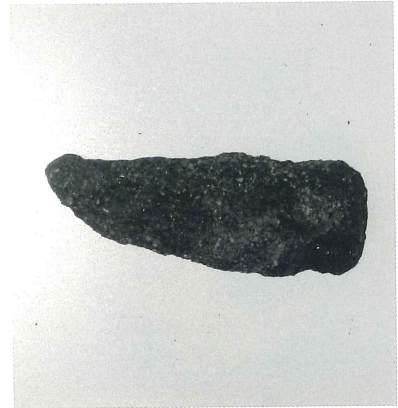
SH2 · 64



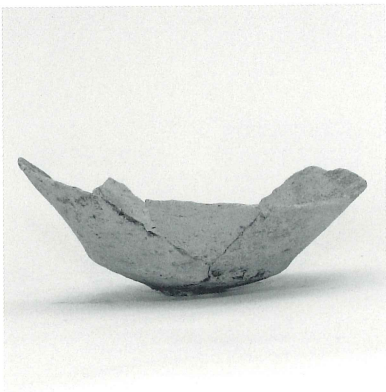
SH2 · 65



SH2 · 66



SH2 · 67刀子



SH3 · 76



SH3 · 77



SH4 · 78



SH4 · 80



SH4 · 82



SH4 · 85



SH5 · 86



SH5



SH5



SH5 · 89



SH5 · 90



SH5 · 91



SH5 · 92



SH5 · 93



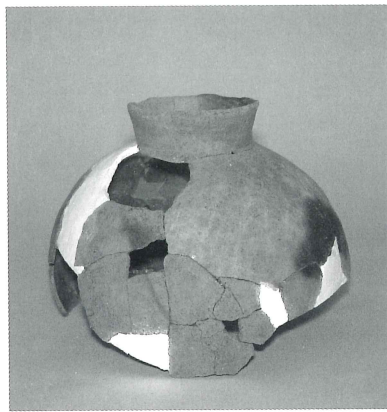
SH5 · 96



SH5 · 98



SH6 · 100



SH6 · 102



SH6 · 103



SH6 · 104



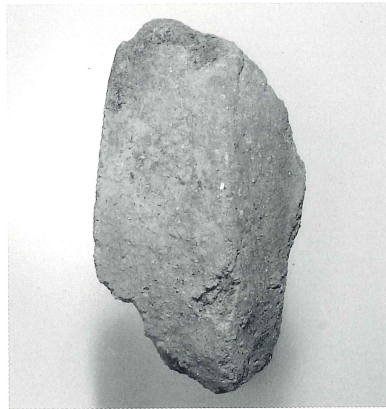
SH7 · 106



SH7



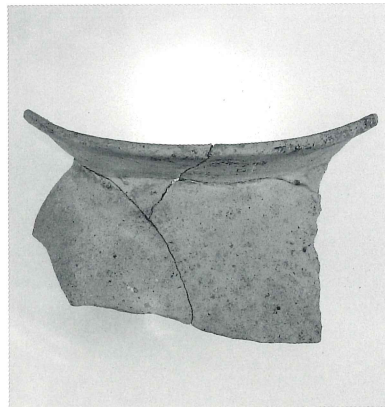
SH7 · 109



SH7 · 110



SH7 · 111



SH7 · 113



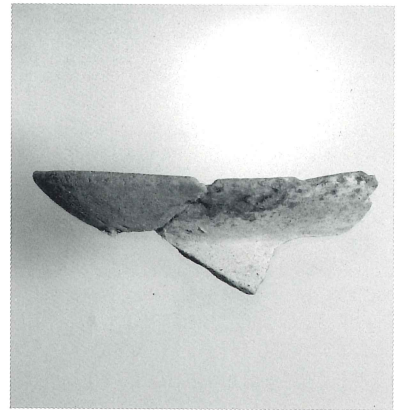
SH7 · 114



SH7 · 115



SH7 · 116



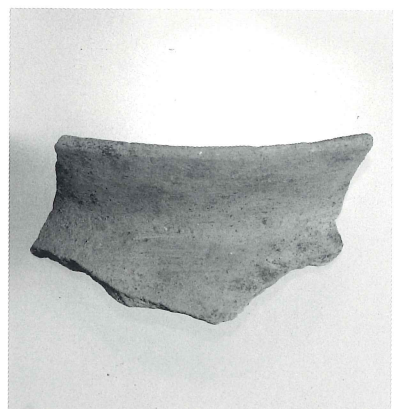
SH7 · 117



SH7 · 118



SH7 · 119



SH7 · 121



SH7 · 123



SH7 · 130



SH7 · 131



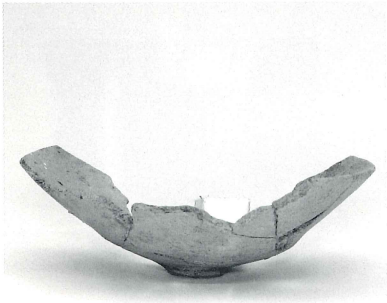
SH7 · 132



SH7 · 133



SH7 · 134



SH7 · 137



SH7 · 138



SH7 · 139



SH7 · 140



SH8 · 141



SH8 · 144



SH8 · 145



SH9 · 146



SH9 · 150



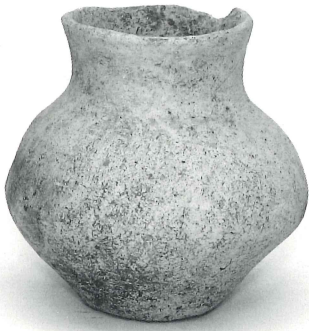
SH9 · 151



SH9 · 152



SH9 · 154



SH10 · 155



SH10 · 156



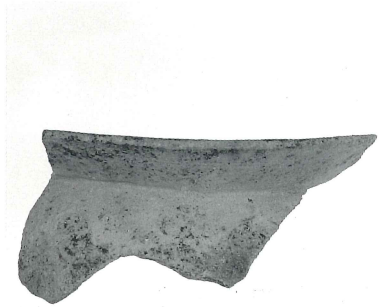
SH10 · 157



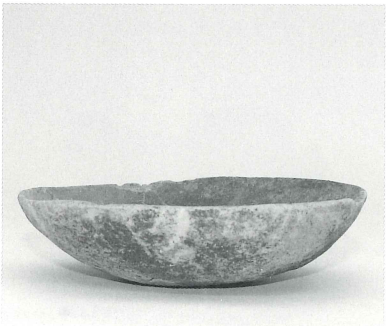
SH10 · 158



SH10 · 159



SH11 · 160



SH11 · 162



SH11 · 163



SH11 · 165



SH11 · 166



SH11 · 167



SH12 · 168



SH12 · 169



SH13 · 170



SH13 · 171



SH14 · 175



SH14 · 176



SH14 · 179



SH14 · 180



SH14 · 181



SH14 · 182



SH14 · 184



SH14 · 185



SH14 · 186



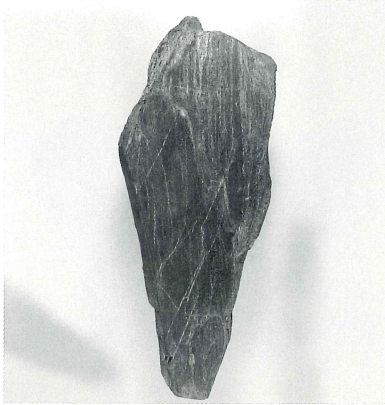
SH14 · 187



SH14 · 188



SH14 · 189



SH14 · 190砥石 (表)



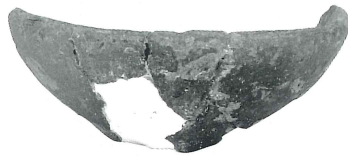
SH14 · 190砥石 (裏)



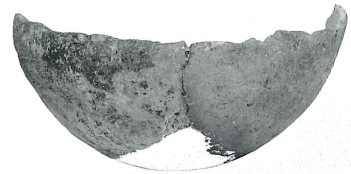
SH15 · 191



SH15 · 192



SH15 · 193



SH15 · 194



SH15 · 195



SH15 · 196



SH15 · 197



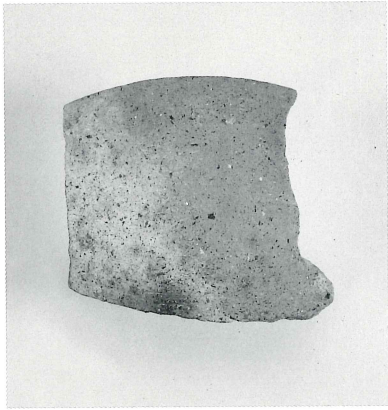
SH15 · 198



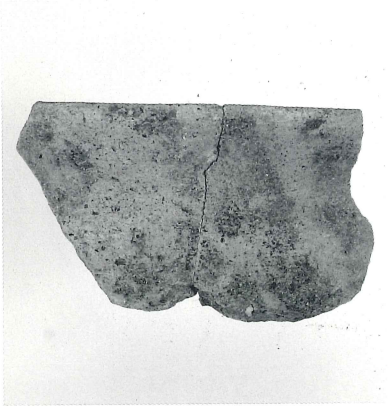
SH16 · 199



SH16 · 200



SH16 · 201



SH16 · 203



SH16 · 204



SH16 · 206製塩土器



SH17 · 207



SH17 · 208



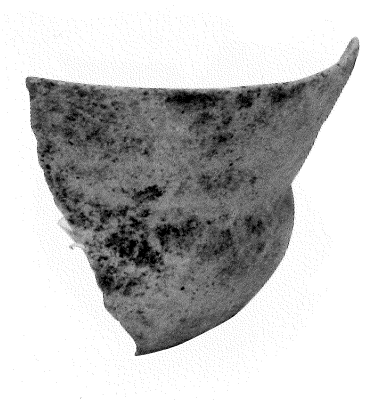
SH17 · 209



SH17 · 210



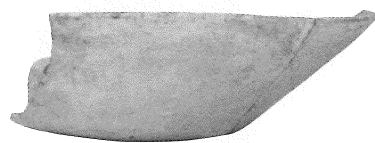
SH17 · 212



SH17 · 213



SH17 · 215



SH17 · 216



SH17 · 219



SH17 · 220



SH17 · 221



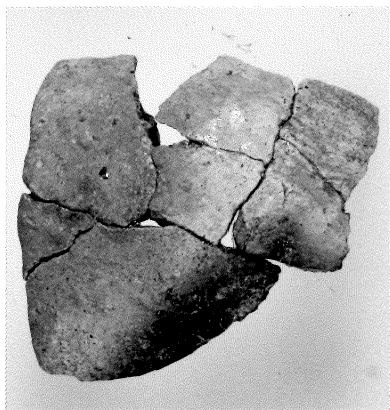
SH17 · 222



SH17 · 223



SD 1 · 224



SD 2 · 228



SD 2 · 229



SD 2 · 231



SD2 · 232



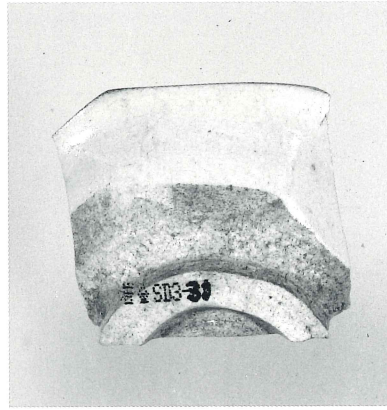
SD3 · 236



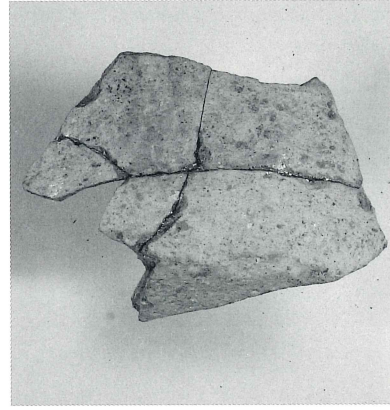
SD3 · 237



SD3 · 243



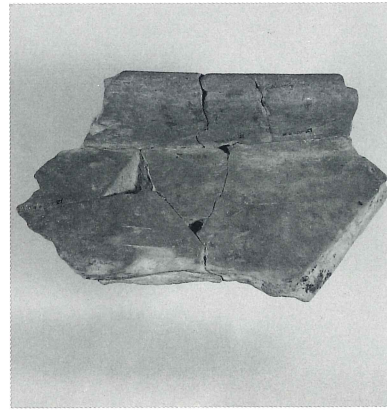
SD3 · 247 (白磁八角形小坏)



SD3 · 248



SD3 · 250



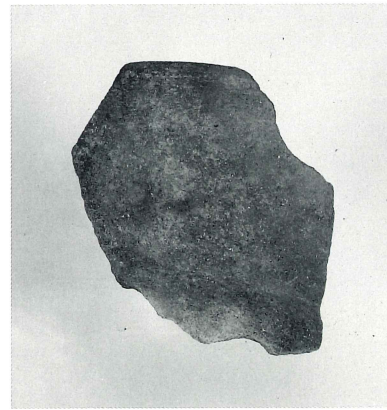
SD3 · 251



SD3 · 252砥石 (表)



SD3 · 252砥石 (裏)



SD4 · 254



SD5 · 264



表面採集269



表面採集273



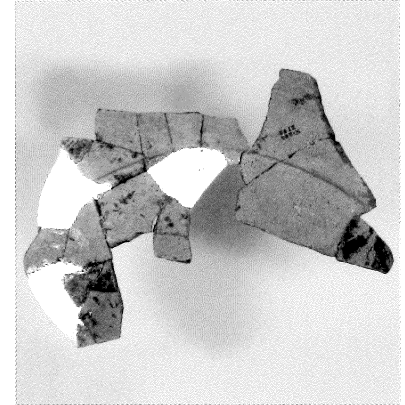
表面採集275



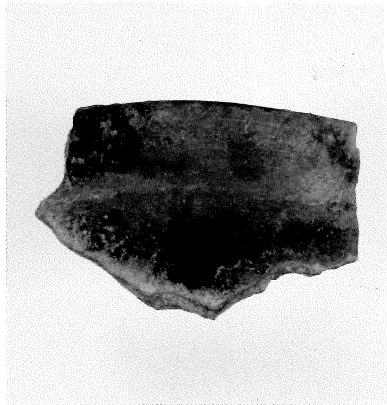
表面採集276



表面採集284 (砲丁)



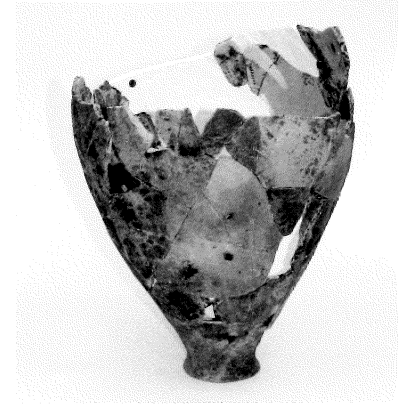
II区包含層289



II区包含層287



II区包含層288



II区包含層289



II区包含層293 (玉縁白磁)



II区包含層294

報 告 書 抄 録

ふりがな	いわがねいせき はくつちょうさほうこくしょ							
書名	岩金遺跡 発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第21集							
編著者名	綿貫俊一							
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター							
所在地	〒870-1113 大分市大字中判田1977番地 TEL 097-597-5675							
発行年月日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 。'。"	東経 。'。"	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
いわがねいせき 岩金遺跡	大分県宇佐市大字 上田字岩金	211	229	33°33'25"89.	131°21'57"36	H160420~ H160815	1940m ²	道路改良
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
岩金遺跡	集落	古墳時代	住居跡	布留系土師器、砥石、顔料			SH14の床面に赤色顔料を確認した。	
要 約	<p>弥生時代終末期と古墳時代前期の集落遺跡。遺構は住居跡17棟からなるが、格別な分布の偏り等は観察されない。遺物は土器・石器・顔料・鉄器と自然遺物からなる。自然遺物は種子がでている。</p>							

岩金遺跡発掘調査報告書
大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第21集

平成19年3月30日発行

編集・発行者 大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870-1113 大分市大字中判田1977番地
TEL 097-597-5675

印刷所 株式会社 明文堂印刷